

『薬箱の灯』

『薬箱の灯』は、昭和のはじめ、越中の汐見町の小さな薬屋「与善堂」で、青木の娘っ子・漑が、置薬箱をひとつずつ、帳面を一枚ずつ、配達のを一本ずつ、数えて、書いて、歩いて、大人になっていく話だ。

『薬箱の灯』 第一季 36 話脚本

- ＞ 季名：第一季「空いた場所」
- ＞ 時代：昭和五年（一九三〇）秋から昭和六年の初雪まで
- ＞ 場所：越中地方の架空の町・汐見町 / 与善堂
- ＞ 形式：日常の人情と小さな笑いを軸にした短編連作
- ＞ 各話尺：約六十秒から百八十秒
- ＞ 編劇方針：逐語訳ではなく、人物関係、場の動き、昭和初期の町場の言葉づかいに合わせた日本語版。

EP01「空いた場所」

内景・与善堂前の間・早朝

店の雨戸が一枚、外されたばかり。

帳場の奥に、修司が使っていた小さな座布団がまだ置いてある。湯飲みの底には乾いた茶の輪。古い鉛筆が配達順路の紙を押さえている。

漑が薬袋を抱えて入ってくる。足が止まる。

宗一が後ろから手を伸ばし、順路紙を抜き取る。

漑：その道、あたしが行く。

宗一：どの道だ。

漑：修司兄ちゃんの道。

宗一は紙を折り、高い引き出しにしまう。

宗一：修司の道なんてものはない。北小路三軒、河口二軒。それだけだ。

漑：なら、北小路三軒と河口二軒、あたしが行く。

宗一：昨夜戻った箱の番号も、まだ写し終わっていない。

漑は座り、帳面を引き寄せる。

漑：今やる。

勢いよく書く。

宗一は薬を量っていて、見もしない。

漑が帳面を押し出す。

宗一が一瞥する。

宗一：三二六。

漑：うん。

宗一：箱は二三六だ。

漑が見下ろす。数字が逆だ。

すぐ墨をつけ、塗りつぶそうとする。

宗一が筆を押さえる。

宗一：間違いの横に書き直せ。消して、なかったことにするな。

漑：数字が二つ入れ替わっただけじゃない。

宗一：薬箱を間違える時も、数字は二つだ。

漑は口を結び、横に書き直す。

外から辰夫の声。

辰夫（外）：漑姉ちゃん！ 金沢行きの汽車、修司兄ちゃんを丸呑みにしたかい？

漑は顔を上げない。

漑：呑んだなら上等。米が浮く。

宗一が短い町内順路を机の端に置く。

漑の目が光り、手が伸びる。

宗一：まず、ついて歩け。

漑の手が宙で止まる。

宗一：渡したんじゃない。

漑は手を引き、数字を写し続ける。

画面は修司の空いた座布団へ。

漑が自分の座布団を半寸だけそちらへずらす。何事もない顔で座り直す。

EP02「灯油は高い」

内景・与善堂前の間・夕方

まだ暮れきらないのに、仕事灯がともっている。

漑が鋏で芯を整える。

漑：昼もつけて、晩もつけて。灯油って井戸から湧くの？

芯を下げる。

前の間が一段暗くなる。

薬棚の前で量っていた宗一が、振り向かずに言う。

宗一：触るな。

漑：見えるよ。

宗一：お前にはな。

暖簾がそっと上がる。

手拭いをかぶった婦人が戸口に立つ。薄暗い店内を見て、通りの知り合いに目をやり、引き返そうとする。

宗一は薬匙を置き、灯芯を上げる。

明かりは敷居の内側まで届く。婦人の顔までは照らさない。

宗一：薬箱の、どこが傷みました。

婦人は立ち止まり、襟元から折れた小さな木の留め具を出す。

婦人：これだけ、直してもらえば。

漉が受け取ろうとする。

婦人は思わず手を引く。

宗一：帳場の角へ。明晩には。

婦人は木扣を置き、足早に去る。

漉が戸口を見る。

漉： どうして昼間に来ないの。

宗一： 木扣を直すのに、そこまで要るか。

漉： ……要らない。

絹江が洗い上げた薬袋を抱えて入る。

絹江： もう少し暗かったら、店じまいかと思ったよ。

漉： 灯油が上がったの。

絹江： 湯も上がったよ。それでも昨夜、来ない人は来ない。

絹江が宗一を見る。

宗一： 忙しい。

絹江： お湯は、忙しい人を待ってくれないよ。

絹江は薬袋を置いて出ていく。

漉は灯油帳を開き、「一匙」と書く。

少し迷って、横に「営業中」と足す。

宗一はそれを見たが、何も言わない。

EP03「湿った箱」

内景・与善堂前の間・午前

薬箱がどん、と帳場に置かれる。

湿気と魚の匂いが同時に広がる。

源造の袖口から水が落ちているが、本人は涼しい顔だ。

源造：水なんぞ、一滴もついとらん。

漑は帳場の水跡を見る。

漑：魚が泣いたの？

源造：海風だ。

漑：また屋根漏りでしょ。前は東の隅、今度は――

宗一が薬尺で、箱の蓋を開けようとする漑の手を軽く押さえる。

宗一：先に箱だ。

漑は宗一を見て、言葉を飲む。

宗一が箱を開ける。

外側の薬包が二つ、やわらかくなっている。内側はまだ乾いている。

漑が一包を鼻に寄せる。

宗一：鼻をつけるな。紙が湿ったことと、薬が駄目になったことは別だ。

宗一は外包をほどき、一つずつ見る。

源造：日に当てりゃいいだろ。

宗一：薬は干物じゃない。

源造：干物だって、そこまで嫌われちゃ立つ瀬がない。

漑が笑いをこらえる。

宗一は湿った二包を使用停止の皿へ、残りを乾いた布に移す。

漑が帳面を開く。

漑：田辺家、屋根漏りにより――

宗一：誰が屋根漏りと言った。

漑が源造を見る。

源造は背筋を伸ばす。

源造：海風だ。

漑の筆先が止まる。

書きかけを線で消し、「箱底湿り。二包検分待ち」と書き直す。

源造：魚臭いとは書かんのか。

漑：書かない。

源造がほっとする。

漑：鼻は覚えたけど。

源造が空箱を抱えて出る。魚の匂いは帳場に残る。

宗一が漑へ布を渡す。

宗一：拭け。

漑：なんでいつもあたし？

宗一：魚には手がない。

EP04「母が帰る」

内景・与善堂奥の間・午後

漑が古い布団を棚の上から引きずり下ろす。

埃が顔にかかる。

宗一が荷札を持って入る。

宗一：誰か寝込んだか。

漑：誰も。

布団をぱんと広げる。

宗一：なら、元気な者を埃で病人にするな。

漉：志乃が帰ってくる。

宗一が荷札を見る。

宗一：手紙には「季節替わりの荷改めに帰店」とある。

漉：帰ってくるってことじゃない。

宗一：日にちは書いていない。

漉は枕袋を裏返し、古い糸のほつれを見る。

漉：人が帰るなら、寝る所は要る。

宗一：人はまだ着いていない。

漉：だから先に敷くの。

前の間で重い物が落ちる音。

辰夫（前の間）：山筋の荷、着いたよ！

漉の手が止まる。

内景・与善堂前の間・続き

大きな薬材の包みが帳場の脇に置かれている。

配達人が濡れた笠を外す。

漉はまず、その背後を見る。

漉：志乃は？

配達人：荷を先に行かせるって。自分は上嶺村へ、二軒分の箱を見に回った。

漉：いつ戻るって。

配達人：さあ。荷を遅らすな、とだけ。

宗一はもうしゃがみ、縄と防湿紙を点検している。

漉はまだ戸口を見ている。

辰夫：荷のほうが足が速いね。

漉：荷に足なんかある？

辰夫：俺たちがある。

漣は腰をかがめ、宗一と縄を解く。

中には薬材、仕切り札、順路紙だけ。

漣への私物はない。

宗一：先に荷改め。

漣：分かってる。

漣が順路紙を抜く。

一番上に志乃の字。

「湿りはまず黄柏を見ること。ほかは帰店後。」

漣は読み終え、紙を宗一に渡す。

内景・与善堂奥の間・夜

布団は敷かれている。

枕元に空の湯飲み。

漣が戸口を通りかかり、立ち止まる。

部屋に入り、水を満たす。

布団の端を整える。

前の間から戸の音はしない。

漣（小声）：次は、人から先に着いてよ。

布団はしまわない。

EP05「使われなかった薬」

内景・与善堂前の間・午前

中年の男が薬箱を帳場へ押し出す。

男：一包も使ってない。全部戻す。

澤が箱を開ける。薬包は残っているが、封紙に擦れた跡がある。

男：親父が、置いても使わん、場所を取るだけだと。

澤：一度も具合が悪くならなかったの？

男：悪くなっても使わん。

澤（小声）：もったいなくて、かな。

男が目を上げる。

男：何だって。

澤が説明しようとする。

宗一が薬棚の奥から出てくる。

宗一：未使用分はいただきます。封紙の破れと箱の点検は、帳面に残します。

男：薬は減ってないのに、書くのか。

宗一：次の人に、開かない、読めない薬を渡さないためです。

男は箱を見て、声を固くする。

男：じゃあ、親父が面倒をかけたってことだな。

澤：そういう意味じゃー

男：さっき、惜しんだと言ったろう。

澤は言葉を失う。

宗一が帳面を男へ向ける。

宗一：ここには、起きたことだけ書きます。

男はしばらく黙る。

男：親父は、金を惜しんだんじゃない。

澤が顔を上げる。

男：使ったらまた呼ばにゃならん。人の手をわずらわせる、と。

宗一は評を返さず、薬包を一つずつ回収する。

漑は自分の書いた「老人、惜しみて使わず」を見る。ゆっくり線を引く。

「未使用。封紙擦れ。停止返却」と改める。

男は空箱を抱えて出る前に振り返る。

男：次に……うちへまた一つ置けるか。

宗一：住所が変わっていなければ。

漑は「停止」の脇に小さな空欄を残す。「再配置」とは代わりに書かない。

EP06「半分だけ家の者」

内景・与善堂前の間・昼

辰夫が新聞紙を丸めながら、町内の口真似をする。

辰夫：皆がさ、漑姉ちゃんは与善堂の半分身内だって。

漑は二軒分の名札を並べている。手が止まる。

漑：どっち半分。

辰夫：上半分かな。飯はここで食うけど、久世じゃないし。

漑：あたしは青木。店も青木の店。

辰夫：じゃあ宗一さんは、どっち半分？

奥で薬を量っている宗一。

宗一：お前の使い賃を払う半分だ。

辰夫はすぐ黙る。

漑が配達用の薬箱を二つつかむ。

漑：届けてくる。

宗一：名札を先に確かめろ。

漉：分かってる。

両手に一つずつ持ち、早足で出る。

外景・町内の小路・少し後

漉は二軒の前で行ったり来たりする。名札を取り違えたと気づく。

顔色が変わり、箱を抱えて戻る。

内景・与善堂前の間・続き

漉が箱を戻し、息を切らして名札を並べ直す。

宗一は責めず、帳面を寄せる。

宗一：なぜ間違えた。

漉：辰夫がうるさいから。

辰夫：俺、黙ってたよ。

漉：……早くしたかった。

宗一：誰に見せる早さだ。

漉は答えない。

名札、番号、順路を照合し直す。

宗一は普通町内の順路紙を取り、空欄に「青木漉」と書く。

漉が顔を上げる。

宗一：明日から、この道について歩け。戻ったら自分で箱を照合する。

漉：これ、あたしに？

宗一：何をするかを書いただけだ。何者かを書いたんじゃない。

漉は強がる。

漉：字、詰まってて見にくい。

それでも紙を受け取り、角を丁寧に伸ばす。

辰夫がのぞく。

辰夫：で、今は何人分の身内？

漑が雑巾を投げる。

辰夫は笑って逃げる。

画面は「青木漑」の四文字へ。

EP07「最初の配達道」

内景・与善堂前の間・早朝

宗一が危険の少ない補充箱を帳場に置く。

宗一：北小路、藤井家。順路通りに行け。

漑は順路紙を丸め、腰に差す。

漑：この道なら目をつぶっても行ける。

宗一：開けて行け。

外景・北小路・午前

本通りは木材運びで塞がっている。

漑は時刻を見て、低い塀へ回る。

箱を先に塀へ押し上げ、自分も越える。

箱が向こうへ滑る。

漑が飛びついて抱える。箱の角が塀をこすり、鈍い音。

留め具を確かめ、息をつく。

外景・藤井家前・少し後

門札には「藤原」とある。

順路紙は「藤井」。

漑が戸を叩く。

老婦人が出る。

老婦人：お隣じゃないかね。

漑：ここ、前は藤井さんでした？

老婦人：先月越したよ。隣は藤原。

漑は箱の名札を見る。確かに藤井。

老婦人：薬箱なら、うちで受けても同じだろう。痛み止めでしょう。

漑は箱を抱き締める。

漑：同じじゃありません。

引き返す。

内景・与善堂前の間・昼

宗一が顔を上げる。

宗一：早いな。

漑：住所が変わってた。

宗一：それで。

漑：戻って確かめる。

宗一は古い順路の挟みから転居知らせを出す。

宗一：今朝届いた。藤井家は河東だ。

漑が紙をにらむ。

漑：どうして朝、言わないの。

宗一：さっきまで裏庭にいた。お前は目をつぶって出た。

漑が詰まる。

宗一は箱の角の白い擦れを見る。

宗一：どこを通った。

漑：……近道。

宗一：塀は道じゃない。

外景・河東の小路・午後

漑は本通りを歩く。少し遅い。

藤井家が薬箱を受け取る。

藤井の婦人：今日は遅かったねえ。

漑：最初、一つ方角を間違えました。

婦人：人も間違えたの？

漑：いいえ。二度目は合ってました。

漑は順路紙に新住所を書き、実際に歩ける道を描き足す。

EP08「貼り直された封」

内景・与善堂前の間・持込日の午前

白井のおばさんが薬箱を帳場へ置く。

封紙は一度はがして貼り直されている。端に米糊の跡。

漑が用量を見る。

漑：二包、減ってます。

白井：誰も触ってないよ。

漑：封紙が自分で起きて、お粥でも煮たの？

白井の顔がこわばる。

白井：あんたは補充だけしておくれ。

漑：誰が使ったかは要ります。お姑さん？ それともお嫁さん？

白井は箱を抱え上げる。

白井：もういい。補充はいらない。

宗一が手を伸ばし、箱底を押さえる。奪わない。

宗一：二包、使われた。そこだけでよろしいですね。

白井：……そうだよ。

宗一：具合の悪さは残っていますか。

白井：ない。

宗一：では二包使用。封紙を替えます。

宗一が漣を見る。

漣は不服だ。

漣：次も誰かが黙って使ったら――

白井：うちの誰が薬を飲むか、あんたに届け出る筋合いはないよ。

前の間が静まる。

漣は帳面を見る。そこには「認めず」と書きかけている。

宗一：その二文字、何の役に立つ。

漣：はっきり言わなかったって残せる。

宗一：二包使ったとは言った。

漣は黙り、「認めず」に線を引く。

「本日二包使用。封紙替え」と書く。

宗一は封を貼り直し、端を少しだけはがしやすく残す。

白井が箱を受け取る。

白井：今度は番頭さんに頼むよ。

漣の顔が固まる。

白井は出ていく。

宗一は薬包を整える。

漣：どうしてあたしを庇ってくれないの。

宗一：何をだ。

漣：あたしだって、勝手に飲まれたら危ないと思って。

宗一：心配は、聞き尽くす権利じゃない。

漣は戸口を見る。客は本当に、二度と来ないことがあるのだと初めて知る。

EP09「崩れ豆腐」

内景・与善堂前の間・早朝

春子が浅い皿を持って入る。

売り物の一丁にはならない崩れ豆腐。白布がかかっている。

薬箱と皿を一緒に置く。

春子：昨夜、二包使った。お代は明後日で。

漣が白布をめくる。

漣：これ、みんな崩れてる。

春子：崩れても食べられる。

漣：二包くらいなら、今はいいよ。

春子の手が止まる。

春子：誰がいいって言った。

漣：見下してるんじゃないよ。ただ、崩れ豆腐じゃ値が――

春子：一丁の値がつかないだけで、値打ちがないわけじゃない。

皿を引き戻す。

春子：受け取らないなら、明後日、銭で持ってくる。

漣が慌てる。

宗一が奥から出て、秤を取る。

宗一：皿一枚で、どれくらいだ。

春子：水を切って六百匁ほど。

宗一：今日の豆値は。

春子が値を言う。

宗一は秤を漚へ押す。

宗一：量れ。

漚は崩れ豆腐を椀に移して量る。

春子が見ている。

春子：施しじゃないよ。明日の朝、宗一さんはまた飯を抜くんだろう。汁にすればいい。

宗一：食べている。

春子：薬の匂いを立って嗅ぐのは、飯じゃない。

漚が勘定を出す。

漚：半分にしかありません。

春子：残りは明後日。

春子は筆を取り、帳の横に「崩れ豆腐、半銭」と書く。

字は不器用だが、力がある。

漚は見て、書き直さない。

内景・与善堂奥の間・少し後

鍋に豆腐汁。

宗一が一口飲む。

漚：どう？

宗一：値がある。

漚はにらみ、自分の椀にもよそう。

EP10「傘を返し忘れる人」

内景・与善堂前の間・雨上がり

戸口に古傘が掛かっている。骨が一本曲がっている。

綾が帳場の前で財布を探り、小銭を数枚だけ出す。

綾：残りは次で。

漑が帳を見る。

漑：前も次でって言った。

綾：だから今日は、その次だよ。

漑は一瞬巻き込まれる。

綾は薬包を持って帰ろうとする。

漑：傘。

綾が振り返り、戸口を見る。

綾：あたしのじゃない。

漑：この前、ちょっと借りるって。

綾：借りたのは与善堂の傘。

漑：だから返すんでしょ。

綾：もう与善堂にあるじゃない。

足早に出ていく。

漑は古傘を外す。

漑：届けてくる。

宗一：あちらはまだ雨か。

漑：やんでる。

宗一：なら、何を届ける。

漉：毎回忘れたふりをされるよりまし。

宗一は空いた鉤を見る。

宗一：次、あの人は何を口実に入ってくる。

漉：未払いがある。

宗一：借りがあるだけで入れる人ばかりじゃない。

漉は傘を持ったまま動けない。

外から綾がまた顔を出す。

綾：忘れてた。次の補充日、いつだっけ。

漉はすぐ順路紙を開く。

綾は漉の手の傘を見て、目をそらす。

漉が日を告げる。

綾：じゃあ、その日に。

また出ていく。傘は取らない。

漉は古傘を鉤に戻す。曲がった骨を内側に向ける。

EP11「新しい姓」

内景・与善堂前の間・午後

漉が帳場に伏せ、反故紙で字の稽古をしている。

紙には「青木漉」「久世漉」「青木漉」。

漉は「久世漉」を見つめ、すぐ丸めて紙屑籠へ投げる。

辰夫が新聞紐を取りに来て、紙屑籠から拾う。

広げて大声で読む。

辰夫：くーぜー、みーおー。

漉が飛びつく。

漉：返して！

辰夫は帳場を回って逃げる。

辰夫：宗一さん！　いつ娘が増えたの？

漉が追い、名札箱をひっくり返す。

木札が床に散る。

ちょうど絹江が入り、屈んで一枚拾う。

絹江：姓を変えるなら、一杯おごりな。

漉：ただの反故！

宗一が奥から出て、紙を見る。

漉が固まる。

宗一は紙を漉へ返す。

宗一：姓は「お前は誰だ」と言われた時の栓じゃない。

漉：栓にするつもりなんか。

宗一：なら、盗んだみたいに書くな。

漉は赤くなり、紙を火鉢へ投げる。

紙が火を巻き、「久世」の字から黒くなる。

漉はしゃがみ、木札を拾う。

空白の順路札を見つけ、帳場に戻る。

一画ずつ「青木漉」と書く。

大きな字が札いっぱいを占める。

普通順路の棚へ掛ける。

辰夫：大きすぎるよ。隣の人が狭い。

漉：隣が寄ればいい。

宗一が見る。

宗一：墨を乾かせ。全員の名をお前に染めるな。

漣は慌てて墨のついた手を引く。

EP12「出せなかった返事」

内景・与善堂前の間・午後

郵便配達が葉書を差し出す。

漣は筆跡を見た瞬間、早く取りすぎて朱肉にぶつかりかける。

表は金沢の街並み。

裏には数行だけ。

「寄宿舍の窓が閉まりきらない。雪はまだ。飯はまずい。修司。」

漣が鼻で笑う。

漣：天気のお知らせみたい。

宗一：飯のことは、まだ控えめなんだろう。

漣は返事を書く。

一通目。

「まずいなら自分で作れ。与善堂はお前なしでも潰れてない。」

丸める。

二通目。

「源造の箱はまた魚臭い。宗一はまだ湯へ行かない。」

宗一：聞こえている。

漣は「宗一はまだ湯へ行かない」を消す。

三通目。

「いつ帰るの。」

筆先が長く止まる。

外で郵便鈴。

漑は立ち上がり、手紙を持って戸口まで行くが、追いかけない。

内景・与善堂奥の間・夕方

絹江が洗った袋を取りに来て、漑が三度目に戸口へ行くのを見る。

絹江：誰を待ってるの。

漑：待ってない。

絹江は机の上の出していない三通を見る。

漑は黙る。

漑：修司の手紙。

絹江：もう来たろう。

漑：前の続きが、まだ来てない。

絹江：どの続き。

漑は三通を重ねる。

漑：分からない。書いてないんだから。

薄荷飴の缶を開け、三通を入れる。

底には古い包み紙が数枚だけ、かざりと鳴る。

絹江は聞き返さず、布袋を持って帰る。

宗一が通りかかり、缶を見る。

宗一：飴のない缶は場所を取る。

漑は蓋を閉める。

漑：缶が借金したわけじゃない。

EP13「宗一、仮住まい」

内景・与善堂前の間・午前

庄吉が老眼鏡をかけ、古い帳面にかじりついている。

庄吉：これは「掛け」。これは「未着」。これは……。

宗一：源齋先生の書き損じです。

庄吉：先生の書き損じでも、名は要る。

漣が横で紙をそろえていて、ふと止まる。

古い一行。

「宗一、仮住まい。食一人。賃金別記。」

漣が宗一を見る。

宗一は薬棚の前で量っている。気づかぬ顔。

漣：昔、どこに住んでたの。

宗一：ここだ。

漣：帳面には仮住まいって。

宗一：帳面は間違っていない。

漣：仮って、どのくらい。

宗一：十二年。

庄吉が吹き出す。

庄吉：源齋先生が直す頃には、当人が先に逝っちゃった。

漣は笑わない。

内景・与善堂奥の間・昼

漣が宗一の飯椀を客用の棚に置く。すぐ違うと思い、決まった丸跡へ戻す。

宗一が入り、椀を行ったり来たりさせる漣を見る。

宗一：椀が何かしたか。

漉：客の椀は上。

宗一：俺は客じゃない。

漉：帳面は仮住まいって。

宗一が飯を盛る。

宗一：十二年書いてあっても、飯は飯だ。

漉：なら、どうして直さないの。

宗一：源齋先生はいない。志乃さんは外だ。誰に見せる。

漉：自分に。

宗一の手が止まる。

椀をいつもの丸跡に置く。

宗一：食べ。名前が曖昧でも、飯は待たない。

漉は座る。

こっそり宗一の椀を見る。

場所は変わっていない。

EP14「湯屋の薬袋」

内景・与善堂前の間・夕方

絹江が洗い済みの布薬袋を抱えてくる。

絹江：十二枚。十一枚は乾いた。一枚はしらばっくれてる。

漉が一番上を取って嗅ぐ。

漉：湿り臭い。

絹江：鼻だけは一人前だ。

漉：誰の。

絹江：湯屋の。

漑：湯屋から来たのは分かる。どの女客。

絹江が袋を取り返す。

絹江：湯屋の中のことは、湯屋の中で止める。

漑：蒸気の近くに置いたなら、次も湿る。

絹江：置き方は私が言う。

漑：うちは記録しないと。

宗一が薬袋を受け、縫い目と内側の印を見る。

宗一：袋は停止。新しいものに替える。保管の注意は絹江さんから。

漑：名前は書かないの。

宗一：箱番号で足りる。あの人が湯屋のどの棚で着替えたかは、お前の仕事じゃない。

絹江が宗一を見る。

絹江：帳場と湯舟の区別がつく人がいて助かったよ。

宗一：湯舟は帳面に載せません。

絹江：入ったことがある口ぶりだね。

宗一は黙って薬袋を見る。

絹江：今夜の最後の湯は捨てるよ。

宗一：湯が時刻を知っているんですか。

絹江：湯は知らない。焚くほうが知ってる。

絹江が去る。

漑が宗一を見る。

漑：どうして毎回、最後に行くの。

宗一：店を最後に閉めるからだ。

漑：どうして絹江さんは毎回、残すの。

宗一：薬袋を直すのに、そこまで要るか。

漑は目をむき、「湿り袋停止」と帳に書く。女客の名は書かない。

EP15「内側に縫われた名」

内景・与善堂前の間・午後

善平が直した薬袋を帳場へ置く。

表は平らで、針目はほとんど見えない。

善平：見な。

漑は裏返し、口を広げる。

漑：名前は。

善平が中の合わせを指す。

古い名布は中に縫い込まれ、端だけ見えている。

善平：残してある。一針も傷めてない。

漑：中にあって、誰が見るの。

善平：破れは名前のすぐ脇だった。古布を表に返したら、二度引っ張れば裂ける。

漑が糸切り刀をつかむ。

善平が刀の背を押さえる。

善平：半刻の仕事を糸くずみたいに切るな。

漑：直しは上手いよ。

善平の力が少し緩む。

漑：上手すぎて、誰の袋か分からない。

善平：良い繕いってのは、繕ったと分からないものだ。

漑：薬袋で一番大事なものは、誰のものが分かること。

二人は手を離さない。

奥で宗一が量る。

宗一：刀は綱引きに使うものじゃない。

善平が先に手を離す。

袋を取り戻し、内側の名布を撫でる。

善平：新しい名布を当てて、古い名は外へ残すか。

漑：人を取り替えたみたい。

善平：古布に裏打ちをする。古い字は表、新しい布が内から支える。

漑：もつ？

善平が自分のズボンの膝をまくる。

外は古布、内側に濃い当て布。

善平：毎日膝をついて裾を測ってる。まだ落ちてない。

漑：今日は薬袋を測りに来たんじゃないの。

善平：仕事の勘所は同じだ。

内景・与善堂前の間・少し後

善平が薬袋を置き直す。

古い名布は外にあり、その下に新しい裏布。

色は少し濃いだが、名は読める。

漑が指で二度引く。裂けない。

善平：直したのは見える。

漑：誰のかも見える。

善平が針箱をしまう。

善平：腕の良さは、隠すばかりが能じゃない。

宗一が目を上げる。

善平はすぐ足す。

善平：ズボンの話だよ。

宗一：ズボンでも、名前は内へ縫うな。

漑が笑う。

善平は漑の手元から糸切り刀を取る。

善平：それと、俺の半刻で綱引きするな。

EP16「甘みが消えた」

内景・与善堂前の間・午後

八つ九つの男の子が帳場の前に立つ。母親が肩を押さえている。

母：薬箱の甘いのが、何枚かなくなりまして。

男の子：ぼくじゃない。

漑：甘いのは薬じゃない。薄荷飴。

男の子：じゃあ、もっとぼくじゃない。

漑が箱を開ける。底に白い砂糖粉が薄く残っている。

小刷毛で掃き、木の隙間から黄ばんだ包み紙を引き出す。

裏に曲がった字。

「漑、三枚ぬすむ。修司、一枚だけ。」

漑の顔が熱くなり、すぐ裏返す。

男の子：何て書いてあるの。

母：昔も誰か盗ったんですか。

漑：修司兄ちゃんは、子どもの頃から人に着せるのがうまくて。

薬棚の奥から宗一。

宗一：字はお前だ。

漑：あたしが代わりに帳をつけただけ。

宗一：「一枚だけ」までか。

漑：小さかったの。

男の子が近づく。

男の子：じゃあ盗ったのはお姉ちゃん？

漑：古い帳は、もう追わない。

箱の隙間を見ると、底板が緩み、飴が中へ滑り込んでいた。

漑：誰かが盗ったんじゃない。底が緩んでる。

母親が男の子の肩から手を離す。

男の子（小声）：昨日、一枚は食べた。

母親がまた肩を押さえる。

漑は笑いをこらえ、実際の数だけ書く。

古い包み紙を折って、薄荷飴の缶へ戻す。

宗一：古い帳は追わないのに、残すのか。

漑：今度から妙なことを書かないように。

宗一：誰が。

漑が缶の蓋を閉める。

漑：書いた人が。

EP17「古机の輪染み」

内景・与善堂前の間・梅雨前の午後

漑が古い診察机の丸い輪染みを強く拭いている。

染みはびくともしない。

砂布に持ち替える。

宗一が通り、砂布を抜き取る。

宗一：それ以上やれば、染みより先に机がなくなる。

澤：この跡、誰かがずっと同じ所に茶碗を置いてたみたい。

宗一：源齋先生の湯飲みだ。

澤：毎日そこへ？

宗一：机が覚えていると思っていたんだろう。

澤は古机の向こうの椅子を見る。

澤：どうして座らないの。

宗一：俺は医者じゃない。

澤：方子を見て、薬も出す。

宗一：方子が読めるかを見るのと、病を診るのは違う。

澤：町の人には薬師さんって呼ぶよ。

宗一：だから薬棚の前に座る。

宗一は薬師用の秤皿を帳場へ戻し、古机には触れない。

澤：じゃあ、この机は。

宗一：医者が来た時に使う。普段は記録置きだ。

澤：空けておくの、もったいない。

宗一：違う席に座るほうが、もっともったいない。

外から辰夫が顔を出す。

辰夫：俺、座っていい？

宗一：具合が悪いのか。

辰夫：悪くない。

宗一：なら座るな。

辰夫は引っ込む。

漑は雑巾を畳む。輪染みはそのまま。

高棚から源斎の古い湯飲みを下ろし、輪染みに置いてみる。

大きさがぴたりと合う。

漑はもう拭かない。

EP18「薬箱の米」

内景・与善堂前の間・午前

花婆が薬箱を帳場へ置く。

蓋を開けると、薬包ではなく小さな米袋が入っている。

漑が固まる。

漑：薬は誰が出したの。

花婆：産後の家が三包使った。残りは別に置いてある。

漑：薬箱に米は駄目。匂いに移る。

花婆：米は帳だよ。

漑は米袋を見て、声を落とす。

漑：お金、ないの。

花婆：子が生まれた月に、余る家があるかい。

漑が銭箱から自分の小銭を探る。

花婆が杖で軽く手の甲を叩く。

花婆：また、こっそり払う気かい。

漑：赤ちゃんが生まれたばかりだし。

花婆：だからこそ、最初から訳の分からない恩を背負わせちゃいけない。

宗一が秤を持ってくる。

宗一：米は誰から。

花婆：子の祖母だよ。薬をただで受けるわけにはいかないって。

漑：でも米のほうが高いかも。

花婆：だから量る。

宗一が米を秤皿へあける。

漑が計算する。

漑：一部にしかありません。

花婆：残りは掛け。次は本人が来る。

漑が花婆を見る。

花婆：あんたがその家の道を最後まで歩いちゃ駄目だよ。あの人が、自分で一度ここへ来るんだ。

漑は帳に「米、折引」と書く。

宗一が実重量と値を足す。

花婆は空の米袋を取る。

花婆：そうすれば、また来られる。

花婆が帰る。

漑は帳の「折引」を見つめる。

宗一：何を見ている。

漑：前は、取らないのが助けだと思ってた。

宗一：取らない時も、誰かが払う。

漑は出しかけた小銭を懐へ戻す。

今度は、こっそり置かない。

EP19「今日は山へ上がれない」

内景・与善堂前の間・早朝

三郎が折れて柔らかくなった口上紙を帳場へ叩きつける。

三郎：上嶺村、痛み止めが一軒分しかない。

漑がすぐ空箱を取る。

漑：行く。

三郎が窓の外を見る。

三郎：今日は山へ上がっちゃいけない。

魚を届けに来た源造が、聞きつけて顔を出す。

源造：鱗の張りが悪い。昼過ぎには晴れる。

街口から辰夫が走ってくる。

辰夫：ラジオは「局地的に雪」だって。

漑：局地ってどこ。

辰夫：そこから聞いてない。

三郎：山が局地だ。

源造：海だって局地だ。

三人が言い合う。

宗一は裁かず、順路帳を漑へ押す。

宗一：残りは何軒分だ。次の荷はいつだ。隣村に余りはあるか。

漑が照合する。

漑：上嶺村は一軒分。隣村の取引先に二軒分、今日なら山脚まで届く。

三郎：橋綱が凍ってる。

漑：見に行く。

外景・山道入口・午前

風で橋綱が硬くなっている。

漑が触れると、指先に霜がつく。

三郎が杖で氷を叩く。氷片が落ちる。

三郎：上がるのはできる。下りられるとは限らん。

漑は山頂と補充箱を見る。

無理はしない。

内景・与善堂前の間・少し後

漑が隣村の商号へ、先に一軒分を補ってほしいと手紙を書く。三郎が山脚まで運ぶ役を受ける。

順路紙に「本日停止。隣村より代補依頼済」と書く。

つい太陽を描く。

三郎が太陽を消し、曲がった雲を足す。

漑：その雲、崩れ豆腐みたい。

三郎：雲だと分かればいい。

宗一が見る。

宗一：太陽も豆腐も道標にはならない。

漑は筆を置く。

今回は、道を止めても負けた気がしない。

EP20「入れない奥」

外景・白井家前・午後

漑が補った薬箱を抱え、戸口に立つ。

白井のおばさんは戸を半分だけ開ける。

白井：ここへ置いて。

漉：前の置き場所を見たいんです。この前、封紙が――

白井：今日は入らなくていい。

中から押し殺した咳。

漉は思わず半歩踏み出す。

白井の手がすぐ門框にかかる。

漉は止まる。

二人とも黙る。

漉は足を引く。

漉：咳の方は、お医者に。

白井：診てもらったよ。

漉：すぐもう一度、という話は。

白井：ない。

漉：薬箱は誰に渡します。

白井：私だよ。

漉：次の巡回は初七。ご存じですね。

白井：知ってる。

漉は補充票を折り、戸の隙間から渡す。

漉：中へ入ってほしい時は、呼んでください。

戸の内側から若い女の手が伸び、紙を受け取る。

漉は見えだが、顔を探さない。

白井が箱を受け取る。

白井：初七は、あんたが来るのかい。

漉：宗一と来ます。

白井はうなずき、戸を閉める。

漣は戸の外で、内側から小さな「ありがとう」を聞く。

返事はせず、下駄を来た道へ向ける。

EP21「亡き人の薬箱」

内景・与善堂前の間・午前

中年の兄弟が古い薬箱を帳場へ置く。

兄：薬は返す。箱は俺が持つ。

弟：箱は与善堂のだ。何で兄さんが持つ。

兄：親父が二十年置いた箱だ。

弟：兄さんは年に何度帰った。

兄：お前は帰った回数で、親父が分かるのか。

声が大きくなる。

漣は箱蓋を抱え、壊されないようにする。

漣：まず、引っ張らないで。

弟：あんたが言ってくれ。箱は誰のだ。

漣は宗一を見る。

宗一：薬と箱を分けます。

箱を開け、残薬を調べる。

宗一：未使用薬は与善堂が引き取ります。箱本体は商号のものですが、空箱なら減価分で買い取りできます。

兄：いくらだ。

弟：俺が出す。

また争いかける。

漣は古い姓名札を外し、布で包む。

漣：お二人が残したいのは、箱ですか。それともこの札ですか。

兄弟は同時に黙る。

弟（低く）：父の最後の薬は、俺が出した。

兄：最後の一年は、俺の家 にいた。

漣は何の薬だったか聞かない。

宗一が薬を出し、空箱にする。

宗一：箱は買えます。姓名札はご家族の物として、箱代には入れません。

兄が銭を出す。弟も出す。

漣：お二人で、半分ずつに。

二人は顔を見合わせ、反対しない。

外景・与善堂前・少し後

兄弟が一緒に箱を運ぶ。

古い姓名札は布に包まれ、箱蓋の上。

敷居で箱底が傾く。

二人が同時に手を添える。

もう、どちらが前を持つかは争わない。

EP22「方子を読めなければ止める」

内景・与善堂前の間・午後

老客が黄ばんだ古方を帳場へ押しつける。

老客：源齋先生が昔出した。これで頼む。

宗一が方紙を取る。

墨が水でにじみ、二味は偏だけになっている。

宗一：ここ二か所は読めません。

老客：お前は源斎先生の横に何年立っていた。覚えていないのか。

宗一：同じ字でも、同じ量とは限りません。

老客：何十年も飲んでいる。

宗一：何十年の間に、身体も変わります。

老客は苛立つ。

老客：昔はこんなに面倒じゃなかった。先生は一目で分かった。

宗一は黙る。

漑は、宗一の手がまだ古方を押さえているのを見る。返していない。

老客が迫る。

老客：出せないのは責任が怖いのか。それとも、そもそも習っていないのか。

漑が帳場の角から「照合待ち」の木札を取り、古方の上に置く。

漑：町医者に字を確かめてもらってきます。

老客：お前には聞いていない。

漑：宗一は答えています。方子を読めなければ、薬は出せません。

宗一が漑を見る。

老客：今の与善堂は、融通がきかんな。

宗一はようやく古方から手を離す。

宗一：読めない方子は、止めます。

漑は外套を着て、古方を厚紙挟みに入れる。

宗一：走るな。

漑が止まる。

宗一：雪だ。本道を行け。

漉はうなずいて出る。

老客は座って待ち、まだ小言を言う。

宗一が湯を一杯置く。

老客は飲まない。けれど帰らない。

EP23「読み上げられた掛け」

内景・与善堂前の間・持込日の午前

町の人が短い列を作る。

庄吉が帳机で古い符号を整理している。

辰夫は横で退屈そう。

辰夫：俺、読めるよ。

庄吉：まず黙れるようになれ。

辰夫はもう一枚を取っている。

辰夫：佐藤、済み。小野、折引。綾、掛け二枚――

列の人々が一斉に振り向く。

綾が戸口で固まる。

庄吉が帳を奪う。

庄吉：それは「別頁」だ！ 別に私頁あり、だ！

誰かが小さく笑う。

綾は古傘をつかみ、出ていく。

漉が追おうとする。

宗一：ここで呼ぶな。

漉は止まり、辰夫を引いて脇戸へ出る。

外景・与善堂脇路・続き

綾は遠くへ行かず、塀際で傘を閉じている。

漑：綾さん。

綾：分かってるよ。借りがあるのは。

漑：二枚の掛けじゃありません。辰夫が読み違えました。

辰夫はうつむく。

辰夫：「別」を「掛け」に読んだ。

綾：皆が聞いたのは、掛けのほうだよ。

辰夫：じゃあ戻って、言い直す。

綾：もう一度、読み上げるのかい。

辰夫は口を閉じる。

漑：外に出す帳の印は作り直します。綾さんの細かい帳は、表へ置きません。

綾は古傘を見る。

綾：今日は入らない。

傘を漑へ渡す。

綾：やっぱり、そこへ置いておいて。

漑は受け取り、引き留めない。

内景・与善堂前の間・少し後

庄吉が外帳を書き直す。

綾の名の下には、はっきりした「別頁」だけ。

辰夫は横に立ち、もう読もうとしない。

漑は古傘を戸口へ掛ける。

空の鉤に柄が当たり、小さく鳴る。

EP24「名前を記す」

内景・与善堂前の間・午後

若い婦人が薬箱を帳場へ置く。

婦人：外の札は、夫の名のままで。

漑：今、薬を取りに来るのは奥さんですね。

婦人：だから聞きに来ました。あの人がいない時、私が受け取ってもよいのかと。

宗一は薬を照合していて、口を挟まない。

漑は三枚の紙を出し、並べる。

漑：外札。戸口や配達の時に見える名です。内の連絡頁。店で照合する時だけ見ます。受取承り。薬を受ける時に確かめるものです。

婦人：外札を変えなくても。

漑：できます。ただし内の頁には、連絡できる方が必要です。

婦人：内の頁を見るのは。

漑：宗一と、記録を扱う者です。並んでいる人には見えません。

婦人：巡回の人は。

漑：箱を確かめる時には見ます。

婦人は一つずつ聞く。

後ろで白井のおばさんが黙って聞いている。

婦人は筆を取り、内の連絡頁に自分の名を書く。

字は遅いが、漑に代筆を頼まない。

外札を押し返す。

婦人：これは、夫のままで。

漑：はい。

漑は婦人の手書きの内頁を挟みに入れ、受取承りを内側へ折る。

白井のおばさんが前へ出て、薬箱を置く。

白井：私も、その三枚のことを聞きたい。

漑は顔を上げる。驚いたふうは見せない。

漑：お掛けください。一枚ずつ申します。

画面は薬箱の外札と内の挟みへ。違う位置に、違う名前が同時にある。

EP25「先に開けない手紙」

内景・与善堂前の間・午後

郵便配達が一通の手紙と、修理待ちの薬箱を同時に帳場へ置く。

封筒には忠雄の整った字。

漑が先に手紙へ伸ばす。

宗一はもう薬箱を開けている。

湿った匂いが立つ。

宗一：先に乾いた布。

漑：手紙は傷まない。

宗一：薬は傷む。

漑は手紙を分銅の下に押さえ、裏庭へ布を取りに行く。

内景・与善堂前の間・続き

箱内の一包は端が柔らかい。箱扣も割れている。

漑は検分し、分け、記録する。

手紙はずっと分銅の下。

宗一：木扣を先に外せ。

漑：分かってる。

宗一：手を急がせるな。

漑は自分の手を見る。いつもより速い。

一度止め、道具を持ち直す。

扣を直し終わると、宗一が分銅をどける。

封筒はまっすぐになっている。

漑は座るが、すぐには開けない。

宗一：見ないのか。

漑：さっきは見たかった。

宗一：今は。

漑：今は、分からない。

宗一は奥へ湯を沸かしに行く。

漑は封筒の地名を指でなぞる。

封切りを持ち、置く。

戸外から次の客の足音。

漑は手紙を引き出しへ入れる。

漑：先に箱を見ます。

顔を上げ、客を迎える。

引き出しの中で、手紙は静かに横たわる。忘れられたわけではない。

EP26「自分の銭」

内景・与善堂前の間・夕方

若い母親が小銭を帳場に三度並べ直す。

それでも一枚足りない。

母親：次にまとめて。

澪が順路紙を見る。

澪：お宅の次は初七ですね。

母親：はい。

澪は袖から一枚の銭を出す。すぐ銭箱には入れず、自分の前に置く。

澪：この一枚、私が立て替えます。

母親はすぐ首を振る。

母親：いりません。一包減らしてください。

澪：銭が一枚足りないからといって、薬を一包減らすわけにはいきません。

母親：あなたに借りたくないんです。

澪：だから、今ここで言葉にします。

澪は表に出さない立替頁を開き、空白の一行を見せる。

澪：外帳には本日済みと書きます。ここに、私が一枚立て替えたと書きます。初七に来た時、ご自分の手で私へ返してください。

母親：初七にもなかったら。

澪：その時、初七に言ってください。今日は、なかったことにはしません。

母親が澪を見る。

澪は自分の銭を銭箱へ入れる。

母親の前で書く。

「青木澪、立替一枚。初七返済の約。」

母親：どうしてあなたの名まで。

澪：銭は私のものです。決めたのも私です。

宗一が奥から出る。聞いていた。

宗一：なぜ店で持たない。

澪：この方は、帳を免じてほしいと言っていません。一枚足りないから、私が貸すと決めま

した。与善堂に、私の親切のふりをさせるわけにはいきません。

宗一が母親を見る。

宗一：初七に返せなくても、いつも通り入ってきてください。ただ、先に言うこと。

母親はうなずき、補った箱を抱える。

戸口で振り返る。

母親：来ます。

漑：来ると思ったから、貸しました。

母親：なら、どうして書くの。

漑：信じるからこそ、書きます。

母親が帰る。

宗一が立替頁を見る。

宗一：字はきれいじゃない。

漑：起きたことは書けています。

漑は頁を銭箱の下へ隠さず、決まった場所へ戻す。

この親切には、起きる前から名前があり、次に会う約束もある。

EP27「その半句は聞かない」

内景・与善堂前の間・夕方

白井のおばさんが薬箱を抱えて入る。疲れた顔。

空の薬紙を二枚、帳場へ置く。

白井：夜中に、あの人がまた――

そこで止まる。

漑が顔を上げる。

以前なら聞き継いだ。

今度は、空の薬紙を並べるだけ。

漉：同じ晩に使いましたか。

白井：一晩おいて。

漉：ほかの薬と一緒に。

白井：飲んでない。

漉：医者から言われた飲み方は。

白井が用法を言う。

漉は照合し、宗一の確認が要るものを薬師皿へ移す。

戸外を人が通る。白井は思わず薬箱を体で隠す。

漉は帳場端の小屏風を少し引き寄せる。

漉：次の巡回は初七です。夜に悪くなったら、初七を待たず、医者へ。

白井：誰か、聞かないのかい。

漉：薬箱に書く必要がありますか。

白井は漉を見て、首を振る。

漉：では聞きません。

白井は薬箱を抱える。

戸口で少し止まる。

白井：次は、もう少し早く来る。

漉はうなずく。

戸が閉まる。

宗一が奥から来る。

宗一：聞いたかったか。

漉：聞いたかった。

宗一：なぜ聞かなかった。

漑：知りたいことと、要ることは違うから。

宗一は薬師皿を取って検分する。褒めない。

ただ、小屏風を元へは戻さない。

EP28「山道からの使い」

内景・与善堂前の間・午前

三郎が口上紙、空の薬紙、木札を一束にして机へ置く。

縄がゆるみ、紙片が半分机に散る。

漑が押さえる。

漑：住所ごとに結べないの。

三郎が一枚取る。

三郎：住所は「川上三軒」だ。

漑：だから。

三郎：今年、川の道が変わった。三軒のうち一軒は移った。住所通りに行けば空き家に着く。

もう一枚を出す。

三郎：これは「曲がり松を左」。

漑：曲がり松は去年倒れた。

三郎：木は倒れたが、根はある。

漑が見る。

三郎：住所は間違っていない。道が変わる。

三郎は包みの底から古い紙を出す。

修司が子どもの頃に描いた山道図。

橋は川の上流にあり、白い水桶は家より大きい。道端には長い足の奇妙なもの。

漉：橋が違う。

三郎：白桶は合ってる。桶を見たら曲がれ。

漉が奇妙なものを指す。

漉：これは何。

三郎：村長んこの鶏。

漉：修司兄ちゃんは犬を描いたんだよ。

三郎：だから迷った。

漉は笑ってしまう。

新しい順路紙を出す。

束を全部整え直すのではなく、今日必要な三軒だけ選ぶ。

正式住所の横へ書き足す。

「旧曲がり松の根」

「白桶」

「雨後、下り坂不可」

三郎：桶はもう少し大きく描け。

漉：もう家より大きい。

宗一が通り、修司の古地図と漉の新地図を見る。

宗一：その鶏は誰だ。

漉と三郎が同時に古地図を指す。

漉：修司兄ちゃん。

三郎：修司。

宗一：なら、署名もさせるな。

漉は修司の古地図を新しい順路紙の下へ挟む。捨てない。

残りの口上紙を結び直して三郎へ渡す。

漑：これは今日の分じゃない。次から「急ぐ」と「急がない」で二束にして。

三郎：山に「急がない」はない。

漑：じゃあ「今日困る」と「今日は困らない」。

三郎は考える。

三郎：それなら山にもある。

EP29「その姓名紙」

外景・与善堂裏庭・晴れた午後

漑が藍布を竹竿に掛ける。

布には深い折り目。ほとんど広げられたことがない。

小さな紙が折り目から落ちる。

漑が拾う。

紙には志乃の字だけ。

「青木漑」

下に三年前の身丈、袖丈、肩幅。

荷番も値も順路もない。

漑は紙を自分の肩に当てる。

そこに書かれた袖丈は、手首の上で止まる。

反対側でも同じ。

宗一が裏口から葉を干しに出る。

宗一：測り間違いか。

漑：三年前の。

宗一：その頃は小さかった。

漉：知ってる。

宗一：布は足りる。

漉：二度目を測りに、帰ってこなかった。

宗一は志乃の代わりに言い訳をしない。

風で藍布が上がり、寸法紙が飛びそうになる。

漉が押さえる。

写し直さない。古い寸法に線も引かない。

細い糸で、元の紙を藍布の折りへ結び戻す。

藍布は干されたまま。

漉の影が、布に染まって薄く青い。

EP30「今度は何泊」

内景・与善堂前の間・午前

志乃が入ってくる。山道の埃をまとっている。

包みを置き、第一声。

志乃：この黄柏、前より軽い。まず秤を。

漉は帳場の内側に立ったまま動かない。

志乃：漉。

漉：今度は何泊。

志乃が宗一を見る。

宗一は薬材を整え、代わりに答えない。

志乃：次の荷が初五に着く。河口の順路が――

漉：何泊か聞ってる。

前の間が静まる。

志乃は外套を脱ぎながら、いつもの癖で荷縄を確かめる。

志乃：荷を見てから。

漑：いつも、荷が先に知る。

志乃の手が止まる。

ようやく娘を見る。

志乃：三晩。

漑：三晩のあと。

志乃：上嶺村へ。

漑：分かった。

漑は秤を取り、荷改めを始める。

抱擁も口論もない。

内景・与善堂奥の間・三日目の夜

志乃の布団が敷かれている。

漑がそばで衣を畳む。

志乃は荷支度。

漑：明け方に出るの。

志乃：夜が明ける前に。

漑はうなずく。

志乃が部屋を出たあと、漑は布団を見る。

三日目の夜に、すぐ片づけない。

四日目の朝、布団には人が寝た形がまだ残っている。

EP31「夕飯の前」

内景・与善堂奥の間・夕方

飯がよそわれたばかり。

志乃が荷を背負う。

志乃：山の駄賃が一刻早まった。今出る。

漑が戸口に立つ。

漑：三晩って言った。

志乃：もう三晩目だ。

漑：夕飯、まだ。

志乃：道は飯を待たない。

漑：道はいつも、人より偉いんだ。

志乃が肩紐を締める。

志乃：薬材が着かなければ、山の人も待つ。

漑：行くなとは言っていない。

志乃：では、どきなさい。

二人が動かない。

宗一が台所から鍋を運んでくる。

宗一：飯を半刻早めました。

漑と志乃が同時に見る。

宗一：駄賃はまだ街口です。半膳なら間に合います。

志乃：どうして分かるの。

宗一：辰夫が見た。

戸外から辰夫。

辰夫：魚屋で湯を飲んでる。源造さんの魚話が長すぎる。

志乃は困った顔で荷を下ろす。

三人が座る。

誰もさっきの続きを言わない。

志乃は早く食べる。

漑が菜を志乃の椀へ入れる。

志乃： もういい。

漑： 道にはない。

志乃は漑を一度見て、もう退けない。

外景・与善堂前・少し後

志乃が荷を背負う。

漑は残りの半膳を握り飯にし、藍布の端で包んで渡す。

志乃： この布は――

漑： 切ってない。包んだだけ。

志乃は受け取る。

何か言おうとするが、駄賃の鈴が街口から聞こえる。

志乃は背を向ける。

漑は門の内側に立ち、追わない。

宗一： 飯が冷める。

漑： 知ってる。

奥へ戻り、志乃の椀を最後に洗う。

EP32「一つの箱扣」

内景・与善堂前の間・午後

善平が直した薬箱を掲げる。新調した服を見せるように。

善平：しっかり、まっすぐ、見栄えよし。

漑が開けてみる。

扣は内向きで、両手でつままないと開かない。

漑：箱って、中の人が開けるの。

善平：内向きなら着物に引っかからない。

漑：使うのは独り暮らしのお年寄り。左手がきかない。

善平：先に言えよ。

漑：直す前に聞いてよ。

二人がにらみ合う。

宗一が箱を低い腰掛けに置き、片手で試す。

開かない。

宗一：外せ。

善平：釘、三本打ったんだぞ。

宗一：なら三本外せ。

外景・与善堂裏庭・少し後

善平が釘を抜き、漑が箱を支える。

一度目。扣は外向きだが固すぎる。

二度目。緩すぎて蓋が跳ねる。

三度目。善平がばね片を少し削る。

漑は右手だけで開ける。

善平：今度は。

漑：使える。

善平：見栄えは。

漑：使う人が開けた時に褒める。

宗一が裏口から手だけ出し、試す。

宗一：扣は合った。

善平が得意になる。

宗一：口数は多い。

善平が箱を閉める。

善平：仕立屋は口で寸法も取るんだ。

漑：だから裾が片方長いのね。

善平が漑の袖丈を測ろうと追い、裏庭に笑いが起きる。

EP33「待つための場所」

内景・与善堂前の間・午後

六つ七つの子どもが高木巡査に連れられてくる。

高木：橋のそばで泣いていた。母親は茶色い着物、とだけ。

子どもは衣の端を握りしめ、帳場前の高椅子には座らない。

漑が灯のそばの小腰掛けを引く。

漑：ここなら座れる。戸口が見えるよ。

子どもが座る。

高木は街口へ人を探しに行く。

子ども：これは、待つ人の椅子？

漑：今日はそう。

子ども：いつもは。

漑：箱を置いたり、足を置いたり、高い椅子が嫌な人を置いたり。

子どもは真剣にうなずく。

辰夫が走って入り、葉書を漑へ渡す。

辰夫：金沢。

漑は修司の字だと分かり、指がこわばる。

子どもが見る。

子ども：お姉ちゃんも、待ってるの。

漑は葉書を帳面の下へ差す。

漑：先に、お母さんを待とう。

しゃがむ。

漑：茶色の着物に、継ぎはあった。

子ども：袖口が青い。

漑：髪は。

子どもが手で示す。

外から女の切迫した呼び声。

子どもが腰掛けを降り、走っていく。

母親が抱きしめ、何度も礼を言う。

漑は小腰掛けを灯のそばへ戻す。

店が静かになる。

ようやく葉書を出し、小腰掛けに座る。

文面は見せない。

漑の小さな笑い声だけ。

葉棚の奥で宗一が目を上げる。何を書いてあったかは聞かない。

EP34「売れない一包」

内景・与善堂前の間・夕方

馴染みの客が慌てて入る。

客：上嶺村へ今夜出る者がいる。あの痛み止めを一包。

澤が薬斗を開ける。最後の一包だけ。

外紙は破れていないが、端に浅い湿り染みがある。

澤が匂いを見る。

澤：外紙だけかもしれない。中は――

客：値は払う。何かあっても、こちらで持つ。

澤は窓の外を見る。日は落ちかけている。

客：新しい荷は三日先だ。山の年寄りが痛み出したら、どうする。

澤は薬包を持って迷う。

宗一が奥から来て、包みを受け取る。

外封をほどく。内紙にも湿りが出ている。

客：干せば使えるだろう。

宗一が鋏で、しゃきりと包みを切る。

澤が息をのむ。

客：おい――

宗一は薬を使用停止の皿へあける。

宗一：売れません。

客：俺が引き受けると言っている。

宗一：飲む人が、ここで引き受けていません。

客は黙る。

澤：隣村の商号にありませんか。

宗一：辰夫が聞きに行った。

戸外から辰夫が息を切らして戻る。

辰夫：一包ある。明朝、山脚までなら届くって。

客は息をつき、切られた薬を見る。

客：惜しいな。

宗一：悪い薬を残すほうが惜しい。

漑は空の薬斗を拭き、「一時欠」と札を掛ける。

裏返さない。ほかの薬包で隠さない。

EP35「番頭は今夜戻らない」

内景・与善堂前の間・黄昏

雪が濃くなる。

辰夫が飛び込む。頭に雪。

辰夫：宗一さん、隣町で足止め。橋が閉まって、今夜戻れないって。

漑が外を見る。

漑：傘は。

辰夫：持ってた。絹江さんが、持つべきは傘より頭だって。

絹江が続いて入り、弁当箱を置く。

絹江：あんたの飯。夜番じゃないよ。

漑：怖がってない。

絹江：だから私も残らない。

絹江は仕事灯を見る。

絹江：芯、短く切りすぎるんじゃないよ。

去る。

内景・与善堂前の間・夜

町の人がぼつぼつ来る。

綾が次の補充日を聞く。

漑は順路紙を開いて答える。

春子が明朝の豆腐を持ってくる。漑は実値で帳に書く。

老客が読みにくい方子を出す。

老客：宗一ならいつも出す。

漑は「照合待ち」の木札を置く。

漑：今夜は出せません。明朝、医者に確かめます。

老客：お前はできんのか。

漑：できません。

老客は文句を言いながら座り、結局、湯と明朝を受け入れる。

内景・与善堂奥の間・少し後

漑は絹江の弁当を一人で食べる。

宗一の空いた席を見る。修司の薄荷飴缶を見る。

誰も帰らない。

内景・与善堂前の間・深夜

漑が最後の薬箱を数え、帳を合わせる。

門の門を下ろす。

仕事灯は小さな暖かい輪だけを残している。

戸外で突然。

どん。

木箱が雪へ落ちたような音。

漑が顔を上げる。

EP36「雪の古薬箱」

内景・与善堂前の間 / 外景・戸口・夜

漑が手灯を持ち、戸を半分開ける。

雪の上に人はいない。

古い薬箱が一つ、敷居の外で斜めに倒れ、半分雪に埋もれている。

漑は街口を見る。

空の路地に風だけ。

追いかけない。

先に箱を抱えて入れる。

内景・与善堂前の間・続き

箱はかなり古い。銅扣の形も今と違う。

姓名札はふやけ、刻み跡だけが残っている。

箱番号も半分しか読めない。

漑は小腰掛けを灯のそばへ引き、箱を置く。

まず雪を拭き、乾いた布を敷く。

開ける。

薬包は新旧混じっている。上層は湿り、底はまだ乾いている。

漑は三つの皿に分ける。検分可、停止、来歴不明。

帳面をめくる。

該当なし。

古い順路挟みもめくる。

水害後の何頁かが抜けている。

漑は筆を取り、箱の刀傷から「某家旧箱」と書こうとする。

筆先が止まる。

白井のおばさんの閉じた戸。婦人が自分で書いた内頁。古方の上の照合待ちの木札。

漑はその行に線を引く。

外でまた風。暖簾がかすかに鳴る。

戸口へ行き、見る。

雪はもう道を覆い、足跡は分らない。

漑は戸を閉め、門を下ろす。

灯の下へ戻る。

帳頁に書く。

「旧式配置箱。雪夜、戸外に置かれる。箱号欠損。照合待ち。」

持主欄は空白。

姓を補わない。「置き去り」とも書かない。

漑は筆の蓋を閉める。

仕事灯が小腰掛けの古薬箱を照らす。

奥で自分に湯を一杯つぎ、前の間へ戻る。

箱のそばに座る。

外は雪。

漑が低く言う。薬箱へか、自分へか分らない。

漑：分らないなら、空けておく。

画面は空白の持主欄へ。

黒。

****第一季完****

『薬箱の灯』 第二季 36 話脚本

- ＞ 季名：第二季「北町巡路」
- ＞ 時代：昭和八年（一九三三）春から冬
- ＞ 場所：越中地方の架空の町・汐見町 / 与善堂
- ＞ 形式：日常の人情と小さな笑いを軸にした短編連作
- ＞ 各話尺：約六十秒から二百四十秒
- ＞ 編劇方針：逐語訳ではなく、人物関係、場の動き、昭和初期の町場の言葉づかいに合わせた日本語版。漑は店の鍵、北町巡路帳、巡路印を持つが、仕入総額、薬価、薬剤師判断、与善堂の所有に関わる決定権はまだ持たない。

EP37「北町の鍵」

内景・与善堂前の間・春の朝

第一季の雪夜と同じ店戸。

外は明けたばかり。

字幕：昭和八年、春。

灯のそばの小腰掛けはまだある。

かつて名無しの薬箱を置いた場所には、擦り切れた見習い巡路紙が三枚、重ねて置かれている。

それぞれに書かれている。

「昭和六年」

「昭和七年」

「昭和八年」

雨染み、折れ、書き直した道筋。

内側から手が伸び、門を上げる。

辰夫だ。

三年前は背伸びしていた門が、今は肩の高さにある。

辰夫：もう一人で届く。

戸板が外される。

外には十八歳の漑。巡路鞆を背負っている。

漑：三年前は門に指も届かなかったくせに。

辰夫：三年前の姉ちゃんは、右の戸板を左へはめた。

漑：あれは雪がひどかったの。

宗一が小腰掛けから三枚の古紙を取る。

宗一：付き歩き、二十七回。

漑：二十九回。

宗一：二回は三郎について飯を食っただけだ。

漑：山道は歩いた。

宗一：持込日、十二回。

漑：十三回。

宗一：一回は熱を出して、奥で聞いていただけだ。

漑：聞くのも仕事。

宗一が漑を見る。

袖から鍵を出し、一番上の巡路紙に置く。

漑は黙る。

辰夫が寄る。

辰夫：本物？

宗一：偽物では戸は開かん。

漑が鍵を取る。

思ったより軽い。

それでも強く握る。

宗一が壁際へ向かう。

空白の巡路札が掛かっている。

帳場には湿った薬箱が一つ、ではない。

十二の持込箱が並び、それぞれに札が下がっている。

「補充待ち」

「修理待ち」

「照合待ち」

「移管待ち」

宗一が北町巡路帳を漚へ押す。

宗一：今日は、どの家から補う。

漚は一列の箱を見る。

手の中の鍵は、もう褒美に見えない。

巡路帳を開く。

漚：先に、残りを見ます。

宗一：鍵は戸を開ける。

漚：薬斗は開けない。

宗一：三年、無駄ではなかったな。

外景・与善堂前・続き

漚は外からもう一度、鍵を試す。

かちり。

戸を押して入る。

辰夫：何回試すの。

漚：こいつが、あたしのだって認めるまで。

宗一（店内）：店のだ。

漣は一瞬止まり、鍵を腰へ掛ける。

内景・与善堂前の間・少し後

漣は巡路帳の一頁目に書く。

「北町」

書き終えても、すぐ自分の名は書かない。

先に薬斗を数えに行く。

小腰掛けはまた空く。灯のそばに。

EP38「一列の薬箱」

内景・与善堂前の間・午前

十二の薬箱が床に並ぶ。

漣は四つの木札を持ち、区分を行き来している。

綾の家の箱を前へ。

白井の箱を二番目へ。

見知らぬ姓の箱を最後へ。

庄吉が杖をついて入る。

庄吉：薬箱を並べているのか、知り合いを並べているのか。

漣：綾さんの家は二包不足。白井さんは明日取りに来ます。

庄吉が最後の箱を指す。

庄吉：これは。

漣が札を見る。

漣：西村家。新しい配置先です。

庄吉：次の訪問日は。

漣は巡路帳を開く。

漉：今日。

庄吉：残量は。

漉が外側の照合紙を開く。

一包だけ。

漉が黙る。

庄吉：人の顔は勝手に前へ出る。薬箱は出ん。

漉はしゃがみ、西村家の箱を最前列へ移す。

ちょうど綾が入る。

自分の箱が三番目になったのを見る。

綾：あたし、後回し？

漉：綾さんの家は初四まで持ちます。西村家は今日補わないと。

綾が最前列の知らない箱を見る。

綾：じゃあ、その子を先に。

漉：怒らないの。

綾：掛けはあるけど、筋はあるよ。

薬棚の奥から宗一。

宗一：早く褒めるな。初四に補えなければ、叱りに来る。

綾：暇そうな時を選ぶわ。

庄吉：叱るのも予約制か。

綾：礼儀ってものよ。

皆が笑う。

内景・与善堂前の間・少し後

漉は床に四本の線を貼る。

「補充待ち」

「修理待ち」

「照合待ち」

「移管待ち」

箱を一つずつ置く。

辰夫が「照合待ち」へ足を踏み入れる。

漑：あなたはどの箱。

辰夫：飯待ち。

漑は奥を指す。

漑：そっち。

結尾

最後の馴染みの箱が三番目へ移る。

漑は戻さない。

巡路帳に書く。

「順は残量と日付による。」

宗一：後ろに言い訳を書くな。

漑：自分に見せるの。

EP39「巡路印」

内景・与善堂前の間・午前

新しい北町巡路印が小箱に入っている。

漑は手を洗い、二度拭く。

辰夫：判を押すだけで、湯まで浴びる気？

漑：正式の印だから。

たっぷり朱肉をつけ、強く押す。

紙に、ぽこ、と四角い穴があく。

辰夫は紙を見て、漑を見る。

辰夫：北町が落ちた。

漑：紙が薄い。

宗一：手が重い。

漑は紙を替える。

辰夫が古い箱底から黄ばんだ練習紙を見つける。

「路」の字が逆さに押されている。

辰夫：これ、誰の。

漑は脇の小字を見て、すぐ分かる。

漑：触らないで。

辰夫が高く掲げる。

辰夫：新田修司。昭和二年。

印面は逆さ。倒れた道標のよう。

辰夫：金沢の薬学先生も、昔は北町を地面へ押し込んでたんだ。

漑が奪い返す。

漑：十四だったの。

辰夫：十四なら、今の俺より上だ。

漑：だから余計みっともない。

文句を言いながら、古い練習紙をのばし、箱底へ戻す。

宗一：判は叩きつけるものじゃない。

漑：分かってる。

もう一度、朱肉をつける。

今度は軽く押す。

巡路印が紙角へきれいに落ちる。

漑は印影を見つめる。

辰夫：破れなかった。

漑：読めればいい。

辰夫：修司兄ちゃんのも読める。

漑は小箱を閉める。

漑：逆さは読めたうちに入らない。

結尾

正式な巡路紙は一番上へ。

修司が逆さに押した古紙は箱底へ。

漑が箱を閉める時、指がその紙端で少し止まる。

EP40「先に補う一軒」

内景・与善堂前の間・午前

宗一が常用薬斗を開ける。

最後の一組分しかない。

帳場には二軒の補充票。

「小川家」

「石田家」

漑が薬を二つに分ける。

宗一が手を伸ばし、二つを戻す。

漑：一軒ずつ半分なら、どちらも空にはならない。

宗一：半分では配置にならない。

澤：少しでもあるほうが。

宗一：少しあると、足りると見える。

澤は眉を寄せる。

二軒の巡路紙をめくる。

小川家：幼児あり。三包使用。次回訪問三日後。

石田家：独居老人。残一包。明日、黒沢で転買可能。

澤：小川家を先に。

宗一：理由。

澤：使う早さが速い。子どもがいる。石田さんは明日、黒沢へ行けます。

宗一：黒沢は現金だ。

澤が止まる。

経営挟みを開く。

石田家は今月、現金が苦しい。

澤：では説明に行きます。了承があれば転買票を切って、支払日を明記します。

宗一：了承しないかもしれん。

澤：分かっています。

宗一：お前は小さい頃、石田さんに抱かれている。

澤：知りません。

宗一：向こうが言う。

外景・石田家前・午後

老人が戸口で日に当たっている。

澤が欠品と入荷日を説明する。

老人：お前が小さい時は、わしが抱いたもんだ。

漑は一度目を閉じる。

漑：聞いております。

老人：そのわしを待たせるのか。

漑：二日です。明日必要でしたら、この票で黒沢薬房から取れます。お代は初十に。

老人：与善堂に一組もないのか。

漑：今はありません。

老人は漑を長く見る。

老人：宗一に言われて来たのか。

漑：別の一軒を先に補うと決めたのは、私です。

老人の顔が沈む。

漑は責任を宗一へ戻さない。

老人：なら、二日待つ。

転買票を受け取る。礼は言わない。

内景・与善堂前の間・夕方

漑が戻り、予定補充日を巡路札の脇へ書く。

巡路印を外す時、掌に赤い四角が残る。

宗一が見る。

宗一：洗えば落ちる。

漑：朱肉じゃない。

宗一：それでも落ちる。

漑は手を握る。

漑：二日の間は、落ちなくていい。

EP41「傘は持って帰る」

内景・与善堂前の間・雨の日

戸口裏の古傘はまだ掛かっている。

綾が最後の一筆を持ってくる。

錢を一枚ずつ置く。

漑が帳を合わせる。

漑：済みました。

綾が息をつく。

帰ろうとする。

漑が古傘を取る。

漑：これも、済みにしましょう。

綾は受け取らない。

綾：置いておいたって邪魔じゃないだろう。

漑：邪魔です。雨の日、誰か帰ってない気がする。

綾が少し笑う。

綾：傘を持って帰ったら、次は何を口実に来ればいい。

漑が補箱知らせの紙を出す。

漑：初二、北町持込日。箱扣をもう一度見ます。

綾：壊れてなかったら。

漑：壊れてないって言いに来て。

綾が紙を受け取る。

綾：傘より小さい口実ね。

漑：紙のほうが軽い。

宗一： 安い。

綾が宗一を見る。

綾： 番頭さん、縁まで銭勘定しないで。

宗一： 傘骨がもう一本折れたら、勘定です。

綾はようやく傘を取る。

開くと、傘は片側へ傾く。

辰夫が戸口から入る。

辰夫： まだ店へ戻りたがってる。

綾： 道を覚えるのが遅いだけ。

結尾

綾が傘を差して去る。

戸裏の空の鉤が揺れる。

澪は手を伸ばして止める。

別の物を掛けて埋めない。

「初二持込」の控えを巡路帳に挟む。

EP42「北町責任者」

内景・与善堂前の間・夜

北町巡路の会合。

庄吉、源造、春子、絹江、宗一、配置先の二人が店内に座る。

壁には空白の巡路札。

庄吉： 北町をいつまでも「宗一代管」とは書けん。

年長の配置先が澪を見る。

年長者： まだ十八だろう。

漉がすぐ口を開く。

漉：昭和六年から付き歩き、二十九回――

宗一：二十七。

漉：二回も山へ上がった。

宗一：飯だ。

漉：持込日は十三回――

宗一：十二。

漉：最後まで言わせて。

宗一：一つだけ聞く。

最後の一組の常用薬配置を机へ置く。

宗一：欠品の時、馴染みと知らない家、どちらか一軒だけ補える。馴染みに待てと言えるか。

店内が静かになる。

漉の掌には巡路印の跡がまだ薄く残っている。

漉：言えます。

年長者：叱られても。

漉：つらくないとは言えません。

少し置く。

漉：でも、帳は変えません。

絹江が宗一を見る。

宗一は補わない。

庄吉が巡路札を漉の前へ押す。

漉が筆を取る。

「北町巡路責任者：青木漉」

三年前の普通巡路札より、字は落ち着いている。

宗一：責任者は番頭ではない。

漑：知ってます。

宗一：薬剤師でもない。

漑：知ってます。

宗一：すべての掛けを自分で立て替えられるわけでもない。

漑が宗一を見る。

漑：その一文は、あなたが先に覚えて。

源造が下を向き、咳で笑いを隠す。

内景・与善堂前の間・散会后

漑は巡路印を自分の小箱へ入れる。

腰から店の鍵を外す。

辰夫：部屋へ持っていかないの。

漑は鍵を共用木鉤へ掛ける。

漑：明朝も店を開ける。

辰夫：なら持っていけばいいのに。

漑：これは店を開けるもの。眺めるものじゃない。

宗一が後ろで湯飲みを片づける。

口元がほんの少し動く。

巡路札が壁へ掛かる。

今回は、漑の名前は紙の端の仮書きではない。

EP43「崩れ豆腐、半銭」

内景・与善堂前の間・早朝

春子が崩れ豆腐の皿を持ってくる。

漣は手慣れて帳を開く。

漣：今回も半銭。

春子：誰が決めた。

漣：前は半銭だった。

春子は皿を引く。

春子：前的大豆はいくらだった。

漣が止まる。

春子：柴はいくら。水はいくら。

漣：いつも、崩れたら売れないって言うじゃない。

春子：一丁では売れないだけで、値がないわけじゃない。

宗一が葉棚の奥から見る。

春子：古い人情だって、三年据え置きじゃやっていけない。

漣の顔が熱くなる。

秤を出す。

豆腐を皿ごと量り、皿の重さを引く。

漣：前より少し軽い。

春子：今日は豆が高い。

二人が同時に算盤を弾く。

漣は重さ。春子は大豆と柴。

答えは半厘違う。

辰夫が新聞を下げて入る。

辰夫：半厘で争うの。

春子：新聞の字が一つ抜けても同じ値で売るのがいい。

辰夫：抜けた字による。

澪：あなたの名前。

辰夫：それなら値上げ。

春子が追い払う。

内景・与善堂奥の間・少し後

澪が崩れ豆腐を朝飯にする。

宗一が一口。

宗一：塩が多い。

澪：塩の値は変わってない。

宗一：手の値が変わった。

結尾

前の帳頁。古い値は消さない。

澪は横に書く。

「昭和八年三月、量り直し。」

春子が当日の豆値を自分で書き足す。

古い人情は残す。

古い値段を永遠の正解にはしない。

EP44「包み紙一枚」

内景・与善堂前の間・午前

紙屋が二束の紙を帳場へ並べる。

左は去年、同じ銭で買えた厚い束。

右は今年、同じ銭で買える薄い束。

間に同額の銭。

見積を読まなくても、紙が減ったと分かる。

漑は二束をそろえる。

薄い束は厚い束の三分の二。

漑：銭は小さくなってない。

紙屋：紙が遠くなったんです。

宗一：木も、お前の算盤に合わせて早くは育たん。

漑が古い説明紙を出す。

漑：裏が空いてる。古いのを先に使えば。

宗一が一枚抜く。

表には別の家の薬品名と用法。

二つ折りにする。

どう折っても、古い字がどこか見える。

宗一：一度、包みを間違えたら。

漑が墨で旧字を塗ろうとする。

宗一：湿れば墨が抜ける。新旧の字が一緒に読める。

漑は止まり、旧説明紙を別へ置く。

辰夫が戸口から金沢の手紙を渡す。

辰夫：紙が自分で来た。

封筒には二つ入っている。

正式な薬局用紙の見本。

「薬品説明紙は反用不可。普通帳紙は別に回収可。」

もう一つは細く切った小紙。

一言だけ。

「北町は今、君が歩いているのか。」

正式な見本は左。

細い紙は漑の掌。

二つの用件が同じ画面で争わない。

漑はまず正式見本を宗一へ渡す。

漑：これは、あの人が正しい。

宗一：珍しい。

漑：あなたも言った。

宗一：なら珍しくない。

辰夫が漑の掌をのぞこうとする。

漑は手を合わせて隠す。

辰夫：もう一枚は。

漑：店のじゃない。

宗一が目を上げる。

漑はすぐ言い直す。

漑：巡路のことです。

宗一：北町巡路は店のものではないのか。

漑：聞いているのは、誰が歩いているか。

内景・与善堂裏庭・午後

漑が紙を三つに分ける。

籠一つ。

「薬品説明未記入の新紙」

籠一つ。

「普通草稿に使える古帳紙」

小木箱一つ。

「再使用不可の旧薬品説明」

同じ銭で減った紙数を経営帳へ書く。

ただ「紙価上がる」ではない。

「同額にて十二枚減」と書く。

内景・与善堂奥の間・夜

細い紙片が机にある。

漑はすぐ返事を書かない。

先に北町の草図を広げる。

小野家の白桶。

湯屋の裏壁。

春雨のあと水がたまる石段。

図の下に書く。

「今は、私が歩いている。」

漑は止まる。

「宗一の代わりに」とも、「しばらく」とも足さない。

結尾

翌日、正式見本は分類籠の脇へ留められる。

細い紙片は漑の巡路帳へ挟まれる。

まず薄くなった紙束。

次に巡路帳からのぞく小さな角。

「北町は今、君が歩いているのか。」

漣が返事を封じる。

中身は地図と一言だけ。

「今は、私が歩いている。」

EP45「箱扣も値上がり」

内景・与善堂裏庭・午後

新しい銅扣が布の上に並ぶ。

善平が値を言う。

漣：扣一つで、三年前なら二つ買えた。

善平：銅は、お前が大きくなったからといって据え置きにはならん。

源造が割れた扣の薬箱を持ってくる。

源造：自然に古びた。

漣は箱角を見る。

新しい凹み。

漣：自然に魚籠の形になるの。

源造：魚が多いと、ちょっと当たる。

善平が指で扣を見る。

善平：軸は確かに摩耗。割れは後から押した傷だ。

源造：で、古さか。魚か。

漣が紙を広げる。

三行。

「自然老朽」

「使用破損」

「店方装配」

源造が二行目を指す。

源造：この字面、冷たいな。

漑：魚籠で薬箱を押すのも、温かくない。

宗一が咳をする。

漑は調子を収める。

漑：軸摩耗は店持ち。裂けた片の交換は半分ご負担。修理手間は与善堂で。

源造：なぜ三七じゃない。

漑：あなた三、こちら七？

源造：わし七、お前三。

漑：正直ね。

源造：お前が七だ。

善平が銅扣を源造の掌へ置く。

善平：自分で付ければ、手間賃は要らん。

源造は小さな銅片を見て、すぐ戻す。

源造：専門のことは、専門を尊重する。

内景・与善堂前の間・少し後

源造は木片代の半分会払い、魚を二尾置く。

漑は魚を脇へ置く。

源造：少し引いてくれ。

漑：魚は奥で別買い。箱扣と同じ帳にはしません。

源造：銭は同じ戸に入るだろう。

漑：入る戸は同じでも、落ちる帳は違います。

宗一：魚を帳に落とすな。

結尾

漑が書く。

「自然老朽：店担」

「外力裂損：田辺家、材料半数負担」

別行。

「魚二尾購入」

源造が読む。

源造：魚に二つの身分を持たされたのは、初めてだ。

EP46「灯油帳」

内景・与善堂前の間・黄昏

漑が灯油帳に新単価を書く。

書いてから、もう一度算盤。

漑：持込日前は今まで通り。普通日は一刻早く灯を落とす。

宗一：戸は。

漑：門は下ろさない。仕事灯を少し低くするだけ。

宗一が見る。

漑：第一季で覚えました。店じまいみたいにはしません。

絹江が洗い済みの薬袋を持ってくる。

絹江：夜に来る女は、あんたたちが油を惜しんでるかなんて、先に聞きに来ないよ。

漑：灯油、本当に上がったの。

絹江：湯屋の柴も上がった。柴が高いからって、最後の一釜を先に捨てたりはしない。

宗一：捨てたでしょう。

絹江：忙しい忙しいと言って、来ない人がいた時だけだよ。

宗一は黙って薬袋を整える。

漑が二人を見る。

漑：持込日の夜は一時間残す。他の日は、約束がなければ早めに灯を低くする。

絹江：約束はどうやって取る。

漑：配達の人に聞きます。辰夫に言づけてもいい。

辰夫が入ってくる。

辰夫：俺、夜に誰が具合悪いかまで知るの？

漑：来る人だけ。理由は知らない。

辰夫：それ、我慢が要る仕事だ。

絹江：我慢できないなら、やらない。

辰夫はすぐ黙る。

外景・与善堂前・持込日の夜

灯は敷居の内側を照らす。

一人の婦人が足早に入り、通りの知り合いを避ける。

漑はなぜ夜かを聞かない。

ただ、修理待ちの木扣を受け取る。

結尾

灯油帳に書く。

「新単価」

「持込日夜一時間」

「普通日、約ある時は残灯」

宗一が見る。

宗一：字が増えて、油は大して減らん。

漉：でも、何のために燃やすかは分かります。

EP47「玻璃棚の値札」

内景・黒沢薬房・午後

玻璃棚が明るい。

値札は同じ手で書いたように端正。

漉が棚の前に立つ。雨粒のついた自分の顔が映る。

黒沢が玻璃瓶の見積を出す。

黒沢：札紙は別勘定です。

漉：栓は。

黒沢：込みです。

漉：破損は。

黒沢：客方なら客方。店方なら店方。

漉が黒沢を見る。

黒沢：与善堂も、分けるようになりましたか。

漉：分けなければ、先に店が傷みます。

黒沢が微笑む。

黒沢：新田先生も、この前、玻璃瓶のことで手紙を。

漉がすぐ顔を上げる。

漉：どうしてあなたへ。

黒沢：売っているからです。

漉：与善堂に聞いてもいいのに。

黒沢：聞いたのかもしれませんが。

漉：聞いてません。

言ってから、答えが早すぎたと気づく。

黒沢はからかわず、修司からの見積紙を出す。

「汐見町は潮気が強い。軟木栓と玻璃瓶、どちらが反復開封に適するか。」

黒沢：湿った時、札がはがれないかも聞かれました。

漑：それは第三季……いえ、三度目の仕入れで。

黒沢：第三季？

漑が止まる。

漑：第三回の仕入れです。

黒沢は一瞥するだけで、つつかない。

辰夫が玻璃棚の外から顔を映している。

黒沢：お使いが棚を拭いています。

漑：顔で。

辰夫：与善堂より光る。

漑：帰ったら木棚を拭く。

内景・与善堂前の間・夕方

漑は黒沢の値札形式を広げる。

宗一：買ったのか。

漑：見積だけ。

宗一：ここをなぜ強く消してある。

紙端に黒沢の伝言。

「返事が早いからです。」

漑は墨で塗ってある。

漑：字が下手。

宗一：黒沢の字だ。

漑：だから余計に。

結尾

玻璃瓶の見積と値札様式は残す。

修司が聞いていたからといって、すぐ買いはしない。

EP48「一軒を待たせる」

内景・与善堂前の間・午前

巡路札の脇に書かれている。

「石田家、本日補充」

だが山荷はまだ来ない。

漑が空の薬斗を見る。

宗一：さらに二日延ばす。

漑：もう一度待たせました。

宗一：荷は、気まずさで早まらん。

漑：ほかの家から一組回せば。

宗一：どの家だ。

漑が巡路をめくる。

回せるのは小川家だけ。

幼児あり。使用が早い。

漑は帳を閉じる。

漑：回しません。

外景・石田家前・午後

老人が竹垣を直している。

漉が、さらに二日待つことを説明する。

老人はすぐ怒らない。

老人：前は二日と言った。

漉：はい。荷道がまた止まりました。

老人：お前が小さい頃――

漉：抱いてくださいました。

老人：抱いた。

漉：そのことでは、薬斗は満ちません。

老人が竹を置く。

老人：口ぶりが宗一に似てきたな。

漉：それは困ります。

老人が少し笑い、すぐ戻る。

老人：黒沢のほうは。

漉：代替配置があります。値は違います。現金が足りなければ初十払いと記します。もし今の症状が待つべきでないなら、薬箱で粘らず医者へ。

老人は票を見る。

老人：用意はしてきたのか。

漉：用意したからといって、気に入っていただけるとは思っていないせん。

老人：気に入らん。

漉：承知しています。

老人は票を取る。

老人：二日だ。

漉：二日です。

内景・与善堂前の間・夕方

漑が巡路印を外す。

印箱の縁で掌に赤い筋がつく。

宗一が濡れ布を渡す。

宗一：拭け。

漑：決めたことは変えてません。

宗一：だから、手まで罰を受ける必要はない。

漑は手を拭く。

赤い筋はしばらく消えない。

結尾

巡路札の石田家補充日は線を引かれ、新しい日が書かれる。

前の日付は消さない。

横に書く。

「本人へ説明済」

「了承済」とは書かない。

EP49「雨が荷を追ってくる」

外景・与善堂前・午後

空が急に暗い。

風で暖簾が横へ飛ぶ。

小さな荷車が店前に急停車。

最初の薬材包みが車板から水たまりへ滑る。

漑が飛び出して受ける。

漑：全部降ろさないで！ 湿気に弱いのはどれ。

配達人は雨で目を開けられない。

配達人：黄柏、細辛、外包の破れた説明紙巻き！

宗一はすでに戸口にいる。

宗一：黄柏は裏庭の庇へ。細辛は上棚。ほかは戸口を塞ぐな。

絹江が湯屋の方から走ってくる。乾いた布を二枚抱えている。

絹江：どこへ敷く。

漑：右！ 濡れた木箱底に触れないで！

源造が魚籠を暖簾の下へ伏せる。

源造：まずこれを押さえろ。でないと町中が薬を食いに来る。

辰夫は荷車から転がった空竹筒を追って雨へ走る。

辰夫：北町へ逃げた！

漑は包みを数えながら叫ぶ。

漑：十一、十二――紙筒が一つ足りない！

辰夫（通り）：追ってる！

動きが同時に走る。

宗一が最も濡れた包みの外縄を解く。

絹江は素早く乾布を替える。

源造は肩で戸板を押さえ、魚籠で暖簾を留める。

漑が車上の最後の二つを確かめる。

雨が少し弱まる。

内景・与善堂前の間・少し後

重点薬材三包は広げて検分中。

辰夫が竹筒を抱えて戻る。全身ずぶ濡れ。

辰夫：北町には取られなかった。

宗一：元から北町の物だ。

配達人が息をつく。

配達人：青木志乃さんが、自分の油紙を剥がして細辛を包んだ。こっちを先に届けろって。本人は上嶺村へ回った。

漑の動きが止まる。

漑：帰ってこないの。

配達人：橋の水が増えて、山腰へ回った。

漑：本人に油紙は。

配達人が首を振る。

配達人：ない。

内景・与善堂前の間・続き

漑は一番奥の薬材包みの挟みから、乾いた紙を引き出す。

志乃の字。

「河橋増水。黄柏先検。上嶺村、山腰へ改道。ほか帰店後に核。」

挨拶はない。

自分が濡れるとも書いていない。

絹江は漑の顔を見ても、慰めない。

ただ乾いた布を手元へ置く。

漑（低く）：あの人、雨より先に道を書く。

宗一：道を書かなければ、荷がもう一度濡れる。

漑：人を書かなければ、濡れないの。

宗一は答えない。

内景・与善堂前の間・夜

皆は帰った。

濡れた荷札が庇の下に掛かり、一滴ずつ落ちる。

漑は一人で志乃の改道記録を写す。

写し終えても、紙をすぐしまわない。

乾いた紙を仕事灯のそばへ置く。

小腰掛けには、絹江が残した乾布。

漑は髪を拭かない。

まず布を最も濡れた荷札の下へ敷き、帳机へ水が落ちないようにする。

結尾

灯の下に滴る音だけ。

漑は志乃の乾いた紙を裏返す。

裏は空白。

二息待ってから、巡路帳へ押し込む。

EP50「北町は今、君が歩いているのか」

内景・与善堂前の間・二日後・午後

EP49の濡れた荷札は乾いている。

皺だらけで、帳机の角に押さえられ、志乃の確認を待っている。

外は雨ではない。

辰夫が金沢の手紙を持ってくる。

辰夫：今度は薄い。

漑：触ったの。

辰夫：封筒がそう言った。

漑が開く。

中は細い紙片一枚だけ。

「北町は今、君が歩いているのか。」

専門の説明も表もない。

ただ、漑へ聞いている。

漑は読んで、紙片を巡路帳の下へ置く。

宗一が背後を通る。

宗一：誰から。

漑：金沢。

宗一：金沢は広い。

漑：修司。

宗一：何を。

漑：道を聞いてます。

宗一：迷ったのか。

漑：まだ。

内景・与善堂奥の間・夜

漑が返事の紙を広げる。

一通目。

「北町現配置戸三十二ーー」

止まる。

丸める。

二通目。

「持込日は毎月一回へーー」

また止まる。

正式な経営紙を遠ざける。

普通の巡路草図を出す。

修司が覚えているが、変わってしまった三つを描く。

小野家の白桶。

湯屋の裏壁。

取り壊された旧橋。

旧橋の位置は二本の断線だけ。

脇に新しい石段。

下に書く。

「今は、私が歩いている。」

書いてから、小さく読む。

漑：今は、私が歩いている。

修司へ報告するというより、自分に確かめるように。

外景・郵便局前・翌朝

辰夫が手紙を持って中へ入る。

漑が石段の下から呼ぶ。

辰夫が振り返る。

漑は上がって手紙を取り戻す。

辰夫：また出さないの。

漑は開封する。

「今は、私が歩いている」の下に一行足す。

「あなたの覚えている橋は、もうありません。」

「あなた」を「古い図」に変えようとする。

変えない。

封じ直し、辰夫へ渡す。

辰夫：今度は。

漉：出して。

辰夫：橋がなくなっただって、わざわざ。

漉：戻った時、間違えるから。

言って、自分が先に止まる。

辰夫は笑わない。

手紙をしまう。

結尾

郵便局の戸が閉まる。

漉はすぐ去らない。

辰夫が手紙を窓口へ出すまで見ている。

手紙が本当に自分の手を離れてから、北町へ戻る。

この回で「今は、私が歩いている」は、書かれ、読まれ、出される。

EP51「箱が一つ足りない」

内景・与善堂前の間・持込日の午前

床に十二の位置。

箱は十一。

漉が三度数える。

漉：十一。

辰夫：さっきも十一。

漉：四度数えても、箱は生えない。

源造：誰かが間違えて抱えて帰ったんじゃないか。

春子：空の修理箱を誰が抱えて帰るの。

善平が戸口を通る。

善平：箱なら一つ、修理に来てる。

全員が見る。

漣：誰が持っていったの。

善平：辰夫。

辰夫：朝は一つしかー

止まる。

辰夫：一つ。

漣：どれ。

辰夫：待てよ。源造叔父さんから二つ受けて、道で修理のを善平の店に置いて、もう一つを
こっちへー

源造：わしが渡したのは一つだ。もう一つは絹江が湯屋から持ってきた。

絹江：門の脇に置いて、あんたに取れと言った。

辰夫：「あれ」って言うただけで、どれとは。

絹江：門の脇には一つしかなかった。

源造：魚籠の脇にも一つしかなかった。

漣は額を押さえる。

皆、自分の場面は覚えている。

つないでも、箱は一つ足りない。

外景・商店街・続き

皆が分かれて探す。

漣は湯屋へ。

辰夫は仕立屋へ。

源造は魚屋へ。

春子は街口で箱番号を叫び、売り声と間違えられる。

内景・善平仕立屋・少し後

修理待ちの空箱は机の下にある。

善平は銅扣を測っている。

辰夫：なんで返さないんだよ。

善平：直してから返すと思った。

辰夫：言ってよ。

善平：置いて走ったのはお前だ。

辰夫：「これ修理」って言った。

善平：聞いた。

辰夫：じゃあ何が問題。

漑が着く。

箱を見る。二人を見る。

誰も嘘をついていない。

誰も忘れていない。

ただ、共通の受け渡し動作がない。

内景・与善堂前・夕方

漑が小さな行先札を立てる。

可動の木挟みが三つ。

「在店」

「修理へ」

「外出」

漉：手を通した人が動かす。

辰夫：俺の物忘れ対策？

漉：全員が、自分だけ覚えていれば足りると思うことへの対策。

辰夫は返事をしない。

「修理へ」の木挟みを強く押し、背を向けて出ていく。

内景・与善堂奥の間・夜

春子が飯を三碗盛る。

宗一の一碗。

漉の一碗。

三つ目は、いつもの辰夫の席。

本人は来ない。

漉はその碗を見る。

宗一：冷めたら下げる。

漉：いつも二碗食べる。

宗一：今日は一つ洗わずに済む。

漉は笑わない。

三つ目の碗に蓋をする。鍋へは戻さない。

結尾

行先札は戸口に立つ。

小腰掛けのそばに、辰夫がいつも散らす新聞紐もない。

次回の衝突は突然ではない。

辰夫は、夕飯に残らないことで先に一度言っている。

EP52「辰夫は走らない」

内景・与善堂前・早朝

辰夫が新聞を届ける。

置く。

漑が差し出した巡路紙を受け取らない。

漑：小川家、通り道。

辰夫：通りじゃない。

漑：毎日そこを通るでしょう。

辰夫：今日は新聞だけ。

行先札を指す。

辰夫：今は札だけ信じて、人の言葉は信じないんだろ。箱を運ぶだけの人を探せばいい。

漑：札はあなたを責めるためじゃない。

辰夫：昨日なくなったのは、俺が運んだ箱だ。

漑：昨日は、あなた一人のせいじゃない。

辰夫：でも札は、俺が毎日立つ場所に立った。

新聞代を受け取る。

辰夫：約束の新聞は届ける。薬箱は受けない。

出ていく。

外景・北町巷口・午前

宗一が自分で箱を運ぶ。

小川家の住所へ着き、戸を叩く。

返事がない。

もう一度。

隣の婦人が顔を出す。

婦人：午前は寝てるよ。午後においで。

宗一は巡路紙を見る。

住所は合っている。

時刻は書いていない。

外景・晒布小路・午後

漑が箱を抱えて入る。

小路いっぱいには布が干され、通れない。

向こうから春子が叫ぶ。

春子：辰夫なら、午後はそこを通らないよ！

漑：どうして巡路紙に書いてないの。

春子：皆、知ってるから。

漑は干し布を見る。

漑：皆の中に、紙は入ってない。

外景・老人家の窗外・夕方

源造が戸を叩く。

返事はない。

大声で呼んでも老人は聞こえない。

隣人が出る。

隣人：木窓を三つ叩いて。震えなら分かる。

源造が叩く。

窓が開く。

源造（小声）：新聞配りの足には帳面が入っとるな。

外景・河堤・黄昏

辰夫が座って新聞を折っている。

漉が来る。葉箱は持っていない。

漉：札は置き場所を間違えた。

辰夫：外した？

漉：外さない。

辰夫が見る。

漉：昨日、皆が自分の分だけ覚えていた。それでも箱は危なかった。札は要る。

辰夫は下を見る。

漉：でも、箱の行先しか考えなかった。受け渡した人が、自分を問題にされたように感じることを考えなかった。

辰夫：俺も、自分が覚えていればいいと思ってた。

漉：あなたの知っていることは、ほかの人は知らない。

辰夫：誰が午前寝てるかなんて、皆知ってる。

漉：宗一は知らなかった。

辰夫が思わず笑う。

辰夫：番頭さんは知らないことが多いな。

漉：私も、晒布小路が午後通れないのを知らなかった。

辰夫：姉ちゃんは前しか見ない。

漉：だから戻って書く。

内景・与善堂前・翌朝

行先札に一欄が増えている。

「大事な申し送り」

漉は経手人の第一行に先に書く。

「青木漉」

辰夫が筆を取る。

下に自分の名を書く。

二枰分。

漑：一枰でも見える。

辰夫：働きの量だ。

申し送り欄へ足す。

「小川家、午前寝る」

「晒布小路、午後不可」

「小河家、木窓三つ」

宗一が見る。

宗一：字が大きい。

辰夫：老人に見える。

宗一：見るのは我々だ。

辰夫：そっちも老けるのが早い。

結尾

辰夫が小川家の箱を抱える。

先に「在店」の木挟みを「外出」へ移す。

今回は、誰が持ち出したかも、戸をどう叩くかも、皆が見ている。

EP53「薬にも休みがある」

内景・与善堂前の間・午前

常用薬斗が空。

小さな男の子が中をのぞく。

男の子：薬、逃げたの。

宗一：逃げていない。

男の子：じゃあ、どこ。

宗一：人より上手に休みを取った。

母親が男の子を引き戻す。

前の間には三軒が待っている。

石田老人：黒沢にあるのか。

漑：近い配置はあります。ただ、値段が違います。

若い婦人：黒沢は現金ですね。

山村の客：明日山へ上がる。駅へ回る暇はない。

誰も無理を言っているわけではない。

心配がそれぞれ違う。

漑は三枚の紙を置く。

「黒沢転買」

「本店入荷待ち」

「待つべきでない症状、医者へ」

宗一が一軒ずつ専門の境を説明する。

宗一：薬箱は、すべての病を持たせる物ではありません。医者へ行くべき時は、荷を待たない。

石田老人：わしは常備が欲しいだけだ。

漑：二日お待ちになるか、転買票をお持ちください。黒沢は初十精算を受けましたが、値は黒沢のものです。

若い婦人：黒沢へ行ったことを、姑に知られたくありません。

漑：票は内頁へ入れます。外札には掛けません。

山村の客：明日山へ上がる分は。

漑：隣村の協力商に一組あります。三郎へ口上を頼みました。今日返事が来ます。

黒沢本人が戸口に現れ、転買値段表を渡す。

黒沢：私が出すのは、私の店にあるものだけです。適さないかどうかは久世さんの判断で。

宗一がうなずく。

誰も客を奪ったと言わない。

内景・与善堂前の間・少し後

男の子がまた空葉斗を見る。

男の子：休み、いつまで。

澤が小札を掛ける。

「初六入荷予定」

下を書く。

「転買先：黒沢薬房」

「急症は医者へ」

澤：帰る日を書いた。

男の子：父ちゃんの休みより分かりやすい。

母親が口を押さえる。

結尾

空の葉斗は布で隠さない。

与善堂は、今日ないことを認める。

次に何をするかも書く。

EP54「今度は君が案内する」

内景・与善堂前の間・午後

金沢からの手紙。

漣が開く。

中には巡路カード。

修司が記憶で北町を描いている。

湯屋の位置は正しい。

小野家の白桶も道端にある。

だが旧橋は、まだ川に架かっている。

脇に一行。

「僕が離れた時、ここはこうではなかった。」

その下。

「今度は君が案内する番だ。」

辰夫がのぞく。

辰夫：橋、生え直した？

漣：修司兄ちゃんが描いた。

辰夫：じゃあ金沢で生えた橋だ。

漣は赤筆で旧橋に細い線を引く。

塗り潰さない。

横に書く。

「昭和七年撤去」

新石段と雨後の迂回を描く。

外景・北町・夕方

新しい配置家庭が、空箱を湯屋脇の親類へ一時移したいと言う。

漣は修司の巡路カードを持って歩く。

旧橋の位置まで来る。

前は河岸だけ。

辰夫：本人が帰ってきたら、川へ落ちるね。

漑：だから知らせる。

二人は新石段を回る。

カードの白桶はまだある。

湯屋の裏壁もある。

修司は全部間違えてはいない。

彼の汐見町が、三年前で止まっているだけ。

内景・与善堂奥の間・夜

漑は直した巡路カードを広げる。

まず書く。

「橋はない。」

止まる。

書き直す。

「帰っても、道を間違えないで。」

EP55「転買」

内景・与善堂前の間・早朝

戸が開くと同時に、男が薬箱を抱えて入る。

男：昨夜、最後の一包を使いました。

宗一が使用紙を検める。

宗一：どなたが具合を。

男は少し迷う。

漑は誰かを追わない。

澪：今必要なのは配置の補充ですか。それとも、すでに症状がありますか。

男：夜にまた使うかもしれないので。

宗一がうなづく。

宗一：与善堂には本日ありません。

男の顔が変わる。

男：では、どうすれば。

澪が黒沢転買票を出す。

澪：黒沢に同類配置があります。値段は黒沢薬房のものです。票は戻り次第、お宅の内頁へ挟みます。今すでに強い不調があるなら、薬箱を待たず医者へ。

男は票を見る。

男：これを持って行くと、与善堂を使わなくなると思われませんか。

宗一：薬房は婚約ではありません。

澪：こちらの面子より、必要な薬が届くことが先です。

男：黒沢さんは、なぜ与善堂から来たか聞きますか。

澪：票番号だけです。

内景・黒沢薬房・少し後

澪は男を玻璃棚まで連れてくる。

黒沢が票を照合する。

黒沢：同類配置です。価格はこちら。用法紙は旧薬と混ぜないでください。

男は玻璃棚を見て、澪を見る。

男：本当に客をよそへ連れてくるんだな。

黒沢：この人が連れてきたのは、客ではなく人です。

澪が黒沢を見る。

黒沢：変ですか。

漉：値札みたい。

黒沢：値札は少なくとも分かりやすい。

男が笑う。

内景・与善堂前の間・夕方

漉は転買票の控えを巡路帳に挟む。

書く。

「転買説明済」

宗一：差額を誰が持つか書け。

漉：本人確認。

宗一：次も欠品したら。

漉：また説明します。一度送ったからといって、以後ずっと黒沢へ行くとは決めません。

結尾

与善堂は一軒を失っていない。

黒沢も勝負に勝ったわけではない。

男は必要な薬を持って帰る。

二つの店は、どちらも戸を開けている。

EP56「家の内は聞かない」

内景・黒沢薬房・午後

若い婦人が黒沢の帳場で薬を買う。

黒沢は品目、数、注意だけを聞く。

誰が使うかは聞かない。

婦人は現金で払う。

出ようとして、転買票を取りに来た漉と目が合う。

婦人は気まずそうになる。

漑はなぜ来たかを聞かない。

横へ身を引くだけ。

内景・与善堂前の間・数日後

婦人が与善堂の古い薬箱を抱えてくる。

婦人：これ、止めてください。

漑が未使用薬を検める。

漑：停止できます。使用二包、六銭。箱体は損傷なし。

婦人が銭を出す。

四銭しかない。

手が止まる。

婦人：黒沢さんは、掛けがききません。

漑：はい。

婦人：あちらは、姑がどうしても私を行かせるかも聞きません。

漑は与善堂を弁解しない。

漑：あちらの楽なところは、続けて使ってください。

婦人が顔を上げる。

漑：家の常備箱が必要なら、こちらも残せます。外札は戸主のまま。内頁には、取りに来る人と支払日だけ書きます。

婦人：両方使っても。

漑：店は忠義試しではありません。

宗一は棚の後ろで薬を量っている。

宗一：ただし説明紙を混ぜないこと。

婦人：与善堂を信じていないと思われませんか。

漉：どこがつかったかを言ってくださるほうが、信じたふりより助かります。

婦人は考える。

箱を止めない。

内頁を取り、取用人欄へ自分の名を書く。

結尾

外札は夫の名。

内頁は婦人本人。

支払日は初八。

彼女は薬箱も、黒沢薬房の紙袋も持って帰る。

二つの選択は、互いを消さない。

EP57「番頭の立替」

内景・与善堂奥の間・夜

漉が銭箱を合わせている。

帳面上の現金より、実際が少ない。

数え直す。

やはり少ない。

漉：宗一。

返事はない。

銭箱の底を開ける。

小さな紙が数枚、下に押し込まれている。

「久世宗一、二銭立替」

「久世宗一、五銭立替」

「久世宗一、一銭半立替」

家名なし。

日付なし。

澤は一枚ずつ机へ広げる。

宗一が茶を持って入る。

見て、足が止まる。

宗一：深くまで見たな。

澤：浅く隠してありました。

宗一：銭箱にあるものは、隠したとは言わない。

澤：帳にはどうして収済と。

宗一：銭は入った。

澤：入ったのはあなたの銭です。

宗一：銭に姓はない。

澤：人にはあります。

宗一が手を伸ばす。

澤は紙を押さえる。

澤：どの家かは聞きません。でも、店の中にどれだけ「もう取ったことにした銭」があるかは知ります。

宗一：書けば、人がもっと入りにくくなる。

澤：書かなければ、まだ立て替えられると思ってしまう。

宗一：俺は分かっている。

澤：あなたしか分かっていない。

宗一：もういい。

澤：どこがいいんですか。帳は合って、銭箱は足りない。あなたの「いい」は、誰にとってですか。

宗一は黙る。

漑：与善堂は、あなたが一食抜いて開ける店じゃない。

言葉が落ちる。

宗一は茶を漑の前へ置く。

宗一：先に飲め。

漑：話をそらさないで。

宗一：茶が冷めたら損耗も書く。

漑は怒りすぎて笑えない。

内景・与善堂前の間・続き

呼び鈴。

補箱の客が来る。

宗一が出ようとする。

漑：今回は、戻して隠さないで。

宗一：額から家を推測するな。

漑：しません。

宗一：お前の銭で補うな。

漑：あなたも。

宗一：俺は番頭だ。

漑：だから、なおさら書くんです。

宗一は漑を見て、前へ出る。

結尾

漑は小紙を新しい挟みに入れる。

表に書く。

「宗一立替」

家名は書かない。

金額と日付を書く。

宗一が戻り、帳机の上の挟みを見る。

もう錢箱の底へ戻さない。

EP58「赤筆」

内景・与善堂前の間・午後

庄吉が赤筆を持ってくる。

漑は見た瞬間、帳本を守る。

漑：今日は見るだけ。殺さないで。

庄吉：帳はもう傷んでいる。血の出ている所を探す。

宗一：帳は病ではありません。

庄吉が一頁を開く。

小さな三角を丸で囲む。

庄吉：これは。

宗一：荷未着。

二頁めくる。

同じ三角の横に「収済」。

庄吉が目上げる。

宗一が少し止まる。

宗一：この頁は、家に人なし。

漑：同じ印で二つの意味？

宗一：位置を見れば。

庄吉：お前がいない時、位置は口をきくのか。

前の間が静まる。

宗一が帳を戻そうとする。

庄吉が押さえる。

庄吉：自分だけ分かるのは、帳じゃない。他人が継げて、帳だ。

宗一：まだ当分いる。

庄吉：強がり帳に入らん。

辰夫が戸口で笑いをこらえる。

宗一：新聞は終わったか。

辰夫は即座に消える。

内景・与善堂前の間・少し後

庄吉はもう一つずつ質問しない。

頁を早くめくる。

分からない符号を赤で囲む。

赤丸が次々増える。

説明台詞はない。

漣：この帳、発疹みたい。

庄吉：見えるだけましだ。

宗一は赤丸だらけの頁を見る。

自分で空紙を持ってくる。

第一条を書く。

「小三角は一義のみ。荷未着。」

以前「家人不在」に使っていた箇所は、文字で書く。

漉：ほかは。

宗一：一日に三つ。

庄吉：なぜ一度に全部やらん。

宗一：一度で全部やれば、明日誰が店を開ける。

庄吉は反対しない。

結尾

庄吉が赤筆を宗一の手元に置く。

宗一は自分で、先ほどの二義符号を赤で囲む。

赤丸は恥ではない。

この帳が、自分の記憶だけでは渡せないと、宗一が初めて公に認めた印。

EP59「一膳の飯、未払」

内景・与善堂前の間・深夜

最後の持込箱が帰ったばかり。

宗一はまだ薬を検めている。

漉は机端でうとうとしている。

絹江が入り、弁当箱と乾布を置く。

絹江：湯屋を閉める前に残しておいた。

宗一：いりません。

絹江：あんたにじゃない。机にだよ。腹の音を聞かされて迷惑してる。

漉がすぐ起きる。

漉：私も聞こえました。

宗一：二人とも暇だな。

絹江は乾布を宗一の肩へ投げる。

絹江：袖口が濡れてる。先に拭きな。

宗一は礼を言わない。

弁当箱を開ける。

握り飯二つ、香の物少し。

内景・与善堂前の間・翌朝

絹江が葉袋を届けに来る。

帳頁に新しく書かれているのを見る。

「佐藤湯屋、飯一份、未払」

その下。

「湯一回」

「乾布一枚、返却待ち」

絹江は庄吉の赤筆を取る。

「未払」に一本線。

「湯一回」の金額空欄にも線。

宗一：帳を直すのか。

絹江：私の飯を店の掛けにしたのはそっちだよ。

宗一：食べたものは算える。

絹江：算えないとは言っていない。

宗一：では、どう算える。

絹江は筆を止める。

絹江：自分で考えな。

宗一：今考えています。

絹江：今しているのは、値段探しだ。

赤筆を置く。

乾布は折って帳場角にある。

絹江：布は返すこと。

宗一：それは記してよいのか。

絹江：布は湯屋の物だからね。

澤は横で笑いをこらえる。

結尾

帳上の「一膳の飯」の後の「未払」は赤線で消されている。

「贈」とは書かない。

金額もない。

宗一はその欄を見つめる。

初めて、すぐにはどの帳にも入れられないものにぶつかる。

EP60「空白の欄」

内景・与善堂前の間・早朝

宗一が絹江に赤線を引かれた頁を開く。

筆を取る。

空欄に書こうとする。

澤は持込票を分けている。

横目で見ると、何も言わない。

宗一はまず「人」と書く。

止まる。

線を引く。

次に「店担」と書く。

止まる。

また線を引く。

漑：店担ではありません。

宗一：聞いていない。

漑：字が大きかったのだ。

宗一：目が暇だな。

前頁へ戻る。

また戻る。

空欄は空欄のまま。

内景・佐藤湯屋裏口・午後

宗一が洗って乾いた布を返す。

絹江が受け取る。

宗一：飯代。

金を差し出す。

絹江は取らない。

宗一：算えると言ったでしょう。

絹江：金で算えるとは言っていない。

宗一：では、何が要る。

絹江が見る。

絹江：飯を食べる時、借金みたいな顔をしないこと。

宗一：それは記せません。

絹江：なら記すな。

宗一は眉を寄せる。

絹江：久世宗一。書かなければ、物を取り立てに来ると思ってるのかい。

宗一：大抵は来ます。

絹江：私は自分で行く。

裏口が閉まる。

宗一は銭を持ったまま立つ。

内景・与善堂前の間・夜

宗一が再び帳を開く。

漑はほかの帳を終えている。

その欄は、漑も埋めていない。

宗一が漑を見る。

漑：何に当たるか分かりません。

宗一：分からないのに書かないのか。

漑：第一季で覚えました。

宗一は帳を閉じる。

結尾

空白欄に画面が止まる。

「未払」には赤線。

横に新しい説明はない。

これは忘れではない。

宗一が初めて、すぐ清算しなくていい関係を認めた空白。

EP61「代筆の短箋」

内景・与善堂前の間・午後

郵便配達が転送信を渡す。

宛名は「青木志乃」。

見慣れない字。

漑が郵便印を見る。

忠雄がよく手紙を寄せる外地だ。

封を開ける。

半枚の紙だけ。

「青木忠雄、衛生材料転送中に負傷。右手、車戸および木箱に圧迫され、当面自筆不能。治療済、意識清明、勤務引継中。」

下に代筆人の名。

忠雄の署名はない。

漑は裏を見る。

空白。

辰夫が戸口にいる。

辰夫：宛先違い？

漑：違わない。

信を折る。

また開く。

「右手」の二字で長く止まる。

宗一が薬棚から来る。

宗一：誰の。

漑は信を渡す。

宗一は読み終え、まず日付を見る。

次に転送先。

宗一：十二日前だ。

漑：十二日で、どこまで行ける。

宗一：信は行ける。傷は分からない。

漑：どうして帰ってこないの。

宗一：帰れるかどうか、信にはない。

漑：帰りたいかもしれない。

宗一：代筆人は、そこを代わりに書かない。

内景・与善堂奥の間・少し後

漑は忠雄の古い葉書を出す。

それぞれ違う地名。

字は整い、道は明瞭。

最後の一枚はまだ自筆。

代筆の短箋をその横へ置く。

二つの字は、まるで別人。

結尾

漑は封筒に「受領済」と書こうとする。

筆が宙で止まる。

結局、短箋を忠雄の古い地図筒の脇へ置く。

図筒は開けない。

EP62「右手で書けない」

内景・与善堂奥の間・早朝

漑が忠雄の古地図を広げる。

河、橋、駅、里程。

どの字も同じように安定している。

右手で「汐見町」と写す。

一画目が歪む。

漑は止まる。

自分の字が下手だからではない。

忠雄が右手で書けなくなった時、この古い字を見たらどう思うのか、初めて想像したから。

左手に替える。

もっと歪む。

宗一が戸口を通る。

宗一：お前はどちらの手を怪我した。

漑：どちらも怪我していません。

宗一：なら、人の痛みを代わりに試すな。

漑：知りたいだけ。

宗一：知れん。

漑は二枚の歪んだ字を地図の横へ置く。

内景・与善堂前の間・午後

志乃から山道経由の返事が来る。

数行だけ。

「負傷は長期勤務に影響するか。」

「内勤転入は可能か。」

「送金と引継は誰が扱うか。」

漑は読んでも、すぐ怒らない。

紙を平らにする。

もう一度読む。

漣：痛いかどうかを聞いてない。

宗一：志乃さんは勤務の聞き方を知っている。

漣：父の手が壊れたのに、働けるかを聞くの。

宗一：仕事のことなら返事が来ると思ったのかもしれない。

漣：ほかを聞いたら返事が来ない？

宗一：あるいは、答えが怖い。

漣：怖ければ聞かないの。

宗一は志乃をかばわない。

宗一：お前も、帰るかとは聞いていない。

その言葉が漣に当たる。

忠雄の地図をつかみ、巻きかける。

止まる。

紙が軽く鳴る。

少し力を緩める。

漣：この字は、何も変わらないみたいに見える。

宗一：図は、いつも道に遅れる。

漣が見る。

宗一：人もだ。

内景・与善堂奥の間・夜

漣は返事を書かない。

先に「本当に聞きたいこと」を一枚書く。

「今、痛いですか。」

「誰が着物を着せていますか。」

「自分で食べられますか。」

「帰ることを考えましたか。」

最後の一行を書いた瞬間、消したくなる。

筆先が紙へ触れる。

消さない。

問いの紙を折る。

出さない。

志乃の仕事だけを問う返事を隣へ置く。

二枚とも不完全。

けれど、恐れている場所が違う。

結尾

漑は古地図を巻き直す。

今度はきつく巻かない。

図筒へ戻す時、外側に初めて小紙を貼る。

「忠雄旧図」

まだ「描き直し待ち」とは書かない。

EP63「会いたい」

内景・佐藤湯屋奥・夜

湯屋は閉まっている。

漑は木腰掛けに座り、忠雄の短箋を持っている。

絹江が浴衣を畳む。

絹江：七遍見たね。

漑：六遍。

絹江：じゃあ、もう一遍で切りがいい。

漑は信を折る。

漑：傷がどのくらい知りたいだけ。

絹江：宗一に聞きな。

漑：信にないって言うだけ。

絹江：信にないからね。

漑はいらだつ。

漑：どうして皆、人の分まで考えないの。

絹江：第一季まるごと、人の分を勝手に考えない稽古をしたのに、私らの覚えが早すぎて不満かい。

漑は言い返せない。

絹江は浴衣を畳み続ける。

絹江：知りたいのは傷の重さかい。それとも帰ってほしいのかい。

漑：分からない。

絹江：なら、先に分からないで置きな。

漑は下を向く。

湯管が小さく鳴る。

長い間。

漑：会いたい。

絹江の手が一瞬止まる。

見ない。

漑：でも、誰に会いたいのか分からない。

絹江：どういうこと。

漑：覚えているのは、道を描いて、私を敷居の上へ持ち上げてくれた人。今帰ってくるのは、

四十五で、右手で字が書けない人。

絹江：あんたも六つじゃない。

漑：だから、誰も誰を分らないかもしれない。

絹江：なら、会ってから分ればいい。

漑：帰るなんて言ってない。

絹江は乾布を一枚渡す。

絹江：まず、図の埃を拭きな。会いたいことと、許すことは同じじゃない。会いたいことも、待つこととは同じじゃない。

漑は布を受け取る。

内景・与善堂奥の間・少し後

漑が古地図をそっと拭く。

もう紙をきつく巻かない。

結尾

短箋の裏に初めて書く。

「会いたい。」

書いても出さない。

まず自分だけに見せる。

EP64「収済と書かない」

内景・与善堂前の間・持込日

春子が豆腐籠を持ってくる。

源造が空箱を二つ運ぶ。

一軒は今日、銭がない。

辰夫が戸口で少し聞いて、走り込む。

辰夫：小林家、今日は済み！

漑が顔を上げる。

漑：誰が済みと言った。

辰夫：春子姉さんの豆腐、源造叔父さんの箱運び。皆で小林家を助けるって。

春子：今日の朝飯分を少し折れると言っただけ。

源造：わしが運んだのは与善堂の空箱だ。小林の薬代じゃない。

辰夫：じゃあ、さっき皆うなずいたのは。

源造：首が凝ってた。

漑は三枚の紙を広げる。

漑：小林家、本日八銭。

書く。

「崩れ豆腐、二銭折引」

「源造、空箱運搬。与善堂用工、別途工賃」

「店担一銭」

「未収五銭」

小林家の婦人が赤くなる。

婦人：そう書くと、まだ借りがあるみたい。

漑：あります。

婦人：皆が助けてくれたのに。

漑：助けても、五銭が消えるわけではありません。消えたように書けば、次に店の銭が足りない時、誰も理由が分からなくなる。

辰夫：でも外へ、もう済みって言った。

漑：直して。

辰夫が苦い顔。

漑：直さないと、豆腐と箱運びが人の薬代にすり替わる。春子さんと源造さんの働きも乱れます。

春子がうなずく。

源造：箱運びには工賃がいる。

漑：分かっています。

源造：魚でもいい。

漑：それは別買い。

外景・与善堂前・続き

辰夫が待つ町人へ説明する。

辰夫：さっきのは間違い。済みじゃない。二銭折引、店担一銭、未収五銭。

町人：帳より長いじゃないか。

辰夫：短くすると間違える。

結尾

帳頁はきれいではない。

五つの状態が一行の横に詰まっている。

漑は一番下へ書く。

「未収を収済としない。」

宗一は見ても直さない。

EP65「それぞれの少し」

内景・与善堂前の間・早朝

持込日。

手伝いの町人が店内に詰めている。

源造が帳場の後ろへ立つ。

源造：わしが銭を取る。

春子：魚の勘定もよく間違えるくせに。

源造：魚は動く。

絹江が記録筆を取る。

絹江：私が使用量を聞くよ。

漑：絹江さんが聞くと、町半分の女の人が湯屋も薬帳をつけます。

善平が腰掛けを薬棚の脇へ持ってくる。

善平：手は安定している。薬を分けられる。

宗一はすぐ薬匙を取る。

宗一：だめです。

辰夫が手を上げる。

辰夫：俺、巡路印を押せる。

漑：前に、自分の手を北町にしたでしょう。

辰夫：ここに属してる証拠だ。

皆、重要そうに見える仕事をしたがる。

誰も湿った薬袋を洗うこと、空箱を運ぶこと、知らせを出すことには行かない。

漑は役割紙を出す。

漑：絹江さん、洗いと袋干し。熱洗いでできる布を知ってます。

絹江：よし。

漑：源造さん、空箱だけ運ぶ。薬入り箱は持たない。

源造：なぜ空を強調する。

漑：魚の匂いがあるからです。

源造が袖を嗅ぐ。

源造：今日は海の匂いだ。

漉：海も薬箱には入れません。

漉：春子さん、奥の朝飯。実数で記録。

春子：ただ飯じゃないよ。

漉：もちろん。

漉：辰夫、知らせ、行先札、戸口の順番。

辰夫：印は。

漉：なし。

辰夫：なら腕章。

漉：なし。

辰夫：せめて札。

漉は「知らせ」の木挟みを渡す。

辰夫は胸へ掛ける。

辰夫：まあ、いい。

皆が動き出す。

宗一はその場に立つ。

宗一：俺は。

漉：薬師がすることを。

宗一：それだけか。

漉：それだけで足りませんか。

内景・与善堂前の間・午後

人は多いが、乱れない。

それぞれが、本当にできる部分だけをする。

町人が薬箱を源造へ渡しかける。

源造はすぐ下がる。

源造：空になってからだ。

結尾

役割紙には「手伝いの人」と書かれていない。

具体的な仕事だけ。

宗一は、漑が帳場と巡路札の間を動くのを見る。

初めて、後ろから全部拾って回らない。

EP66「返事に何を書く」

内景・与善堂奥の間・夜

忠雄への返事が机にある。

漑が書く。

「いつ負傷しましたか。」

消す。

「今、誰が世話をしていますか。」

残す。

「長期勤務に影響しますか。」

志乃の問いを思い出し、消す。

宗一は横で箱扣を整えている。

宗一：傷口の感染は。自分で動けるか。転送先の住所は。

漑：あなたも仕事のことばかり。

宗一：はっきり書けることだ。

ちょうど志乃から補紙が届く。

そこには並んでいる。

「任期」

「俸給」

「内勤転入の可能」

漣は紙を机へ置く。

漣：手続を全部聞けば、人は無事でいられると思ってるの。

宗一：聞き終えても、人は無事とは限らない。

漣：なら、どうして怖いか聞かないの。

宗一：お前が聞ける。

漣は筆を握る。

書けない。

内景・佐藤湯屋裏口・少し後

漣が半分空いた手紙を絹江へ持ってくる。

漣：一文だけ、代わりに書いて。

絹江：書かない。

漣：普段はよくしゃべるのに。

絹江：私の言葉を、あんたの父親の手紙へ詰めるんじゃない。

漣：書くと全部公文みたいになる。

絹江：なら、書けるものを書きな。

漣：書けるのは道。

絹江：道を書きな。

内景・与善堂奥の間・深夜

漣が書き直す。

「あなたの古い地図は、まだあります。」

「北町はずいぶん変わりました。」

「旧橋はなくなりました。」

「白桶はまだあります。」

止まる。

「帰って見てください」と書きたい。

書かない。

代わりに書く。

「字が書けるなら、今あなたが見ている道を教えてください。」

長く見る。

最後の一文を消す。

残すのは前の二文だけ。

結尾

返事は封じられる。

「早く帰って」はない。

帰期も聞かない。

漑は辰夫へ渡す。

辰夫：二行だけ？

漑：道は長い。

辰夫：信は短い。

漑：覚えていることを知らせるには、足りる。

辰夫が持って出る。

漑は奥へ戻る。

忠雄短箋の裏、「会いたい」はまだ出されない。

EP67「審査日」

内景・与善堂前の間・午前

机の上が空けられている。

五冊の帳が順に並ぶ。

置薬登録。

北町巡路。

経営帳。

転買票控え。

薬剤師署名。

県と協力商号の審査員が入る。

男女一人ずつ。普段着に近い。

大げさな検査隊でも、店を封じる様子でもない。

審査員はまず宗一を見る。

審査員：与善堂の日常責任者は。

宗一：薬剤師および受託経営は私です。北町巡路は青木濤が説明します。

濤が立つ。

何度も練習した。

それでも出だしは速い。

濤：北町の現配置戸は三十二。近町持込十七、訪問十五、今季新規――

庄吉が横で咳をする。

濤が止まる。

審査員：ゆっくり。こちらを書きます。

濤は息を吸う。

言い直す。

薬箱が店へ戻る理由から。

次に五つの帳面状態。

審査員が「宗一立替」を開く。

男審査員：この金は銭箱へ入ったため、旧帳では収済と。

漑：はい。旧記法です。現在は分けています。

女審査員：家名を公開しない理由は。

漑：公開すると、来にくくなります。金額、日付、立替人は確認できます。家名は内頁で対応します。

審査員が顔を見合わせる。

すぐ正否は言わない。

男審査員：同じ筆が重複立替になるのをどう防ぐ。

漑は挟みを開く。

漑：巡路帳に申し送りを置き、次回訪問時に必ず照合します。

宗一が漑を見る。

これは漑が自分で足した項目だ。

内景・与善堂前の間・少し後

審査員は折引の筆を見る。

豆腐、洗袋、空箱運搬が別欄に分けてある。

女審査員：なぜ一括で銭へ換算しないのです。

漑：まず実際の用途と値を確かめます。馴染みが出したものだからといって、使っていない物まで収入にはできません。

審査員はうなずき、さらにめくる。

漑の手はまだ震えている。

でも、話す速さは落ちている。

結尾

審査員が問題紙を机端へ置く。

第一項。

「宗一立替と経営現金の分離、方向可。照合方法補足要。」

合格ではない。

否定でもない。

漣は「方向可」を見ても笑わない。

まず次の項目を書き取る。

EP68「送られてきた銭」

内景・与善堂前の間・審査翌日

審査員が古い家計帳を開く。

外地送金のいくつかが与善堂経営頁へ移されている。

「青木忠雄寄」

次の行は、

「貸収済」

男審査員：これは商号収入ですか。青木家の家計収入ですか。

志乃がちょうど店で荷を検めている。

歩いてくる。

志乃：忠雄が家へ送ったものです。当時、薬路が断れ、臨時に使いました。

審査員：返済の約定は。

志乃：書く時間がありませんでした。

審査員：後に返済は。

志乃：店は生き残りました。

漑が母を見る。

志乃は逃げていない。

本当に、当時は薬材を先買うことが分類より大事だったと思っている。

漑：その銭は店を救いました。

審査員が漑を見る。

漑：でも、与善堂の営業収入とは書けません。父が家へ送った銭を、後に商号へ入れたものです。

志乃：そんなに分けていたら、当時は荷が切れた。

漑：当時は使っていい。後で補記が必要です。

志乃：補記しても、銭は戻らない。

漑：補記しなければ、父の十四年は「貨代収済」だけになります。

志乃が黙る。

宗一は薬棚の後ろにいる。

どちらの代わりにも言わない。

内景・与善堂前の間・少し後

庄吉が古頁を広げる。

原記録の脇へ注記を足す。

「忠雄、家へ送金」

「後に商号へ転入」

「返済明確ならず」

漑が筆を取る。

「返済明確ならず」で止まる。

志乃：「家中共同負担」と書いてもよい。

漉：それだと、全員が同意したように見えます。

志乃が見る。

漉：私は六つでした。誰も聞きませんでした。

志乃：六つでは商号を決められない。

漉：決められないことと、私に起きなかったことは違います。

空気が静まる。

審査員はこれを家庭裁判にしない。

記録が終わるのを待つ。

漉は最終的に書く。

「返済明確ならず」

審査員は次頁へ進む。

仕事は続く。

だが、母娘のその言葉は消えない。

内景・与善堂裏庭・審査後

審査員は帰った。

前の間には声が戻っている。

裏庭には志乃と漉だけ。

志乃は検めた荷縄を巻き直す。

きつく巻く。

漉は帳頁を干している。

どちらも、先ほどの争いをすぐには口にしない。

志乃：あの時、黄柏と止瀉薬が切れていた。

漉：店が欠品しそうだったのは分かります。

志乃：お前はその冬、熱を出した。

漣の手が止まる。

志乃：私はあの銭で先に薬を買い、薬路も切らさなかった。

漣：だから、聞かなくてよかったと思ったの。

志乃：先に済ませて、後で説明できると思った。

漣：後で説明した？

志乃は答えない。

それが答えだ。

少しして。

志乃：その頁、已還清とは書かないで。

漣：書いてません。

志乃：知ってる。

内景・与善堂前の間・夕方

古帳の脇に、見栄えの悪い補注が増えている。

志乃は破らない。

漣も、その場で謝罪を求めない。

小腰掛けは帳机の脇。

志乃は検め終えた古帳を一時そこへ置く。

自分は立ったまま。

結尾

忠雄の送金は、英雄の功績にも無名の収入にもならない。

母娘の衝突は解決していない。

ただ志乃が初めて、自分から認める。

この金を、もう「説明済」と書いてはいけない。

EP69「宗一は代わりに答えない」

内景・与善堂前の間・午前

審査員が石田家延期記録を指す。

審査員：最初に二日と約し、さらに二日延びています。なぜ青木さんがそのまま担当を続けたのですか。

漑は記録を見る。

審査員：仕入判断の誤りですか。巡路判断の誤りですか。

漑は思わず宗一を見る。

宗一は別机で薬剤師署名を検めている。

顔を上げない。

漑：どちらでもありません。

審査員は待つ。

漑：初回入荷日は志乃の路通知によります。二回目は山橋封鎖によるものです。在庫は一軒分しかなく、私は幼児がいて使用の早い小川家を優先しました。

審査員：石田家は同意しましたか。

漑：気に入ってはいません。ただ、転買票と新日付を受け取りました。

審査員：なぜ記録は「本人へ説明済」で、「同意済」ではないのです。

漑：二日待つとは答えましたが、私の判断に同意したとは言っていないからです。

女審査員が顔を上げる。

女審査員：では、なぜ担当を替えないのです。

漑：馴染みに嫌われるたび担当を替えれば、巡路責任者は機嫌取りしかできません。

宗一の薬匙が一瞬止まる。

振り向かない。

審査員が紙に書く。

漣は見たいが、我慢する。

内景・与善堂奥の間・少し後

漣が水を持つ。手がまだ少し震えている。

宗一が入る。

漣：さっき、どうして答えてくれなかったの。

宗一：聞かれたのはお前だ。

漣：あなたは理由を知ってる。

宗一：お前も知っている。

漣：間違っ言ったら。

宗一：薬師の範囲なら直す。

漣：経営は。

宗一：北町はお前の担当だ。

漣は少し怒り、同時に少し楽になる。

漣：せめて一度くらい見てよ。

宗一：お前は俺を見ると、もっと早口になる。

漣：今日は早くなかった。

宗一：庄吉が三回咳をした。

戸外から庄吉の声。

庄吉（外）：二回目は本物の咳だ！

結尾

審査問題紙に書かれている。

「延期理由および告知、十分。」

「判断正当」とは書かれていない。

漉は紙を北町巡路帳へ挟む。

今回は、自分の判断を説明する責任を負った。

永遠に間違えない証明ではない。

EP70「あと三項」

内景・与善堂前の間・午後

審査員が初步結果を告げる。

男審査員：おおむね継続可。補辦三項。

辰夫は戸口で「三項」を聞き、すぐ外へ走る。

辰夫（外）：与善堂、間違いは三つだけ！ つまり全部正しい！

漉：戻って！

もう町人が祝い始める。

源造が魚を持ってくる。

源造：全部通ったって。

絹江：三つだけ間違いだって。

庄吉：その三つは何だ。

審査員が紙を漉へ渡す。

一、薬剤師署名と巡路責任者説明を分ける。

二、持込箱区分に「停止待ち」を増やす。

三、外買票控えを月別に綴る。

辰夫がまた顔を出す。

辰夫：どれも小さいじゃない。

宗一：小さいことを放すと、大きくなる。

辰夫：一刻くらい喜べないの。

漉は三項を見る。

漉：喜べる。

顔を上げる。

漉：おおむね通りました。

皆が笑いかける。

漉：では、一項目から。

辰夫：一刻は。

漉：過ぎた。

内景・与善堂前の間・少し後

善平が「停止待ち」木札を作る。

庄吉が月別封筒を分ける。

宗一は薬剤師署名欄の横に境線を引く。

漉は自分の説明欄を離し、専門署名と同じ格へ押し込まない。

黒沢が外買票控え用の封筒を持ってくる。

黒沢：全部正しいと聞きました。

皆が辰夫を見る。

辰夫：知らせは道で少し育つ。

結尾

三項補辦は店内の仕事板に書く。

街へ見せびらかさない。

最下にさらに書く。

「完成後、再査」

漉は「通過」の二字を審査紙の中に留め、戸口へ貼らない。

EP71「父が描いた道」

内景・与善堂前の間・午前

新しく越してきた夫婦が配置箱を申し込む。

夫が住所を渡す。

零が北町巡路図を開く。

その新小路が見つからない。

夫が机脇の別の古図を見る。

夫：これは青木忠雄さんの字ですか。

零が少し止まる。

零：はい。

夫が少し広げる。

古図は清く、美しい。

夫：若い頃、荷を運んでいて見ました。橋も里程も正確で。

妻：なら、その図で行けませんか。

零は古図を見る。

図の旧橋はもうない。

新小路の場所は空地のまま。

零：この図は正確です。

日付を指す。

零：十二年前については。

夫は気まずそうになる。

零は忠雄を貶めない。

零：今日、確認に行きます。

外景・北町新小路・午後

漑、夫婦、辰夫が実地を歩く。

旧橋の場所は河岸。

新石段が小路へ通じる。

小路口には春雨の水たまり。

漑が聞く。

漑：薬箱はどこへ置く予定ですか。

妻：戸内の高棚に。

漑：子どもは届きますか。

妻：まだ子どもはいません。

漑：将来あれば、位置を変えてください。

最寄りの医者筋と持込方法も確かめる。

夫が忠雄の古図を見る。

夫：古い線は消しますか。

漑：消しません。

夫：違うのに。

漑：以前どう歩いたかを示します。ただ、今日歩く道には使えません。

内景・与善堂前の間・夕方

漑は古図の脇に新小路を描く。

別の色。

旧橋の横に書く。

「旧路停止」

忠雄の線は塗り潰さない。

辰夫が図を見る。

辰夫：この図、これからどんどん混むね。

漑：道が増えれば、そうなる。

結尾

古図を巻く。

漑は図筒を一つ探す。

外へ、まず書く。

「旧図」

考えて、その下へ足す。

「描き直し待ち」

EP72「並んで答える」

内景・与善堂前の間・持込日の朝

審査再査と持込日が重なる。

戸外にはもう人が並んでいる。

辰夫は行先札を守る。

絹江は洗い済み薬袋を干す。

源造は空箱だけを運ぶ。

春子は奥で朝飯を分ける。

すべて役割紙どおりに動く。

漑は鍵で戸を開ける。

鍵を共用鉤へ戻す。

審査員が入る。

誰も仕事を止めて迎えない。

内景・与善堂前の間・午前

新配置先が空箱を抱えて尋ねる。

新客：箱は竈の脇が便利ですか。

澤：いけません。湿気、熱、子どもが触りやすい。乾いた高い場所へ。ただし家で取用する人は、位置を知っていること。

新客：夜、急ぐ時は。

宗一が横から補う。

宗一：薬箱には家庭常備に適した物だけを置きます。症状不明、または重い時は、箱に薬があるからと医者を遅らせないこと。

審査員が記録する。

別の側で、庄吉が外買票控えの月を尋ねる。

澤は巡路と経営を答える。

宗一は薬事署名だけを扱う。

二人はもう前後ではない。

互いに言葉を奪わない。

内景・与善堂前の間・午後

再査が終わる。

女審査員：補辦三項、完了。

男審査員：立替と店担は、今後も観察を続けてください。一度の検査で片づくものではありません。

澤：承知しています。

審査員が帰る。

町人は拍手しない。

源造は自分の魚籠を探している。

辰夫は戸口で次の箱号を呼ぶ。

生活は結論を待って止まらない。

内景・与善堂前の間・夕方

最後の一軒が帰る。

漑は北町巡路帳を閉じる。

店の鍵を共用鉤へ掛ける。

忠雄の古地図を図筒へ入れる。

「旧図」の下へ、正式に書く。

「描き直し待ち」

宗一は帳机で絹江の欄を開く。

空白はまだある。

漑はそれを見る。

聞かない。

宗一が帳を閉じる。

宗一：明日、北町はどの家から。

漑：先に残りを見ます。

宗一：まだ聞くか。

漑：鍵は戸しか開けません。

宗一が漑を見る。

第一話で宗一が言った言葉だ。

結尾

画面が同時に見る。

壁の札。

「北町巡路責任者：青木漑」

共用木鉤の鍵。

机上の五種の帳頁。

片隅の「描き直し待ち」と書かれた旧図筒。

漑と宗一が並んで箱を片づける。

一人が前へ立ち、もう一人が後ろからついていくのではない。

****第二季完****

—

『薬箱の灯』 第三季 36 話脚本

＞ 季名：第三季「位置を書き直す」

＞ 時代：昭和十年（一九三五）春から冬

＞ 場所：越中地方の架空の町・汐見町 / 与善堂

＞ 形式：日常の人情と小さな笑いを軸にした短編連作

＞ 各話尺：約六十秒から二百四十秒

＞ 編劇方針：逐語訳ではなく、人物関係、場の動き、昭和初期の町場の言葉づかいに合わせて日本語版。帰ってきた人を旧位置へ戻すのではなく、今の店に置ける位置を一つずつ書き直す。

EP73「靴底の泥」

内景・与善堂前の間・春雨の朝

雨は上がったばかり。店戸はまだ半分しか開いていない。

漑は経営帳、北町巡路帳、今日の持込票を帳場へ広げている。

戸外で、行李が敷居に当たる音。

暖簾の向こうに男。

新田修司、二十二歳。肩に荷、左手に木箱、右手には新しい机の脚を一本。

修司：ただいま。

漑が顔を上げる。

最初に顔を見る。

次に靴底の泥を見る。

泥水がもう敷居に落ちている。

漑：動かないで。

修司が止まる。

漑は古布を引き抜き、足元へ投げる。

漑：帳がここ。靴底に泥。

修司：まだ外だよ。

漑：泥はもう入った。

修司：最初に見るのが泥？

漑：帳は顔を上げてくれないから。

宗一が奥から出てくる。薬匙を持ったまま。

修司を見る。

宗一：何日いる。

修司：帰ってきたばかりだよ。

宗一：だから今聞く。

修司：分からない。

宗一：なら、荷を全部入れるな。

修司は帳場脇を見る。

子どもの頃よく座った場所には、北町巡路紙が積まれている。

古い杯も薄荷飴の缶も見えない。

修司：僕の草履は。

漑が戸口の棚を開ける。

客用草履を一足、前へ押す。

漑：まずこれ。

修司：昔のは。

漑：五年履かない草履を、虫の新居にするの？

宗一：虫も古いのは嫌う。

修司は履き替える。

持ってきた机脚を戸口へ立てる。

漑が指す。

漑：それは何。

修司：新しい記録机の一部。

漑：誰が店に新机を入れるって言った。

修司：先に持ってきた。

漑：先に持ってきたことと、先に置くことは違う。

修司が漑を見る。

五年前なら、漑は戸外まで追って「なぜ黙って行った」と聞いたはずだ。

今は、泥、帳、机脚の置き場を決めている。

内景・与善堂奥の間・少し後

修司が行李を壁際へ仮置きする。

昔の寝場所には説明紙と空箱帯が積まれている。

修司：ここ、紙置き場じゃなかった。

漑：昔、北町は三十二軒もなかった。

修司：変わるとは思ってた。

漑：思うのと、見るのは違う。

宗一が臨時の布団を置く。

宗一：五年の話は後だ。午前に十軒来る。

修司：手伝える。

宗一：今の手伝い方を知っているか、先に見せろ。

結尾

修司は客用草履のまま前の間へ戻る。

漑は机脚を戸口から裏庭へ移す。人の通り道を塞がないため。

修司は止めない。

帰ってきた最初の日、彼は元の席へ戻ったのではない。

今日の与善堂に、まず立つことを許された。

EP74「何日いる」

内景・与善堂奥の間・午前

修司が行李を開ける。

衣類、薬学書、記録紙、玻璃瓶、木尺。

漑は戸口に立ち、臨時宿泊紙を持っている。

修司：僕まで記録するの。

漑：泊まる人には、寝る場所、飯の数、次に聞く日が要る。

修司：昔は聞かれなかった。

漑：昔の寝場所は紙が寝てる。

修司が記録紙を壁際に置く。

修司：紙の隣でいい。

漑：寝返りで北町を南町にする気？

修司：帰ってほしくない？

漑は見る。

漑：先に、何日いるかを言ってほしい。

修司：長く、と言ったら。

漑：長くは何日。

修司：これから。

漑：これからは日付じゃない。

修司はいら立つ。

修司：帰ってきたばかりで、飯もまだだ。

漑：だから、まず七日で足りるか聞く。

修司：もう決めてたんだ。

漑：宗一が。

ちょうど宗一が入る。

宗一：使える言葉を全部俺へ押すな。

布団を置く。

宗一：まず七日。七日目にまた聞く。

修司：七日目にまだいたら？

宗一：答えられる。

修司：いなかったら？

宗一：それも答えだ。

漑は宿泊紙に書く。

「新田修司」

「奥の間、臨時寝所」

「七日」

修司は「臨時」の字を見る。

修司：昔はこんな紙、なかった。

漉：昔は宗一の頭に入りすぎていた。

宗一：俺の頭は紙より湿気に強い。

漉：人に貸して読ませにくい。

内景・与善堂奥の間・夜

修司が布団を敷く。

漉が戸口を通る。

修司：七日目、君がまた聞く？

漉：紙が教える。

修司：君は。

漉は止まらない。

漉：私も紙を見る。

結尾

宿泊紙は奥の間の戸脇に掛かる。

「七日」ははっきり書かれている。

修司は破らない。

荷の半分だけを出し、半分はまだ行李の中。

EP75「古い杯は高い所」

内景・与善堂奥の間・早朝

修司が杯を探す。

共用棚にはない。

古い棚を開ける。

最上段に、昔の杯が伏せてある。

縁には子どもの頃ぶつけた欠け。

修司は背伸びするが届かない。

漑が茶瓶を持って入る。

修司：こんな高い所へ置いたの、君？

漑：私じゃない。

修司：誰。

宗一が後ろを通る。

宗一：埃だ。

修司：埃が杯を運ぶの。

宗一：毎日使うものを下へ置くためだ。

修司がまた伸びる。

漑は手伝わない。

善平が薬袋を持って来る。

二人が上を見ているのを見て。

善平：屋根でも漏ったか。

修司：杯。

善平は採寸用の木尺を抜き、軽く突く。

杯が滑り落ちる。

修司が慌てて受ける。

善平：手仕事は通じる。

漑：それ、前にも言った。

善平：いい言葉は仕立て直せる。

修司は杯を洗いに行く。

内側に薄い埃。

長く洗う。

内景・与善堂奥の間・少し後

修司は杯を昔の自分の鉤へ掛ける。

漑が外す。

修司：それ、僕の。

漑：その鉤は今、手拭い。

修司：場所を替えればいい。

漑は共用杯棚を指す。

漑：ここ。

修司：昔は、それぞれ自分のがあった。

漑：昔は人が少なかった。

修司：僕が帰らないと思ってた？

漑が見る。

漑：分からなかった。

修司：だから何も残さない？

漑：分からないものが、毎日使う場所をずっと占めるわけにはいかない。

修司：杯は。

漑：洗えば戻せる。

漑は杯を共用棚の端へ置く。

昔の専用鉤ではない。

高棚でもない。

結尾

修司が水を飲む。

隣の宗一の杯を間違えて取る。

宗一：それはお前のじゃない。

修司：共用じゃないの。

宗一：共用でも欠けを見ろ。

澤が笑う。

古い杯は戻った。

古い位置は戻らない。

EP76「最初の新紙」

内景・与善堂前の間・午前

新機が店へ入る前に、修司は金沢式の記録紙を旧帳机へ広げている。

欄は整っている。

使用者。

使用理由。

既往使用。

家族構成。

症状継続。

転介状況。

澤が見る。

澤：薬を補うの、戸籍を調べるの。

修司：抜けを減らせる。

宗一：机が全部ふさがって、まず薬量りが抜けた。

修司は紙を脇へ寄せる。

修司：全店で統一したい。

漉：まず北町十軒で試す。

修司：十軒では全体の問題が見えない。

漉：三十二軒が一度に来なくなれば、とてもよく見える。

修司：全部の欄をその場で聞くわけじゃない。

漉が筆を取る。

表題に足す。

「後補可」

いくつかの欄の横に小丸。

「答えなくても補箱に影響なし」

修司：記録が不完全になる。

漉：人が帰るほうが不完全。

修司：君は、先に怖がると決めつける。

漉：あなたは、先に相手が理由を分かると決めつける。

宗一が試用紙を十枚抜く。

宗一：言い合いは済んだか。

修司：まだ。

宗一：では先に試せ。

漉は十枚に小印を押す。

「試用」

修司が一枚を取る。

修司：なぜ「新規」じゃない。

漉：ここに合うと、まだ証明してない。

修司：金沢では使っていた。

漉：ここは金沢じゃない。

修司：人の飲む薬は同じだ。

漑：人の話し方は違う。

結尾

最初の新紙が巡路板の下に貼られる。

「試用」の二字は表題より目立つ。

修司はしばらく見る。

破らない。

EP77「今すぐ答えなくていい」

内景・与善堂前の間・持込日

一人の婦人が薬箱を抱え、小腰掛けに座っている。

修司は試用紙を持つ。

修司：実際にお使いになった方は。

婦人：家の者です。

修司：どなたですか。

婦人：家の者です。

修司：年齢は。

婦人は答えない。

修司は低い声で続ける。

修司：持病はありますか。過去三月に同類薬を――

婦人が立つ。

婦人：もう結構です。

漑は別の箱を検めている。

椅子の音を聞き、すぐ来る。

漑：止めて。

修司：まだ終わってない。

漑：この人はもう出ようとしてる。

修司が婦人を見る。

婦人は箱帯を握りしめている。

漑は理由を代わりに言わない。

漑：補箱に必要なのは、今どれ。

修司は一拍置く。

修司：何包使ったか。混用があるか。不調反応があるか。

漑：その三つだけ、今聞いて。

修司は自分の紙を見る。

資格で押し返さない。

紙を裏返す。

修司：さきほどの欄は、今すぐ答えなくて構いません。

婦人は座らない。

修司：よろしければ、使った包数と、ほかの物と一緒に飲んだかだけ教えてください。ほかは書かなくてもよいです。

婦人が漑を見る。

漑が小さくうなずく。

婦人は小腰掛けに戻る。

内景・与善堂前の間・少し後

婦人が帰る。

修司は試用紙を持ち直す。

漉：聞けるじゃない。

修司：君の止め方は早い。

漉：遅ければ戸を出てた。

修司：先に僕へ言えた。

漉：あの人に、あなたの面子を待つ時間はなかった。

修司は黙る。

「家族構成」を後補区へ移す。

漉：誰も答えないわけじゃない。

修司：分かってる。

漉：昔なら「分かってるなら書け」と言った。

修司：帰ってきたのは、君の間違いを証明するためじゃない。

漉が見る。

それは謝罪よりまっすぐだ。

結尾

婦人の座った小腰掛けはそのまま。

修司は試用紙の最上部に書く。

「まず補箱に必要な事項を確認」

記録を消すのではない。

順番を変える。

EP78「同じ側に立つ」

内景・与善堂前の間・午後

戸口で町人二人が小声。

町人甲：外で学んだ人が、初日から漉の言うことを聞くとはね。

町人乙：青木の店だもの、青木に聞くさ。

修司は記録紙を干していて、それを聞く。

修司：誰に聞くかじゃありません。

二人が気まずくなる。

修司：さっきは、彼女のほうが、この人がいつ席を立つか分かっていた。

町人甲：金沢で長く学んだのに。

修司：だから、方法を直す時も分かります。

澤が奥から出る。

澤：私をかばわなくていい。

修司：自分のことを言った。

澤：私が勝ったみたいに聞こえる。

修司：君は勝ってない。

澤：なら、あなたが負け？

修司：あの婦人が座り直した。

澤：だから？

修司：だから紙を続けられる。

澤は残りの試用紙を抱える。

十枚だけの予定だった。

五枚を数え、修司の手元へ置く。

修司：五軒増やす？

澤：試すと言う人だけ。

修司：まだ不十分だ。

澤：十軒よりは多い。

修司：譲歩？

漑：考えすぎ。

内景・与善堂前の間・少し後

二人は並んで紙を分ける。

昔はいつも帳場を挟んだ。

今回は同じ側。

修司は「今聞く」「後補可」に分ける。

漑は「公開頁」「内頁」に分ける。

同じ紙に何度か手が触れる。

子どもの頃のように奪い合わない。

宗一が薬棚の奥から見る。

宗一：紙は自分で分かれん。

漑：分けてます。

宗一：口のほうだ。

結尾

十五枚の試用紙が同じ板挟みに入る。

左は修司の分類。

右は漑の秘密度。

最初の共同作業の紙には、誰が誰に従ったとは書かれていない。

EP79「記録は詰問ではない」

内景・与善堂前の間・午前

高木巡査が新しい行政登録表を持ってくる。

修司の試用表より長い。

高木：町では、公衆衛生に関わる記録をできるだけ整えることになりました。

修司が受け取る。

漑が横から見る。

漑：この「家庭出入り人員」って何。

高木：同居、借宿、出入りのある人です。

絹江が洗い済み葉袋を持ってくる。

絹江：湯屋でそれを聞いたら、客は洗い終わっても一晩泊まって書くことになるね。

高木：行政形式です。その場で全部書けという意味ではありません。

修司：試用表に写せます。

漑：だめ。

修司：まだ写してない。

漑：もう尺を持ってる。

修司は本当に木尺を持っている。

修司：欄をそろえる必要が。

漑：人が先に逃げる。

高木は行政表をかばわない。

高木：必要なのは、必要時に連絡し、分けることです。家の内を全部表へ出すことではありません。

修司は表を見る。

三つに分ける。

「即時確認」

「後補可」

「特定時のみ確認」

漑：三つ目は誰が使うの。

修司：薬師、医師、または行政通知に明確な理由がある時。

高木：なぜ聞くかも説明する。

絹江：やっと人の言葉になった。

内景・与善堂前の間・少し後

客が補箱に来る。

修司は長表を出さない。

先に聞く。

修司：今日は常備薬の補充ですか。家で具合の悪い方がいますか。

客：常備の補充です。

修司は長表を脇へ置き、普通補箱紙だけを使う。

客が長表を見る。

客：書かなくていいんですか。

修司：今日は要りません。

客は明らかにほっとする。

結尾

修司は行政表の一番上に書く。

「まず相手の話を聞く。」

高木：その文は形式がありません。

修司：だから一番上へ。

漑は表を内部へ掛ける。戸口には掛けない。

EP80「大字でも分からない」

内景・与善堂前の間・午後

修司が新しい説明紙を見せる。

字は以前の倍の大きさ。

石田老人が目を細める。

石田：字は大きい。

修司：読めますか。

石田：一字ずつなら。

修司：では第一項の通りに。

石田：第一項は、何をしろと。

修司が固まる。

説明にはこうある。

「予期せぬ反応が出た場合、使用を停止し、有資格の医師または薬剤師に速やかに相談すること。」

石田：字は知ってる。つながると知らん。

澤が修司を見る。

修司：かなり簡単にしました。

辰夫が戸口から顔を出す。

辰夫：俺に見せて。

一度読む。

辰夫：具合が変なら、まず止める。薬師に聞く。ひどけりゃ医者。

石田：それなら分かる。

修司：完全に同じではない。

辰夫：どこが違う。

修司：「予期せぬ反応」を「具合が変」と言った。

石田：わしに分かるのは、具合が良いか悪いかだ。

薬棚の奥から宗一。

宗一：正式文は残せ。横に普段の言い方を足す。

修司：不正確に見えませんか。

澤：正確すぎて誰も守れなければ、正確ではない。

内景・与善堂前の間・少し後

善平が二種類の字で札を書く。

上は正式文。

下は三行。

「具合が変なら、まず止める。」

「薬師に聞く。」

「ひどい時は医者へ。」

石田老人がうなずく。

石田：三つで足りる。

辰夫：俺が言った。

善平：俺が書いた。

修司：僕が確かめた。

澤：だから誰も署名しない。

結尾

正式文は残る。

三つの日常語は、指で示せる高さに掛かる。

修司は大字版を捨てない。

裏に書く。

「字が大きいことと、言葉に近いことは別。」

EP81「玻璃瓶の布套」

内景・与善堂前の間・午前

修司が玻璃瓶を一行に置く。

透明で、整っていて、札も読みやすい。

花婆が伸ばす。

瓶がつるりと滑る。

慌てて手を引く。

花婆：これは、触っただけで弁償になりそうだ。

源造が寄る。

源造：魚の目を入れる瓶みたいだ。

修司：薬用玻璃瓶です。

源造：魚の目も入る。

澤：あなたの魚は外。

善平が古布を取る。

善平：套を作る。

修司：布で札が隠れる。

善平：窓を開ける。

修司：布は湿る。

善平：洗える布。

修司：緩いと落ちる。

善平：寸法を取る。

二人が畳みかける。先に言い終わる勝負のよう。

澤は瓶をいろいろな人の手へ渡して試す。

花婆は滑る。

宗一は使える。

関節の固い老人は、栓も開けにくい。

修司は一つずつ記録する。

全部の瓶に套は要らない。

老人がよく持ち、滑りやすい型だけにする。

内景・善平仕立屋・少し後

布套には透明な小窓。

札は全部見える。

底には滑り止めの縫い目。

修司が套をかけ、回す。

修司：洗える？

善平：洗える。

修司：縮む？

善平：先に洗った。

修司：色が古い。

善平：新布も銭を食う。

源造が戸口から見る。

源造：魚の目に着物を着せたみたいだ。

皆が見る。

源造：褒め方、足りなかったか。

結尾

玻璃は見える。

手でも持てる。

修司は記録に書く。

「布套要：三本」

「全数統一」とは書かない。

EP82「帰らないと思ったのか」

内景・与善堂奥の間・夕方

修司が古い杯で水を飲む。

杯は共用棚の端にある。

横には宗一、漑、客用の杯。

修司は高棚を見る。

修司：本当に、僕が帰るか分からなかった？

漑は巡路紙を折っている。

漑：分からなかった。

修司：聞けばよかった。

漑：行く時、聞く間をくれなかった。

修司は黙る。

漑は紙を折り続ける。

修司：手紙は出した。

漑：天気、寄宿舍、まずい飯。

修司：君もあまり返さなかった。

漑：書いた。

修司が見る。

修司：出した？

漉：出してない。

修司：じゃあ、どうやって分かる。

漉：あなたが出る前に、どう分かればいいのか教えてくれなかった。

二人が止まる。

修司は杯を置く。

修司：見送らせないほうが、楽だと思った。

漉：誰が。

修司はすぐ答えない。

修司：僕が。

漉が見る。

修司：いつ帰るのか聞かれるのが怖かった。

漉：分からなかったから。

修司：うん。

漉：だから私の質問まで決めた。

修司：そうだ。

言い訳はしない。

内景・与善堂奥の間・続き

修司は共用棚を見る。

修司：昔の位置をずっと残さなかったのは、正しい。

漉：正しいかどうかは聞いてない。

修司：分かってる。

漉：分からないなら、先に空けておく。

修司が低く繰り返す。

修司：分からないなら、先に空けておく。

その言葉が、自分にも向けられていたと、初めて聞く。

結尾

修司は古杯を専用鉤へ戻さない。

飲み終え、自分で洗う。

共用棚へ置く。

EP83「帰る前に先に聞く」

内景・与善堂奥の間・夜

薄荷飴の缶が机にある。

漑は中から、出さなかった古い手紙を数通取り出す。

修司は戸口に立つ。近寄らない。

修司：全部、僕へ？

漑：違う。

修司は封筒の金沢住所を見る。

修司：じゃあ誰へ。

漑：郵便局。

修司は笑わない。

漑は一番上の手紙を伏せる。

修司：読んでもいい？

漑：だめ。

修司：なら、どうして出した。

漑：書いたことだけは知っていてほしい。

修司：何を書いた。

漉：追い出されたみたいに行っちゃって。

修司：ほかは。

漉：北町は崩れてないって。

修司：ほかは。

漉：あなたのことは、ない。

修司はうなずく。

求め続けない。

修司：帰る前、一番怖かったのは、君がもういないことだった。

漉が目を上げる。

修司：金沢で何度も考えた。君が別の所へ行っていたら。店を離れていたら。もし――

漉：帰る前に、先に聞くべきだった。

修司が止まる。

漉：帰ってから戸口で、まだいるかを確認するんじゃなくて。

修司：手紙では聞いた。

漉：「北町は今、君が歩いているのか」。

修司：それも聞いた。

漉：聞いたのは道。

修司：君を先に聞くのが怖かった。

漉：なぜ。

修司：「いない」と返ってくるのが。

漉：聞かなければ、私がずっといたことになる？

修司は下を向く。

修司：そうだ。

漉は手紙を缶へ戻す。

渡さない。

修司：今、聞ける？

漑：何を。

修司：僕を待ったことがある？

漑は薄荷飴の缶を見る。

長い間。

漑：ある。

修司が顔を上げる。

漑：でも、ずっとじゃない。

修司の目に失望が少し、ほどけるものも少し。

修司：足りる。

漑：何が。

修司：覚えていたのが、僕だけじゃなかったと分かること。

結尾

修司は古い手紙を一通も持っていない。

漑も燃やさない。

薄荷飴の缶が閉まる。

今回は、二人とも中身を知っている。

EP84「もういないことが怖かった」

内景・与善堂裏庭・午後

漑と修司が湿った空箱を干している。

一つずつ向きを変える。

修司：この数年、離れようと思った？

漑：思った。

修司の動きが少し遅くなる。

修司：どこへ。

漑：県城、薬材商、駅前薬房。どこでも考えた。

修司：どうして行かなかった。

漑：あなたのためじゃない。

修司：そうかどうかは聞いてない。

漑：顔が聞いた。

修司は下を向き、箱を返す。

修司：僕も、薬舗だけのために帰ったんじゃない。

漑は一息待つ。

修司は続けない。

漑も追わない。

空箱を一つ渡す。

漑：じゃあ、まずこれを置いて。

修司が受け取り、架へ置く。

少し傾く。

漑が手を出しかける。

修司が先に直す。

修司：これで？

漑：いい。

結尾

最後の空箱の間に、少し隙間がある。

二人は架の両端に立つ。

この回で確かめるのは二つだけ。

漑は離れることを考えた。

修司は仕事だけのために帰ったわけではない。

続きは、まだ置いておく。

EP85「新機が古い抽斗をふさぐ」

内景・与善堂前の間・午前

新しい机が運び込まれる。

広い天板、多い抽斗、まっすぐな角。

修司が位置を指示する。

修司：古い診察機のそばに。記録と薬事を分けられる。

善平と源造が置く。

どん。

古い診察機の最下段の抽斗が、ちょうどふさがる。

宗一が引く。

二指分しか開かない。

宗一：よく分かれたな。

修司：向きを変えられます。

皆で回す。

今度は机角が裏庭への細い通路を塞ぐ。

絹江が洗い薬袋を抱えて入り、戸口で詰まる。

絹江：新機かい。それとも新しい門かい。

修司：薬局の記録机標準寸法です。

宗一：標準は人が通らないらしい。

修司：店内は組み替えられます。

漑は戸口に立ち、帳場、古机、新机、裏庭の通路を見る。

粉筆で床に一本線を引く。

戸口から裏庭まで。

薬箱を抱えた人がぎりぎり通れる幅。

漑：ここは塞がない。

修司：天板を縮めると記録分類が詰まる。

漑：天板が整っていても、人が通れなければ誰が書くの。

修司：帳場の後ろを回れば。

漑：箱を抱えた人も？

修司は線を見る。

すぐには譲らない。

内景・与善堂前の間・少し後

老人が空箱を抱えて入る。

新机はまだ仮置き。

老人が脇を通ろうとする。

箱角が机脚と帳場の間に挟まる。

進めず、戻れず。

源造が抱き上げようとする。

宗一：人を持ち上げるな。

修司が先に新机を後ろへ引く。

老人が通る。

老人：いい机だ。

修司：道を塞ぎました。

老人：いい机でも、塞ぐ時は塞ぐ。

老人は箱を抱えて座る。

修司は粉筆線を見る。

結尾

新机は再び戸口へ戻され、改修待ち。

粉筆の通路だけが床に残る。

修司は設計紙の一番上に書く。

「まず人が通れること。」

「標準寸法」は消さない。

EP86「机脚が高すぎる」

内景・与善堂裏庭・午前

新机は裏庭へ運ばれている。

修司が座って試し書き。

肘が高く上がる。

善平が机脚の脇にしゃがむ。

善平：長い。

修司：標準高さです。

善平：ズボンも標準で裁る。人が来たら量る。

修司：机脚はズボンじゃない。

善平：長けりゃ切れる。

源造が板を四枚持ってくる。

源造：切るな。人の椅子を全部高くすればいい。

宗一：屋根も上げるか。

源造：屋根は担当外だ。

花婆が先に座る。

足が浮く。

紙に署名しようとする、机縁が手首をふさぐ。

花婆：字を書く前に、人が吊られる。

修司はすぐ書く。

「高齢者、座位高すぎ」

次に宗一が座る。

ぎりぎり使える。

だが抽斗を開けると膝へ当たる。

宗一は何も言わない。

抽斗を閉めるだけ。

修司：当たりましたか。

宗一：机のほうに先に聞いた。

漑が向かいに座る。

天板で下半分の顔が隠れる。

漑：客は私の目だけ見ることになる。

源造：威厳がある。

漑：半分借金してる顔にも見える。

花婆は短時間の客。

宗一は長時間使う者。

漑は、机を挟んでも互いの顔が見えるかを確かめる。

内景・与善堂裏庭・少し後

善平が粉筆で印をつける。

善平：一寸低く。

修司：抽斗の向きも変える。

漑：通路は動かさない。

修司が設計紙へ三項目を書く。

「一寸低く」

「抽斗向き変更」

「通路確保」

善平が鋸をしまう。

善平：明日、ズボンを切る。

修司：机脚です。

善平：明日また分ける。

結尾

皆が去ったあと、修司は一人、高い机の前に座る。

足は地についている。

肘はまだ浮く。

自分で「一寸低く」の後ろに丸をつける。

EP87「先に人を通す」

内景・与善堂前の間・午後

新机が改図通り、もう一度店へ入る。

高さはまだ処理前。向きだけ試す。

修司は壁へ寄せたい。

漑は粉筆通路を残したい。

二人で机の両側を押す。

机は半尺、行ったり来たり。

修司：これ以上後ろだと右の光が足りない。

漑：前へ出ると、箱を抱えた人が回れない。

修司：記録の誤りは葉に響く。

漑：人が転んでも響く。

修司：君はいつも最悪を使って新しいものを止める。

漑：あなたはいつも一番整った場合で、人が動かないことにする。

言葉が重くなる。

二人が止まる。

老人が葉箱を抱えて入る。

老人：出直そうか。

漑：いいえ。

漑が道を空ける。

老人が粉筆線に沿って歩く。

新机の脇で、袖口が抽斗の取っ手に引っかかる。

箱が落ちかける。

修司が先に箱を受ける。

漑が老人を支える。

誰も言い合わない。

修司は突き出た取っ手を外す。

修司：ここも直す。

老人：私の袖が古いだけだ。

修司：机が新しくても、古い袖を通すべきです。

老人が座る。

漑は修司を見る。

修司は「君が正しい」とは言わない。

机を粉筆線の外へ下げる。

内景・与善堂前の間・少し後

修司が光を測り直す。

確かに少し暗い。

漑は仕事灯を半尺動かす。

灯油は増やさず、角度を変える。

修司：夜は記録に影が落ちる。

漑：一晩試す。

修司：君は今、「試す」が好きだね。

漑：あなたに教わった。

修司：僕が教えたのは記録。

漑：記録してから直す。

結尾

新机は初めて店内に泊まる。

粉筆通路は完全に残る。

設計紙に一行増える。

「通路優先、照明別調整。」

EP88「一寸鋸を入れる」

内景・与善堂裏庭・午前

善平が鋸を構える。

新机は逆さ。

修司は机脚の横で、また量っている。

善平：昨夜三度量った。

修司：切った木は勝手に伸びません。

善平：ズボンも伸びん。

漑は縁側で薬袋紐を選っている。

漑：持ってきたこと、後悔してる？

修司：机を？

漑：いろいろ。

修司の手が止まる。

善平が鋸を引く。

音が鳴る。

修司は思わず見つめる。

漑：切られてるのが自分みたい。

修司：二月かけて描いた。

漑：図は変わる。

修司：分かってる。

漑：分かっているけど、惜しい？

修司：分かることと、惜しくないことは別だ。

一寸が落ちる。

善平が木片を持ち上げる。

善平：一寸。

修司が受け取る。

切口は新しい。

修司：残り三本も同じに。

善平：ようやく。

内景・与善堂前の間・少し後

机が立つ。

高さは合う。

抽斗はまだ少し渋い。

修司が座って書く。

肩が自然に落ちる。

漑は向かいに立つ。

今度は机面が顔を隠さない。

漑：まだ後悔してる？

修司：机は直せる。

漑：人は。

修司が見る。

修司：人も。

漑：何に直すの。

修司：一度に全部聞かないで。

漑が少し笑う。

結尾

切り落とした四つの木片は捨てない。

宗一が一番平らなものを取り、古木片の箱へ入れる。

修司は見る。

新機に古材を使うなどと言わない。

EP89「古い木の下駄」

内景・与善堂前の間・早朝

新機がかすかに揺れる。

修司が書くと墨線が震える。

位置を変える。

まだ揺れる。

漑が机角を押さえる。

漑：床が平らじゃない。

修司：脚は量った。

宗一が古櫃の後ろへ行く。

磨かれた濃い木片を出す。

しゃがみ、新機の脚の下へ差し込む。

机が安定する。

修司が木片を見る。

修司：厚みが合ってる。

宗一：源齋先生の診察机も、昔は揺れた。

修司：脚を作り直せます。

宗一：本当に換える時まで、まず使う。

修司：新機の下に古木を挟むと、見た目が。

宗一：机は見ない。

澤：人は見る。

宗一：安定したのを見ればいい。

修司はしゃがんで確かめる。

古木片は少し見えている。

上に薄い墨跡。

源斎の旧机のものよう。

修司：湿気は。

宗一：毎日見る。

修司：緩んだら。

澤：また挟む。

修司：臨時の手当てを信じてるんだね。

宗一：五年使える臨時は、一日で壊れる永久より頼れる。

内景・与善堂前の間・少し後

修司が新机を使い始める。

澤が通る。

巡路帳は旧机。

薬品記録は新机。

二つの机の間には通路。

結尾

修司は新机保守紙に書く。

「旧木下駄、仮用」

考えて、「仮」を消す。

「毎日確認」

古木は美談ではない。

今日、本当に役に立つ。

EP90「五息、仕事を話さない」

内景・与善堂裏庭・夜

新机を直した日の最初の夕飯。

漑と修司が縁側に並ぶ。

一人一つの握り飯。

前の間では宗一がまだ帳を締めている。

二人が食べる。

誰も話さない。

一息。

二息。

三息。

修司が干し箱を見る。

漑がすぐ見る。

修司は「乾いた」と言いかけて飲み込む。

四息。

五息。

同時に口を開く。

漑：あなた――

修司：金沢――

止まる。

修司：君から。

漉：春子さんの握り飯か聞こうとしただけ。

修司：そう。

漉：これは仕事？

修司：食事。

漉：じゃあ、あなた。

修司は夜を見る。

修司：金沢の雪、見たい？

漉：どうして。

修司：五息、店の話をしなかったから。ほかに何を話せるかと思って。

漉は握り飯をかじる。

漉：金沢の雪はどんな。

修司：軒が高い。雪が壁みたいに落ちる。朝は誰かが先に一筋踏んで、後の人はそこに行く。

漉：あなたも人の道に行くの。

修司：最初は。あとで薬局への小路は、毎朝自分で踏んだ。

漉：なぜ大通りじゃない。

修司：遠回りだから。

漉：あなたも表通り通りじゃないのね。

修司：そこには表がなかった。

漉：惜しい。

二人が少し笑う。

笑いが落ちてから、漉が聞く。

漉：これから行くの。

修司は、雪の話ではないと分かる。

修司：行くかもしれない。

漑は見ない。

漑：どれくらい。

修司：今は分からない。

漑：昔と同じ。

修司：違う。

漑が見る。

修司：昔は、分からないから言わなかった。これから外地の仕事があれば、分かっている日、期間、手元の仕事を誰へ渡すかを先に言う。

漑：帰る日が変わったら。

修司：帰る日が変わったと書く。

漑：帰る日も分からなかったら。

修司：分からないと書く。消えない。

漑は下を向く。

修司：二度と行かないとは約束できない。

漑：それは求めてない。

修司：でも、知るかどうかを僕が決めないことは約束できる。

長い沈黙。

漑：ただの「分からない」よりは多い。

修司：足りる？

漑：先に食べる。

二人は続けて食べる。

約束を恋の告白にはしない。

けれど、修司は初めて明確に答える。

また離れるかもしれない。

黙ってはいなくなる。

結尾

前の間から宗一。

宗一：五息は過ぎたか。

漑：何を数えてるの。

宗一：静かすぎて、薬棚が倒れたかと思った。

修司：もう過ぎました。

宗一：なら飯を食ったら机を片づけろ。

漑：また仕事。

修司：今のは宗一が先。

二人が同時に笑う。

画面は並んだ握り飯の包み紙へ。

薬紙でも巡路紙でもない。

EP91「荷は裏庭へ」

外景・与善堂前・午前

荷車が止まる。

青木志乃が車の後ろから降りる。

肩には雨の跡。手には荷札。

門札を先に見ない。

まず最後の薬材包みが潰れていないか振り返る。

漑は戸内に立つ。

二人が目を合わせる。

志乃：帰った。

漑：荷は裏庭へ。

一息。

志乃がうなづく。

志乃：黄柏は地につけないで。

漑：板は敷いてある。

宗一が棚の後ろから出る。

宗一：今回は何日。

志乃：まず荷を。

宗一：五年使った返事です。

修司が新机脇から立つ。

修司：志乃さん。

志乃が見る。

志乃：背が伸びた。

修司：机も伸びました。

漑：もう切った。

志乃は新机、北町巡路札を見る。

手紙で知るより、ずっと具体的に変わっている。

内景・与善堂裏庭・少し後

皆で荷を下ろす。

志乃は山道の湿りやすい包みを指す。

漑は箱区分と検品順を手早く決める。

二人が同時に言う。

志乃：先に開けー

漑：外縄から。

止まる。

志乃：あなたが言って。

漑：外縄に二重結びがある。途中で開けたか先に見る。

志乃が見る。

確かにそうだ。

引き取って指揮し直さない。

志乃：その通りに。

内景・与善堂奥の間・夕方

漑が臨時布団を敷く。

修司の時と同じ。

志乃が見る。

志乃：私の部屋は。

漑：今は薬袋間。

志乃：中に私の物がある。

漑：ある。今は動かさない。

志乃が見る。

漑：今日は人が多い。動かすと薬袋を置く所がなくなる。

志乃：今日動かしたいとは言っていない。

漑：なら、あとで決める。

結尾

志乃は旧部屋の戸口へ行く。

札には「薬袋間」。

手を伸ばす。

中では誰かが袋を数えている。

志乃は手を引く。

臨時布団は敷かれている。

人は帰った。

旧部屋は待っていなかった。

EP92「旧部屋はもうない」

内景・与善堂薬袋間・午前

薬袋棚が旧部屋を埋めている。

隅に志乃の古い箆笥。

扉は薬袋紐でふさがっている。

志乃が紐を解く。

漑が入る。

漑：今日はその袋を使う。

志乃：衣だけ取る。

漑：先にこの棚を寄せる。

志乃：ここは私の部屋だった。

漑：今は仕事間でもある。

志乃が見る。

漑は謝らない。

二人で棚を移す。

古筆筒が開く。

衣、数冊の巡路帳、折った藍布。

志乃が手を伸ばす。

漑も伸ばす。

二人の手が同時に藍布へ触れる。

止まる。

志乃：まだ傷んでない。

漑：人は伸びた。

志乃が漑の袖口を見る。

昔測った長さはもう合わない。

志乃：冬着にするつもりだった。

漑：知ってる。

志乃：なぜ。

漑：寸法紙が落ちたことがある。

志乃：仕上げなかった。

漑：それも知ってる。

二人は「すまない」とは言わない。

志乃が藍布を出す。

漑：まだ切らないで。

志乃：切るとは言っていない。

漑：あなたが布を持つと、いつも何か始める顔になる。

志乃：布も働かせないと虫が来る。

漑：人は？

志乃が止まる。

内景・与善堂奥の間・夜

志乃が臨時布団のそばに座る。

古い衣は小箱へ。

志乃：これから、どこで寝る。

漑は戸口。

漑：まず奥の間。

志乃：これからは。

漑：これから決める。

志乃：帰ってきた人、皆にそう言うの。

漑：何日いるか分からない人には。

志乃が見る。

志乃：今回は三晩じゃない。

漑：なら何日。

志乃は正確な日数を言えない。

漑は迫らない。

結尾

藍布は古衣箱の一番上へ置かれる。

薬袋棚はまだ空かない。

旧部屋は戻らない。

志乃は初めて与善堂で常住に近く寝るが、自分の長い位置はまだ分からない。

EP93「布告が長すぎる」

内景・与善堂前の間・午前

高木巡査が衛生布告を貼る。

紙が長い。

題だけで半分ある。

辰夫が戸口で読む。

辰夫：近時、疑似……疑似……。

源造：魚は咳をしない。

高木：魚とは書いていません。

源造：なら帰っていいな。

絹江が押し戻す。

辰夫が続ける。

辰夫：不要不急の聚集を避け――

戸外の見物人が増える。

春子：不要って、どれ。

源造：ここで布告を聞くのは必要だ。

高木は人だかりを見る。

高木：まず離れてください。

皆、離れない。

どう離ればいいのか知りたい。

修司が布告を取り、逐句説明しようとする。

一文目が終わる前に、辰夫は冒頭を忘れる。

湊は帳場から木札を三枚取る。

書く。

「まず離れる」

「まず手を洗う」

「具合が悪い時は先に言い、行先を聞く」

修司：布告はそれだけじゃない。

漑：今日できるのは、まずこれ。

高木：正式文は残してください。

漑：高く掛けます。毎日の動きは下へ。

絹江：湯屋は「咳なら大池へ入らない」を足す。

源造：魚屋は。

宗一：魚は咳をしない。

源造は満足する。

外景・与善堂前・少し後

正式布告は高い所。

三つの木札は手で指せる所。

通行人は長文を読み切れない。

でも三つに従って離れる。

結尾

辰夫が題を読み直す。

途中で子どもが札を指す。

子ども：まず離れる。

人が本当に離れる。

辰夫は長布告を下ろす。

辰夫：字は多いのに、足が短い。

EP94「先に本人の話を聞く」

内景・与善堂前の間・午後

中年の男が口を押さえて咳をしながら入る。

戸口の町人がすぐ下がる。

小声。

町人：外から来た病じゃないか。

男の顔が白くなる。

修司が臨時記録紙を取る。

修司：まず脇に座ってください。発熱は。どこから。接触は――

漑が紙の端を押さえる。

漑：先に本人の話を。

修司が止まる。

漑は男を見る。

漑：今日は、どうして与善堂へ。

男：港から戻って、二日咳が出る。家の者が中へ入れてくれない。どこへ行けばいいか聞きたくて。

漑：医者には。

男：まだ。

漑：息ができない、立ってられないことは。

男は首を振る。

修司がそこで続ける。

修司：ここでは診断できません。ほかの方と場所を分け、触れた所を拭き、高木巡査から医者または指定先へ連絡します。

男：連れて行かれるのか。

高木が戸外から入る。

高木：まず連絡です。捕まえるものではありません。

町人はまだ避けている。

漑：戸口を空けるのを手伝える人は。

絹江が薬袋籠を動かす。

源造が魚籠を遠ざける。

英雄はいない。

ただ空間を作る。

内景・与善堂前の間・少し後

修司が記録する。

「来意：転介先を求む」

「本人陳述：咳二日、港より帰」

止まる。

最上部に書く。

「まず本人の話を聞く。」

漑が見る。

修司：今回は君に見せるためじゃない。

漑：分かってる。

修司：どうして。

漑：字が大きくないから。

結尾

男は明確な行先を示されて出る。

与善堂は病名をつけない。

彼を町の噂にも変えない。

記録紙は内部挟みへ。

EP95「三つで足りる」

外景・与善堂前・午前

戸口に三枚の木札。

「まず離れる」

「用がある時だけ聞く」

「重ければ医者」

辰夫が読む。

振り向いて街口へ叫ぶ。

辰夫：手を洗った人は皆、与善堂へ聞きに来て！

漑が戸内から顔を出す。

漑：どの札に「皆来い」と書いてある。

辰夫：昨日は手洗いがあった。

高木：昨日から変えた。

辰夫が札を見る。

辰夫：木札、新聞より早く変わる。

人がもう門前へ集まり始める。

布告を聞きたいだけの人。

清潔用品を取りたい人。

本当に具合の悪い人。

内外景・与善堂前・続き

漑は戸口で来意を聞く。

黒沢は規格の決まった清潔用品を道向かいに置く。店戸を塞がない。

絹江は洗布と湯屋の説明を自分の戸口へ戻す。

高木は行政の相談を受ける。

修司は記録と転介が要る人だけを受ける。

宗一は帳場内。

誰かが普通の相談を「与善堂が無事と判断した」と言い換える。

宗一が顔を上げる。

宗一：判断していません。

修司はすぐ転介紙を直す。

「行先を説明済」

「無事確認済」とは書かない。

人は四つの実際の行先へ分かれていく。

鏡の前で講義を聞く四組ではない。

一人ずつ戸口から離れる。

内景・与善堂前の間・午後

人が散る。

修司が座る。

修司：今日は何人救った？

宗一：一人も救っていない。

修司が見る。

宗一：乱れなかつただけだ。

言って、紙を片づける。

笑いを待たない。

澤は三枚の札を並べ直す。

辰夫が横で読む。

辰夫：まず離れる。用がある時だけ聞く。重ければ医者。

漑：今回は一つにまとめないで。

辰夫：まとめても短くならない。

結尾

戸口はまた空く。

三枚の木札は、それぞれ一つの仕事だけをしている。

第四の説明札はない。

EP96「残ってほしい？」

内景・与善堂前の間・夕方

公共の騒ぎが少し落ち着いた。

志乃に三郎から山道の口上が届く。

上嶺村で三日の臨時補充と巡路確認。

志乃は反射的に奥へ荷支度に行く。

途中で止まる。

北町巡路札の脇に臨時人手板。

明日：

宗一、在店。

修司、試用記録。

漑、持込日。

絹江、洗袋。

志乃は長く見る。

帳場へ戻る。

志乃：この三日、私は残ったほうがいい？

漉が顔を上げる。

ずっと待っていた言葉だ。

本当に聞くと、気持ちだけでは答えられない。

北町巡路帳を開く。

明日の持込数を見る。

修司の試用予定を見る。

漉：明日は人が足りない。

志乃：明後日は。

漉：明後日は宗一が一刻離れられる。修司は薬師範囲だけ。辰夫は知らせに回れる。

修司：持込も手伝える。

漉：あなたは記録。家庭巡路の照合は代わらない。

修司はうなづく。

志乃：では。

漉：明日は残って。明後日は行ける。

志乃は傷つかない。

「要らない」とも聞かない。

出発日を明日から明後日へ直す。

内景・与善堂奥の間・夜

志乃が荷をまとめる。

漉は戸口。

志乃：昔なら「行かないで」と言った。

漉：言っても行った。

志乃：今回は先に聞いた。

漑：だから店に必要な分で答えた。

志乃：あなた自身は。

漑が止まる。

漑：毎行行ってほしいわけじゃない。

志乃が見る。

漑：でも、人手不足を口実に残したくもない。

志乃は礼を言わない。

包みに入れた衣を一枚出す。

明後日また入れる。

結尾

臨時人手板の空白に、漑が足す。

「誰がいて、誰が行き、誰が継ぐか。長期交接表が必要。」

志乃は出発日を書き直す。

この出発は、用事が終わってからの通知ではない。

EP97「忠雄が帰る」

外景・与善堂前・雨の午後

雨は強くない。

駅への出迎えも、町人の輪もない。

一人の男が古い革鞆を提げ、暖簾の外に立つ。

青木忠雄、四十五歳。

右手には薄い保護手袋。

店名を見上げる。

名を呼ばない。

先に靴底の泥を戸口で落とす。

中では漣が持込箱を検めている。

顔を上げる。

二人が見る。

忠雄は漣だと分かる。

それでもすぐ名を呼べない。

忠雄：漣……か。

漣：はい。

忠雄：大きくなった。

漣：十四年あれば。

志乃が奥から出る。

忠雄を見る。

ただ呼ぶ。

志乃：忠雄。

忠雄：志乃。

抱擁はない。

昔の呼び名もない。

漣は靴棚から草履を出し、戸口へ置く。

忠雄が見る。

忠雄：私の草履は。

漣：ありません。

忠雄はうなづく。

客用草履を履く。

内景・与善堂前の間・続き

忠雄は記憶の抽斗脇へ革靴を置く。

手を伸ばして抽斗を開ける。

中は修司の新記録紙。

手が止まる。

修司が新機から立つ。

修司：忠雄叔父さん。

忠雄が見る。

忠雄：修司か。

修司：はい。

忠雄：君も大きくなった。

宗一が薬棚の後ろから来る。

宗一：その台詞は今日、何度も使えます。

忠雄が宗一を見る。

忠雄：久世先生。

宗一：宗一で結構です。

忠雄は薬台の箱を見る。

本能で手伝おうとする。

宗一が箱端を先に押さえる。

宗一：装薬箱は店の者が扱います。薬台には触れないでください。

忠雄はすぐ手を引く。

忠雄：分かりました。資格がない。

宗一：巡路、名冊、運送は、後で分けます。

忠雄：昔、与善堂の巡路は私が整理していました。

漑：昔のものは図筒にあります。

忠雄は壁の札を見る。

「北町巡路責任者：青木漑」

なぜ自分ではないかとは聞かない。

視線は長く止まる。

内景・与善堂奥の間・少し後

忠雄が荷を開ける。

衣は少ない。

外地の名冊数冊。

古い筆箱。

右手で扣を開ける動きが遅い。

志乃は戸口。

志乃：まだ痛むの。

忠雄：小字を書くと震える。

志乃：荷は持てる？

忠雄：軽いものなら。

二人はまた勤務の話のようになる。

漑が外を通る。

聞こえても止まらない。

内景・与善堂前の間・夕方

忠雄は経営帳を見る。

忠雄：今、帳は何冊に分けている。

漑：置薬、経営、薬師署名。臨時人手は別板。

忠雄：経営帳を見たい。

漑は閉じる。

漑：後で。

忠雄：店が今どう動くか知りたいだけだ。

漑：先に、店が今どう立っているか見て。

小腰掛けを指す。

漑：まず座って。

忠雄は凳を見る。

第一季では子どもが座った。

名無しの薬箱も置かれた。

第二季では旧巡路紙が重ねられた。

今、彼に座れと言われる。

忠雄は争わない。

座る。

結尾

店はいつも通り、箱を検め、薬を量り、帳を書く。

誰も彼のために仕事を止めない。

忠雄は小腰掛けで、皆が自分のすることを知っているのを見る。

苦しいのは、何もさせてもらえないことではない。

店が、彼の一言を待たずに動いていることだ。

EP98「位置簿と低い凳」

内景・与善堂前の間・午前

与善堂は人のほうが机より多い。

修司は新機で記録。

志乃は旧機で仕入れ。

忠雄は旧巡路帳を持ち、二つの机の間に立つ。

澤が持込箱を抱えて出る。

忠雄が左へよける。

志乃をふさぐ。

右へよける。

修司の抽斗をふさぐ。

宗一が薬包を持って通る。

皆が同時に言う。

澤：通して。

修司：紙。

志乃：荷札。

宗一：薬。

忠雄は立ったまま。

最後に戸口へ下がる。

辰夫が入ってきて、ぶつかりかける。

辰夫：今日は店に門柱が増えた？

忠雄は身を引く。

怒らない。

内景・与善堂前の間・少し後

移管箱を一つ処理する。

澤は巡路。

宗一は薬の清点。

修司は記録追加。

志乃は外地商号の照合。

忠雄は筆を取って住所を写し始める。

四人が同じ仕事の違う部分を同時にやる。

一枚の紙に三つの日付。

漑が紙を抜く。

漑：止めます。

皆が見る。

漑：誰が一番分かっているかじゃない。誰が先に書くかを、誰も知らない。

空の簿冊を出す。

表に書く。

「位置と交接」

宗一：また一冊か。

漑：これは薬も銭も書かない。

修司：職分を？

漑：今、誰が何を持つか。不在時に誰が継ぐか。どの記録を誰が見られるか。

忠雄：名を書けば固定するのか。

漑：固定しません。日付が来れば変えます。

志乃：山路の急変は。

漑：補記します。先に私が決めません。

漑は書く。

「久世宗一：管理薬剤師、日常経営」

「青木漑：北町巡路、持込調整、経営説明」

「新田修司：薬品記録、試用手順、薬師補助」

「青木志乃：山路、仕入、外部連絡」

忠雄で止まる。

忠雄が自分で言う。

忠雄：巡路清書、住所と運送接ぎ。不触薬。

漑が書く。

さらに足す。

「当面、経営帳閲覧なし」

忠雄が見る。

忠雄：よい。

答えは速い。

だが指が筆箱の縁を少し握る。

内景・与善堂前の間・午後

分担が見え、皆が持ち場へ戻る。

それでも宗一は二つの机の間を行き来する。

新机で薬を聞かれる。

旧机で荷を聞かれる。

帳場で金を待たれる。

漑は半日立ち続ける宗一を見る。

小腰掛けを薬棚と新机の間へ動かす。

宗一：何だ。

漑：座って。

宗一：病ではない。

漣： 凳も葉じゃない。

宗一： 道を塞ぐ。

漣は凳を半回転させる。

ちょうど塞がない。

宗一が座って試す。

葉棚、新机、帳場が見える。

すべての中心に立たなくてもよい。

結尾

忠雄は位置簿を持ち、自分の職分を見る。

忠雄： 先にどの旧図を清めればいい。

漣が第二季の図筒を指す。

「旧図、描き直し待ち」

宗一は小腰掛けに座っている。

初めて、すぐ立って全員の代わりに答えない。

EP99「旧い汐見町」

内景・与善堂前の間・午前

忠雄が「描き直し待ち」図筒から旧地図を出す。

紙縁は黄ばんでいる。

字はなお整っている。

新机と旧机の間に仮の長板を渡し、地図を広げる。

忠雄： まず現行総図を作る。旧図を底にし、確認済の路を濃く描く。

修司が新記録を置く。

三郎が山路口上を持って入る。

漉が北町巡路帳を開く。

四人が地図を囲む。

忠雄が描き始める。

右手の大字はまだ安定している。

線は時々揺れる。

記憶で描く。

旧橋。

廃井。

曲がり松。

移った三軒。

新しい北町巷は空白。

漉：旧橋は昭和七年に撤去。

忠雄：知っている。

横に「停止」と書く。

三郎：廃井は去年埋めた。

忠雄：巡路本にはない。

三郎：皆、新しい白桶を見るから。

忠雄が見る。

三郎が漉の第二季の歪んだ白桶を指す。

修司：この新巷に三軒配置。雨後は水がたまります。

忠雄：距離は。

漉：湯屋の裏壁から百六十歩。

忠雄：歩幅が一定でない。

漉：だから白桶、石段、壁も描く。

忠雄：正式図は統一すべきだ。

漉：正式図も、歩く人が見つけられないと。

忠雄は聞く。

浅い色で旧線を描く。

深い色で、実地確認済の新線。

証拠を拒んではいない。

ただ新線が増えるほど、顔は静かになる。

外景・与善堂前・午後

忠雄と漉が街口で新巷を確認する。

忠雄は歩数を測る。

漉は目印を見る。

二つはほぼ同じ位置を示す。

忠雄：お前の歩数は正しい。

漉：五年歩いた。

忠雄：昔、数え方を教えた。

漉：六つの時は、二十でよそを見た。

忠雄：今は見ない。

漉：今は仕事。

忠雄はうなづく。

「私に似た」とは言わない。

内景・与善堂前の間・夕方

漉が地図に最初の新巷を描く。

忠雄が消し具を取る。

手が漑の線の脇で止まる。

皆が見る。

忠雄は消し具を置く。

浅い色で自分の旧路脇に書く。

「旧」

結尾

新旧二色が同じ図に残る。

忠雄の図は美しい。

だが、もう彼一人のものではない。

EP100「藍布」

内景・与善堂奥の間・午前

新巡路図は巻いてもすぐ開く。

善平が紐で縛る。

紐が太く、紙縁を押しつぶす。

善平：幅のある布が要る。

漑が古衣箱を探す。

志乃が先に藍布を取り出す。

昔、冬着にするはずだった布。

布はまだ一枚。

色は記憶より深い。

志乃：これを使う。

漑：惜しくないの。

志乃：置いておいても、衣にはならない。

二人が布を広げる。

善平が鋏を取る。

志乃が反射的に押さえる。

善平が止まる。

漑が母を見る。

志乃：十五の時の寸法で測ってあった。

漑は布を肩へ当てる。

袖丈は手首の上。

漑：もう合わない。

志乃：継げば作れる。

漑：衣にしなくていい。

志乃：昔は欲しかった。

漑：昔欲しかったのは、あなたが帰って作ること。

言葉のあと、誰も継がない。

善平はゆっくり鋏を机へ置く。

母娘の場所を空ける。

志乃：荷が先に着けば、店は待てると思っていた。

漑：荷は毎回来た。

志乃：人が来なかった。

漑：うん。

志乃は藍布を見る。

志乃：箱帯にする？

漑：毎日、誰かが使う。

志乃：図の帯にする？

漑：それも使う。

二人で測る。

漑の体ではなく、薬箱の把手と巡路図の幅を測る。

内景・善平仕立屋・少し後

善平が藍布を何本か裁つ。

端に小さな余り。

志乃が取る。

漑：また私を測らないで。

志乃：針包を作る。

漑：針は使わない。

善平：いつか使う。

漑：じゃあ宗一の凳の座布に。

宗一（外）：要らん。

皆が笑う。

内景・与善堂前の間・夕方

最初の藍布箱帯が古い薬箱に結ばれる。

二本目は新巡路図に。

忠雄が図を受け取り、結び目を見る。

昔なら自分の結び方に直した。

今は、締まりを軽く確かめるだけ。

解かない。

結尾

藍布は、作れなかった冬着にはならない。

「完成した母の愛」にもされない。

ただ毎日、誰かの手に握られ始める。

EP101「擦り薄くなった紙」

内景・与善堂前の間・夜

与善堂は閉店。

皆は奥へ食事に行く。

忠雄だけが新巡路図の前に残る。

図には違う筆跡。

澤の太い線。

修司の細字。

三郎の現地印。

志乃の山路日付。

忠雄の淡い旧線。

忠雄は新紙を出し、清書を始める。

最初は字の大きさをそろえるだけ。

やがて白桶、軒色、三郎の石段を消す。

澤の太線を自分の細線へ直す。

旧橋を新路より目立たせる。

現地印が有用なことも、新路が事実なことも知っている。

それでも「正式図」は、一人の手で統一されていなければならない気がしてしまう。

消し具を何度もかける。

紙は薄くなる。

右手が震える。

左手で紙を押さえ、続ける。

内景・与善堂前の間・早朝

漑が最初に戸を開ける。

机の上の統一版を見る。

一目目、美しい。

二目目、自分の北町線が消えている。

三郎の白桶もない。

修司の転介点もない。

漑： どうして。

忠雄は起きている。

小腰掛けのそばに座る。

忠雄： 清書図には統一が要る。情報は残してある。書き方をそろえただけだ。

漑： 誰がそろえたの。

忠雄： 私が清書を担当している。

漑： 清書は、歩いた人を消すことじゃない。

忠雄： 正式路図に、皆が一筆ずつ書くわけにはいかない。

漑： 路はもともと一人で歩いていない。

忠雄： 一目で分かる図にしなければ。

漑は紙を灯へかざす。

擦った場所が透ける。

漑： この一目で何が見える？ あなたの字が整っていること？ それとも、私たちが歩いたこと？

忠雄は黙る。

漉：白桶が有用だと知ってる。

忠雄：知っている。

漉：新巷が本当だと知ってる。

忠雄：知っている。

漉：私の線が間違いじゃないことも。

忠雄：知っている。

漉：なら、なぜ消したの。

忠雄は自分の手を見る。

長い間。

忠雄：すべての道を人が補い終えるなら、帰ってきた私は何をする。

漉の怒りが一瞬止まる。

だが、すぐ慰めない。

漉：まず、私たちがしたことを消さないで。

内景・与善堂前の間・少し後

宗一、修司、志乃が順に出てくる。

誰も忠雄を囲んで説教しない。

修司は新機を開ける。

志乃は荷を検める。

漉は原図と統一版を並べる。

宗一が薄くなった紙を持つ。

紙は手の中で弱い。

宗一：あと二度擦れば、汐見町が机の下へ落ちる。

言い終えても宗一は紙を支える。

半拍。

誰も見ないし、笑いを待たない。

忠雄はぽかんと宗一を見る。

宗一は無表情。

漑は笑いをこらえる。

修司は下を向き、肩が少し動く。

忠雄も短く笑う。

消し具を置く。

結尾

忠雄は線をすぐ戻さない。

統一版の角にまず書く。

「廃、参考保存」

元の多人図を机に戻す。

藍布の帯は脇にある。

今回は、忠雄は消し具に触れない。

EP102「これはまだ帳か」

内景・与善堂前の間・午前

絹江が隣町の古い湯屋釜部品の知らせを持ってくる。

絹江：明後日見に行く。善平は喪服の仕立てで行けない。

宗一は小腰掛けで薬師署名を検めている。

宗一：私が行きます。

絹江が見る。

絹江：与善堂は。

宗一：交接します。

湊が顔を上げる。

宗一はもう位置と交接簿へ行く。

書く。

「宗一、不在二日」

「薬師事項：修司、資格範囲で担当」

「仕入、価格、経営決定：湊、現行権限内。重大事項延期」

「夜間閉店：湊」

「処理不可事項：停止」

修司が見る。

修司：薬師署名は受けます。旧方不明は止める。

宗一：書け。

湊：釜部品は何の巡路。

宗一：私用。

「私用」と言う時、筆が少し止まる。

絹江が寄る。

位置簿の色違いの名前、日付、空白を見る。

第二季の欄も見える。

「佐藤湯屋、飯一膳」

「未払」は赤線で消され、後ろは空白。

絹江：これは、まだ帳なのかい。

宗一は空欄を見る。

宗一：違います。

絹江：じゃあ何。

宗一は位置簿を見る。

宗一：人がいない時、日がどう続くか。

絹江：釜が壊れたみたいな言い方だ。

宗一：釜が壊れても、誰が見に行くかは書きます。

絹江：初めて出かけるのに、まだ交接かい。

宗一：書かないと漑に叱られる。

漑：叱りません。

宗一が見る。

漑：戻ってから書かせます。

外景・隣町停留所・翌日

宗一と絹江が帰り車を待つ。

薬箱はない。

帳机もない。

絹江が握り飯を渡す。

宗一が受ける。

反射で。

宗一：いくらですか。

絹江が見る。

宗一が止まる。

宗一：……それを聞いたのではありません。

絹江：では何を。

宗一：あなたは食べましたか。

絹江は包みからもう一つ出す。

絹江：食べるよ。

二人は並んで食べる。

内景・与善堂前の間・夜

漑は位置簿通りに閉店する。

修司は薬師署名を終える。

志乃は山路荷を検める。

忠雄は巡路図の前に立つ。

誰もいない時でも、消さない。

漑は鍵を共用鉤へ掛ける。

小腰掛けは空。

結尾

第二季の空白欄に、まだ金額はない。

けれど宗一は初めて、二つの完整な日で、その一部に答える。

EP103「また私の分まで決めた」

内景・与善堂前の間・夜

店は閉まっている。

宗一と絹江はまだ隣町。

漑と修司は裏庭で干し箱を取り込んでいる。

前の間には志乃と忠雄だけ。

新巡路図が長板に広げられている。

忠雄は過去記録を見ながら山路脇へ書く。

「志乃、初八出発」

「初十帰」

字はまだ美しい。

志乃が仕入紙を持って戻る。

日付を見る。

止まる。

志乃： また私の分まで決めたの。

忠雄が顔を上げる。

忠雄： その路は毎年行く。上嶺村は初九納め、初八に出るのが一番穏当だ。

志乃： だから、聞かなくていい？

忠雄： 位置簿を見た。初八は店に人がいる。

志乃： 店に人がいるかは見た。

日付を指す。

志乃： 私が行きたいかは聞いてない。

忠雄： 君は行く。

志乃： どうして分かるの。

忠雄： 葉路を切らせない人だから。

志乃： また答えた。

忠雄は筆を置く。

忠雄： 最も合理的な日付を書いただけだ。

志乃： 十四年前もそうだった。

忠雄の顔が変わる。

忠雄： それは違う。

志乃： どこが。

忠雄： 当時は勤務通知、車次、俸給があった。先に戻って相談していたら、席を取られてい

た。

志乃： だから、済ませてから知らせた。

忠雄： 毎月の送金は守った。

志乃： だから、行かないでほしいと言う資格はなかった？

忠雄： 与善堂に銭が要ることを、君は分かっていると思った。

志乃： 分かっていた。

忠雄： なら、なぜ今――

志乃： 分かることと、あなたが決めていいことは違う。

忠雄が立つ。

右手が筆箱に当たり、落ちる。

筆が散る。

二人でしゃがんで拾う。

忠雄が右手で細筆を取ろうとして震える。

志乃は見る。

代わりに全部拾わない。

忠雄は左手で筆を戻す。

内景・与善堂前の間・続き

忠雄： 聞いたら、君はやはり行くと言うのが怖かった。

志乃が目を上げる。

忠雄： 君が行くと言え、帰ってきても留められないと認めることになる。

志乃： 私が行くことと、この家を要らないことは違う。

忠雄： 分かっている。

志乃： 分かっていない。

声は荒げない。

志乃：分かっていたら、あの時先に聞いた。

忠雄：聞いたら、君は残れと言ったか。

志乃：分からない。

忠雄：では何が違う。

志乃：それが、二人で決めたことになる。

忠雄は黙る。

志乃：あなたは俸給も送金も車次も整えた。整いすぎて、家には通知だけが残った。

忠雄：心配を減らしたかった。

志乃：心配する資格をなくされた。

忠雄は地図を見る。

「初八出発」はもう書いてある。

忠雄：帰ってからも同じことをしていた。

志乃：そう。

忠雄：なぜ早く言わなかった。

志乃：私も昔、貨路を決め終えてから滞り知らせた。

二人が止まる。

これは一人が一人を裁く場ではない。

志乃：私たちは、正しくやれば聞かなくていいと思ってきた。

忠雄はゆっくり「初八」に線を引く。

消して真白にはしない。

細い跡を残す。

筆を志乃へ差す。

忠雄：では今、聞く。

志乃は受け取らない。

忠雄： いつ行く。

志乃： 先に店がいつ人を欠くか見る。

忠雄： また店から見る。

志乃： 店も見る。私が行きたいかも言う。

忠雄： 行きたいのか。

志乃が初めてまっすぐ答える。

志乃： 行きたい。あの路は何年も歩いた。責任だけじゃない。

忠雄がうなづく。

忠雄： なら、行くといい。

志乃： あなたが許すことじゃない。

忠雄： 分かっている。

少し置く。

忠雄： 聞こえた、という意味だ。

内景・与善堂前の間・少し後

二人は地図を持ち、位置と交接簿へ行く。

志乃が初八の人手を確認する。

忠雄は手を出して代筆しない。

志乃が自分で書く。

「初九出発」

「初十一帰」

「初八、在店して仕入交接完了」

筆を忠雄へ渡す。

忠雄は地図脇にだけ書く。

「日付、本人確認」

結尾

二人が巡路図へ戻る。

「初八」には線の跡。

新しい日付は脇にある。

誰も、間違いをなかったことにしない。

忠雄は筆を、二人とも届く机の中央へ置く。

EP104「遠山家の空箱」

内景・与善堂前の間・午前

辰夫が外地からの包みを抱えて入る。

辰夫：軽い。薬じゃない。

包み紐には遠山家の旧住所。

漣の手が止まる。

第一季で移り、減価で空箱を買い取った遠山家。

皆で包みを開ける。

中はあの旧空箱。

薬はない。

現行の封紙もない。

当時の空箱買受票。

子どもの絵が一枚。

絵の与善堂の灯は屋根より大きい。

宗一：灯油代のかかる絵だ。

辰夫：子どもは灯油帳をつけない。

短箋もある。

「子が大きくなり、家では旧箱を使わなくなりました。空箱はまだ丈夫です。与善堂でよければ修用にお戻しします。」

忠雄が箱を見る。

忠雄：もう買い取られたのに、なぜ戻す。

澤：戻したかったから。

忠雄：子どもへ残してもよかった。

澤：残さなくてもいい。

忠雄：これは返却か。

澤：違います。箱はもう遠山家のものです。

帳を出す。

旧配置資産には戻さない。

別行。

「旧空箱、受贈」

宗一が箱を検める。

宗一：展示用なら可。直接装葉は不可。旧印を除き、木縫いを見ます。

修司：再使用なら、現行箱体規則で修理。

善平：扣はまだいい。

源造が嗅ぐ。

源造：魚の匂いがない。

澤：山へ移った家です。

源造：山にも魚はいる。

皆、相手にしない。

内景・与善堂裏庭・午後

忠雄が旧地図を取る。

遠山家の旧住所を探す。

脇に「帰」と書きかける。

筆が止まる。

漑：何を書くの。

忠雄：箱が戻った。

漑：人は戻っていない。

忠雄：箱も少しは。

漑：地図は路を記す。郷愁は記さない。

忠雄は見る。

「帰」をやめる。

書く。

「遠山家旧址、転居済」

結尾

空箱は修理架へ。

古票と子どもの絵は箱内へ挟む。

与善堂は箱を離す時、戻ることを求めなかった。

戻ってきても、離れた人は皆帰るものだとは解釈しない。

EP105「宮田良平」

内景・与善堂前の間・午前

雪夜の名無し薬箱が小腰掛けに置かれている。

上には素布。

向かいに六十前後の男、宮田正吉。

宮田良平の弟。

机上には白紙、鉛筆、水。

写真も旧帳も、まだ出さない。

漑：まず箱は見ません。

正吉がうなづく。

漑：覚えている特徴を描いてください。普通の箱にあるものではなく、お兄さんの箱だけのところを。

正吉が鉛筆を握る。

箱左側を描く。

浅い刀傷二本。

長短一本ずつ。

銅扣。

扣片の向きが普通と逆。

最後に底角。

濃い補木。

正吉：刀傷は、兄が薬紙を開ける時につけた。短いのが上、長いのが下。

漑：確かですか。

正吉：長いのが箱底に近かった気がする。

言ってから迷う。

正吉：逆だったかもしれない。

漑は直さない。

図を脇へ置く。

内景・与善堂前の間・続き

宗一が素布を取る。

薬箱が現れる。

反装の銅扣。

濃い補木。

左側の二本の刀傷。

正吉が身を乗り出す。

正吉：これだ。

漑はすぐ頷かない。

正吉の図と箱を並べる。

反扣は一致。

補木位置も一致。

ただ刀傷は、実物では長いほうが上、短いほうが下。

最初の口述と逆。

漑：二つ一致。一つは記憶と逆です。

正吉：何年もたっている。

漑：だから、記憶だけで名は書けません。

正吉は失望する。

だが急かさない。

座り直す。

内景・与善堂前の間・少し後

宗一が旧写真を出す。

宮田家の門前。

良平が脇に立ち、壁際に薬箱。

写真端はぼやけている。

修司が玻璃の拡大鏡を持つ。

反装扣は見える。

底角の濃い補木も見える。

刀傷は見えない。

箱号も見えない。

正吉：写真なら証明になるでしょう。

宗一：宮田家に、こう修理された箱があった証です。

漑：今ここにある箱が同じものだとは、まだ言えません。与善堂の旧箱は形が近い。

正吉は写真を見る。

正吉：兄の死後、物は散った。残ったのはこれだけです。

漑：それは、一部を証明しています。

正吉：あと何が。

漑：商号記録です。

内景・与善堂前の間・少し後

庄吉が大正十二年水害の残頁を持ってくる。

紙端が欠けている。

一行だけ。

「宮田――」

その後ろに半分の箱号。

箱底の残号も半分。

まだ直接は結べない。

漑は残頁、箱底拓本、旧住所紙を並べる。

庄吉：旧巡路は訪問季節別で、町名順だけではない。

漉が正吉へ聞く。

漉：配置員は、いつ頃来ましたか。

正吉：春。

止まる。

正吉：いや。兄は梅雨で湿るのを嫌って、毎年梅雨前に先に箱を見せた。庭の藤が散った頃です。

庄吉が次の残頁をめくる。

梅雨前巡路。

宮田の行と半箱号。

旧住所は河東第二巷。

忠雄が横に立つ。

旧図を見る。

忠雄：大正十年の河東第二巷は、後に三丁目。訪問路は藤井口から入ります。

記憶で証拠を足さない。

旧地名変換だけを示す。

漉が旧住所紙を照合する。

住所対応。

半箱号と箱底残号がつながる。

反扣の修理記号も写真と一致。

最後の穴が閉じる。

内景・与善堂前の間・続き

全員が静か。

正吉は「もういいですか」とは聞かない。

待つ。

宗一が最初から見直す。

独立口述。

物件特徴。

写真。

残号と住所。

修司が写真の扣片方向を再確認。

庄吉が残頁行番号を確認。

漑が紙を順に重ねる。

漑：確認できます。

正吉は目を閉じ、ただ一度うなずく。

大きく泣かない。

漑は新木牌を取る。

書く。

「宮田良平」

さらに書く。

「昭和十年、本日確認」

正吉が日付を見る。

正吉：昔の日ではないのですか。

漑：昔は分からなかったからです。

正吉：今になって、兄のものになる。

漑：今、名を書くだけの証拠がそろいました。分からなかった年月を消すわけではありません。

第一季の「照合待ち」旧木牌を帳へ挟む。

新木牌を空箱の外へ掛ける。

結尾

誰も話さない。

最後に、木牌が箱壁に軽く当たる。

かつ。

EP106「未確認」

外景・汐見町新巷・早朝

忠雄は巻いた新巡路図を背負っている。

漑が前を歩く。

十四年前にはなかった道を確認しに行く。

路口に白水桶。

先に新橋。

忠雄は橋の向こうの岐路で止まる。

左は川沿い。

右は上り坂。

図は橋までしかない。

忠雄が筆を取る。

昔の経験では、山路は高い方が水を避ける。

右線を描こうとする。

筆先が落ちる前に止まる。

忠雄：お前はどちらに行く。

漑：行く家によります。

忠雄：上嶺村の接ぎは。

澤：左。右は雨後に崩れました。

忠雄が右坂を見る。

外からは分からない。

忠雄：旧地勢図では右が安定。

澤：それは崩れる前の図です。

忠雄はうなずく。

旧経験を弁護しない。

地図の岐路脇に赤で書く。

「未確認」

筆先が止まる。

忠雄が低く読む。

忠雄：未確認。

行政の宣告ではない。

自分がまだ知らないと初めて認める声。

澤：もうここまで来ています。

忠雄：路口に来たことと、二つとも歩いたことは違う。

澤が見る。

忠雄：この四字は、思ったより難しい。

澤：字も震えました。

忠雄：手ではない。

外景・新橋脇・少し後

忠雄：左道を一度、連れて行ってくれるか。

「私が連れていく」ではない。

澤はすぐ出発しない。

位置簿の副頁を開く。

漣：今日午前には店へ戻る必要があります。明日は北町持込が少ない。

忠雄：では明日。

漣が書く。

「明日、漣・忠雄同行確認」

忠雄：巡路も予約か。

漣：人は予約する。

外景・少彦名社外・夕方

志乃が石段の下で待っている。

手には忠雄が長く掛けていた帰り待ち守り。

忠雄が見る。

志乃：外地勤務が終わったなら、返す頃だと思って。

忠雄が受け取る。

中には乾いた当帰の一片。

忠雄：ずっと掛けていたのか。

志乃：掛けていたことと、ずっと門口で待っていたことは違う。

忠雄がうなずく。

二人で守りを神社へ返す。

願掛けはしない。

これでもう離れないとも言わない。

結尾

新巡路図が巻かれる。

藍布で結ぶ。

紙端に見える。

「未確認」

欠陥ではない。

忠雄が初めて、空白を埋め尽くすことで自分を証明しない。

EP107「明朝、一緒に見る」

内景・与善堂前の間・早朝

戸が開く。

宗一と絹江が隣町から戻る。

宗一は釜部品の見本。

絹江は空の弁当箱。

漑はもう店を開けている。

修司は新機で昨日の薬師記録を終えている。

志乃は仕入交接を済ませている。

忠雄は地図脇に「明日同行」と書いている。

宗一は荷を置き、自然に経営帳へ手を伸ばす。

途中で止まる。

漑が見る。

帳は渡さない。

宗一は手を戻す。

宗一：明朝、一緒に見る。

漑：今が朝です。

宗一：明日の朝です。

漑：今日漏れるのは怖くないの。

宗一：怖い。

漑：それでも見ない？

宗一：漏れていたら、明日一緒に直す。今は先に開ける。

この言葉は、休みを取るより難しい。

内景・与善堂奥の間・夕方

宗一が位置と交接簿を明日に開く。

絹江が見本紙を返しに来る。

宗一：明晩、店には私がいません。

絹江：それで。

宗一：飯を一緒に。

絹江が見る。

絹江：湯屋の予約かい。それとも私に聞いているのかい。

宗一：あなたに。

絹江：先に明晩を空けな。

宗一は簿を見せる。

そこにはもう書かれている。

「明晩、宗一不在」

「漑、閉店」

絹江：もう書いたの。

宗一：空けました。

絹江：飯代は。

宗一：その時――

絹江が見る。

宗一が言い直す。

宗一：それを聞いたのではありません。

絹江が笑う。

絹江：明晩。

内景・与善堂前の間・夜

修司が神棚の外側に立つ。

自分の帰り待ち守りを見る。

漣が近づく。

修司：これも返す頃だ。

漣：また行くの。

修司：まだ。

漣：なら、なぜ今。

修司：僕はもう一度帰ってきた。これから離れる時は日付を書くべきで、これに帰りを言わせるべきじゃない。

漣は代わりに取らない。

修司が自分で外す。

翌日、神社へ返すと二人で決める。

結尾

位置簿には書かれている。

「明晩、宗一不在。漣閉店。」

その隣に空白行。

修司はまだ新しい出発日を書いていない。

ただ、待つことを御守から外し、自分の手へ戻そうとしている。

EP108「いつも通り」

内景・与善堂前の間・早朝

修司が金沢からの手紙を持っている。

漑は今日の持込票を分けている。

修司：金沢薬局、人手不足。十日だけ臨時勤務。

漑の手が一瞬止まる。

行くのかとは先に聞かない。

漑：何日に出るの。

修司：初三の早汽車。初十二に戻る。

漑：手元の仕事は。

修司が交接紙を新機へ置く。

「試用記録は宗一署名」

「玻璃瓶検査は帰後へ延期」

「済みの転介票、綴込」

「未了二軒、追加聞取停止」

漑が一つずつ見る。

漑：帰りが変わったら。

修司：当日電報、または一番早い手紙。分からない時は、分からないと書く。

漑：宿泊紙は。

修司：寝所、十日だけ残していい？

漑：位置簿は外出と書く。永久とは書かない。

修司がうなづく。

自分の名を見る。

修司：帰ってから、僕の位置はある？

漉：帰ってから書く。

修司：先に残せない？

漉：「帰期記載済」は残せる。

漉が位置簿へ書く。

「新田修司、十日外出」

「帰期：初十二」

「帰後、職責再確認」

修司が読む。

修司：「分からない」より多い。

漉：永遠ほど多くない。

修司：足りる。

外した帰り待ち守りを包みに入れる。

修司：駅前で神社へ返す。

漉：私も行く？

修司：君は店を開ける。

漉：なら、自分で。

修司：今回は道が分かる。

二人が少し笑う。

内景・与善堂前の間・持込日少し後

源造が薬箱を抱えてくる。

箱底から水が落ちる。

魚の匂いもある。

源造：水は一滴もつけとらん。

漉が床の水を見る。

漉：床が自分で泣いたの？

源造：海風が強い。

第一季の漉なら、屋根か奥か誰が濡らしたか追った。

今はまず、検査布へ箱を置く。

箱底を見る。

外包を開く。

箱扣を見る。

宗一は小腰掛けに座っている。

箱を奪わない。

修司は新機脇で出発前だが、自分の職責分だけ受湿批次を記録する。

志乃が裏庭から乾布を持ってくる。

忠雄は新巡路図を脇へ巻き、机面を空ける。

漉が書く。

「箱底湿り」

「葉包分検」

「木箱乾燥待ち」

源造：どう濡れたか聞かんのか。

漉：今は、使えるかを見るのが先。

源造：言い訳を三つ用意したのに。

宗一：魚に聞かせろ。

源造はぶつぶつ言いながら、裏庭で空箱を運ぶ。

内景・与善堂前の間・夕方

湿箱は裏庭の底下。

藍布の箱帯は別に洗われ、滴っている。

新机の下には旧木片が見える。

壁の新巡路図は色分けされている。

岐路には「未確認」が残る。

宮田良平の新木牌は空箱の外。

遠山家の空箱は修理架。

修司が荷を背負う。

今回は夜に紛れて行かない。

澤は門内に立つ。

修司：初十二。

澤：書いた。

修司：帰ったら――

澤：帰ってから。

修司はうなづく。

正面から出る。

澤は街口まで見る。

追わない。

見ないふりもしない。

内景・与善堂前の間・夜

奥から志乃。

志乃：飯が冷めるよ。

忠雄が藍布で、多人数筆跡の巡路図を結ぶ。

宗一が帳場下から包んだ弁当箱を取る。

漑：家で食べないの。

宗一：絹江さんの所へ。

漑：湯屋にも飯があるの。

宗一：今日はある。

誰も冷やかさない。

宗一は弁当箱を提げて出る。

忠雄と志乃は先に奥へ。

漑は帳机に座り、最後の一行を終える。

立つ時、灯のそばで少し歪んだ小腰掛けを元へ戻す。

帳本を閉じる。

店の鍵を共用木鉤へ掛ける。

仕事灯を低くする。

吹き消さない。

明朝また灯せるだけ、芯を残す。

最後画面

同時に見える。

底下で乾く旧薬箱。

閉じた帳本。

共用鍵。

灯のそばの空いた小腰掛け。

二つの机。

新机下の旧木。

巻かれた多人巡路図。

奥から聞こえる椀と箸の音。

戸外では、宗一が弁当箱を提げて街口を通る。

与善堂は今日、戸を閉める。

明日も、普通に開ける。

****第三季完****